青森県埋蔵文化財調査報告書　第450集

寺屋敷平遺跡

てらやしきたい

― 浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 ―

２００８年３月

青森県教育委員会

東から（奥に岩木山を望む）

南西から（奥に八甲田を望む）

遺　跡　遠　景

完　掘（NW →）

墨書土器出土状況

墨　書（図 14-1）

カマド煙道部検出状況（NW →）

カマド遺物出土状況（N →）

第６号竪穴住居跡

序

青森市浪岡地区には、国史跡高屋敷館遺跡をはじめ、平安時代の遺跡が数多く所在しています。

青森県埋蔵文化財調査センターでは、浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業に伴い、平成18年度に青森市寺屋敷平遺跡の発掘調査を実施しました。

この調査によって、平安時代の竪穴住居跡や土坑・溝跡・井戸跡などが発見され、寺屋敷平遺跡が平安時代の集落跡であることが分かりました。また、寺屋敷平遺跡から出土した土師器や須恵器のなかには、文字や記号が墨書きされたものやヘラ書きされたものがあります。

本報告書は、これらの調査結果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の保護と調査・研究等に広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施、出土品の整理、報告書の刊行にあたり、ご指導、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く感謝申し上げます。

平成20年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所　長　　末　永　五　郎

例　　言

1　本報告書は、平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う青森市寺屋敷平遺跡の発掘調査報告書である。

2　寺屋敷平遺跡は青森県青森市浪岡大字吉野田字荷越沢41－668外に所在し、青森県遺跡台帳に青森県遺跡番号29059として登録されている。

3　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター　佐々木文化財保護主査、田中文化財保護主査が分担して行った。依頼原稿は文頭に執筆者名を記した。

4　発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県農林水産部農村整備課が負担した。

5　報告書作成にあたり、資料・試料の分析・鑑定については、以下のとおり委託した（敬称略）。

石器の石質鑑定	青森県立八戸中央高等学校教諭　佐々木辰雄
炭化材の放射性炭素年代測定	株式会社　加速器分析研究所
遺構内採取土壌のテフラ分析	国立大学法人　弘前大学理工学部教授　柴　正敏
炭化材の樹種同定	株式会社　パレオ・ラボ

6　本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行の５万分の１の地形図「青森西部」を複写したものである。

7　本報告書における用例は以下のとおりである。

１）挿図中の方位は座標北を示す。

２）挿図の縮尺は、各図ごとにスケール・縮尺率を付した。

３）挿図中の柱穴・ピットには、検出面からの深さを（　）に示した。

４）遺物写真の縮尺は統一していない。個々の遺物番号は挿図番号と一致する。

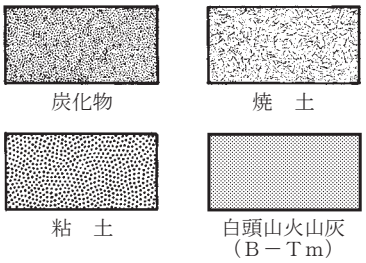
５）遺物の観察表・計測値を巻末に付した。

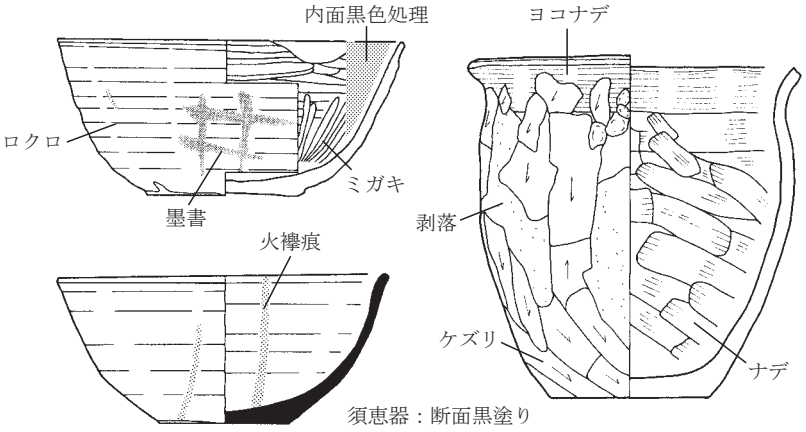
8　引用・参考文献は巻末に収めた。

9　発掘調査及び報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10　本報告書作成に際し、下記の諸氏から御協力・御助言をいただいた（敬称略・五十音順）。

工藤　司、成田誠司





凡　　例

目　　次

口絵
序
例言
目次
挿図目次・写真目次

第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
　第３節　調査方法 …… 2
　第４節　調査の経過 …… 3
第２章　遺跡の環境
　第１節　周辺の遺跡 …… 7
　第２節　遺跡周辺の地形及び地質 …… 9
第３章　検出遺構と出土遺物
　第１節　竪穴住居跡 …… 13
　第２節　掘立柱建物跡 …… 32
　第３節　土坑 …… 34
　第４節　溝跡 …… 39
　第５節　井戸跡 …… 58
　第６節　焼土跡 …… 59
　第７節　遺構外出土遺物 …… 60
第４章　理化学的分析
　第１節　寺屋敷平遺跡の放射性炭素年代測定 …… 64
　第２節　寺屋敷平遺跡の火山灰分析 …… 69
　第３節　寺屋敷平遺跡の炭化材の樹種同定および炭化植物遺体同定 …… 71
第５章　まとめ …… 74

　引用参考文献 …… 76
　遺物観察表 …… 77
　写真図版 …… 81
　報告書抄録 …… 101

挿　図　目　次

図１　路線図 …… 4
図２　遺構配置図 …… 5
図３　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 8
図４　地形分類図 …… 9
図５　基本層序 …… 11
図６　第１号竪穴住居跡 (1) …… 14
図７　第１号竪穴住居跡 (2) …… 15
図８　第２号竪穴住居跡 …… 16
図９　第３号竪穴住居跡 …… 17
図 10　第４号竪穴住居跡 (1) …… 19
図 11　第４号竪穴住居跡 (2) …… 20
図 12　第５号竪穴住居跡 …… 21
図 13　第６号竪穴住居跡 (1) …… 23
図 14　第６号竪穴住居跡 (2) …… 24
図 15　第７号竪穴住居跡 …… 25
図 16　第８号竪穴住居跡 …… 26
図 17　第９号竪穴住居跡 (1) …… 27
図 18　第９号竪穴住居跡 (2) …… 28
図 19　第 10 号竪穴住居跡 …… 30
図 20　掘立柱建物跡 …… 33
図 21　土坑 (1) …… 35
図 22　土坑 (2) …… 37
図 23　溝跡 (1) …… 40
図 24　溝跡 (2) …… 41
図 25　溝跡 (3) …… 42
図 26　溝跡 (4) …… 43
図 27　溝跡 (5) …… 45
図 28　溝跡 (6) …… 46
図 29　溝跡 (7) …… 47
図 30　溝跡 (8) …… 48
図 31　溝跡 (9) …… 49
図 32　溝跡 (10) …… 50
図 33　溝跡 (11) …… 51
図 34　溝跡 (12) …… 53
図 35　溝跡 (13) …… 54
図 36　溝跡 (14) …… 55
図 37　溝跡 (15) …… 56
図 38　井戸跡 …… 58
図 39　焼土跡 …… 59
図 40　遺構外出土物 (1) …… 61
図 41　遺構外出土物 (2) …… 62
図 42　遺構外出土物 (3) …… 63

写　真　目　次

写真１　基本層序・作業風景 …… 82
写真２　竪穴住居跡(1) …… 83
写真３　竪穴住居跡(2) …… 84
写真４　竪穴住居跡(3) …… 85
写真５　竪穴住居跡(4) …… 86
写真６　竪穴住居跡(5)・掘立柱建物跡 …… 87
写真７　土坑(1) …… 88
写真８　土坑(2) …… 89
写真９　土坑(3)・溝跡(1) …… 90
写真10　溝跡(2) …… 91
写真11　溝跡(3) …… 92
写真12　溝跡(4) …… 93
写真13　溝跡(5) …… 94
写真14　溝跡(6)・井戸跡・焼土跡 …… 95
写真15　出土遺物(1) …… 96
写真16　出土遺物(2) …… 97
写真17　出土遺物(3) …… 98
写真18　出土遺物(4) …… 99
写真19　墨書・刻書 …… 100

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

青森県農林水産部農村整備課では、平成13年度から旧浪岡町（現　青森市浪岡）管内で浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業（農道改良事業）を計画していたが、事業計画が具体化した平成15年８月には、当該事業を担当する中南地方農林水産事務所水利防災課（現　中南地域県民局地域農林水産部水利防災課）と青森県教育庁文化財保護課が事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。事業予定地内には周知の寺屋敷平遺跡と中平遺跡が所在するので、農道の基本設計完了後に現地調査（分布調査）を実施し再度協議することになった。翌平成16年10月に水利防災課と文化財保護課が現地調査・協議を行い、平成17年度に文化財保護課が寺屋敷平遺跡の確認調査を実施し、平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが担当して寺屋敷平遺跡の本発掘調査と中平遺跡の確認調査を実施することを申し合わせた。寺屋敷平遺跡の確認調査は平成17年６月に行われ、本発掘調査の対象範囲が確定したので、文化財保護課と埋蔵文化財調査センターが平成18年度の発掘調査計画について打合せを行った。平成18年４月には発掘調査に先立って、東地方農林水産事務所水利防災課（現　東青地域県民局地域農林水産部水利防災課　青森市と浪岡町の合併に伴って平成17年度から所管事業が変更になった）、文化財保護課、埋蔵文化財調査センターが現地で打合せを行い、平成18年度の寺屋敷平遺跡と中平遺跡の調査の進め方等について協議・確認した。なお、寺屋敷平遺跡に係る土木工事等のための発掘に関する届出は、平成15年６月に中南地方農林水産事務所長名で提出され、同年８月に文化財保護課から当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

第２節　調査要項

１　調査目的

浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する寺屋敷平遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して地域社会の文化財の活用に資する。

２　発掘調査期間　　平成１８年４月２０日～同年９月２９日

３　遺跡名及び所在地　　寺屋敷平遺跡（青森県遺跡番号　２９０５９）
青森市浪岡大字吉野田字荷越沢４１－６６８外

４　調査面積　　６，０００平方メートル

５　調査委託者　　青森県農林水産部農村整備課

６　調査受託者　　青森県教育委員会

７　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

８　調査体制

調査指導員　　市川金丸　元青森県考古学会会長（考古学）

調査員　　工藤雅樹　東北歴史博物館館長（考古学）

山口義伸　青森県立浪岡高等学校教諭（地質学）

調査担当者　　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長　　白鳥　隆昭（現　青森県立郷土館館長）

次　長　　三浦　圭介（平成１９年３月退職）

総務ＧＬ　　櫻庭　孝雄

調査第二ＧＬ　　工藤　　大

文化財保護主査　　佐々木雅裕

文化財保護主査　　田中　珠美

調査補助員　　加藤　　渉　　宮本　高行

野月　夕湖　　泉　ちひろ

第３節　調査方法

調査はグリッド法を基本とする分層発掘とした。

グリッドは４ｍ四方とし、日本測地系第Ｘ系のＸ＝81,500.000、Ｙ＝-23,300.000を「ＩＡ－１」とし、Ｘ軸には北から南にむかって算用数字を付し、Ｙ軸には西から東にむかってＡ～Ｙの25字のアルファベットを付した。グリッド名は北西の杭のもつ、アルファベットと算用数字の組み合わせによって呼称した。東西方向はアルファベットの数を超えるため、アルファベットの頭にローマ数字を付した。

標高値は、工事用基準点から必要に応じて適宜移設し使用した。

遺構の精査は、必要に応じて二分法・四分法を採用し、土層観察用のベルトを残しながら行った。遺構の平面図・断面図等の作成は、グリッド杭を用いた遣り方測量とトータルステーションによる測量を併用した。縮尺は１/20を基本としているが、種類や規模によって１/10その他とした。遺物の取り上げは、グリッド単位あるいは遺構単位で層位ごとに行い、必要に応じて平面図の作成・標高の記録を行った。

土層の名称は、基本層序については表土から下位にむかってローマ数字を付し、細分される土層にはさらに小文字のアルファベットを付加した。遺構内の堆積土については上位から下位にむかって算用数字を付した。土層観察にあたっては、『新版標準土色帖』（小山　竹原　2001）を用いて注記した。

写真撮影は適宜行うこととし、主として35㎜を使用した。カラーリバーサル・モノクロ２種類のフィルムを使用し、状況に応じてデジタルカメラも使用した。

なお、調査の際に付した遺構の略称は次のとおりである。SI＝竪穴住居跡、SB＝掘立柱建物跡、SK＝土坑、SD＝溝跡、SE＝井戸跡、SN＝焼土跡。

第４節　調査の経過

４月20日～５月31日まで、中平遺跡の確認調査をおこなった。

６月からは寺屋敷平遺跡の調査に着手した。６月１日から重機を用いた表土の除去を行い、５日・６日にプレハブを移設し、７日に調査器材等の搬入・環境整備をおこなった。現道及び進入路を確保する必要があることから、農道４号・19号・23号をそれぞれ分割して調査することとなった。

まず最初に、農道４号の調査に着手した。付け替え道路が不要な中央部の表土除去・遺構確認を行った。竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑・溝跡などが検出されたが、りんご園の造成により削平を受けており、遺構の残存状況は良くなかった。引き続き、現道を確保しながら、西側の調査に着手した。この区域は遺跡西側の溜池に向かって緩やかな傾斜地となっており、溝跡が複数検出された。８月上旬には道路を振り替えて、残りの部分の調査を行った。４号の西端は調査幅が狭く、現道を確保しながらの調査は難しいため、トレンチ調査による試掘を先行させて行った。遺構は確認されず、調査を終了した。

農道４号から北側に延びる水道管埋設のための調査が追加となり、７月下旬に着手した。調査区は北側の谷へ落ちる斜面地で、斜面上位では住居跡が検出されたが、斜面下位は谷地形の上部に盛り土が盛られている状況であった。

７月上旬、農道23号の調査に着手し、付け替え道路が不要な部分から調査を行った。東側では平安時代の竪穴住居跡が４軒検出され、なかでも第６号竪穴住居跡は今回の調査で全容が明らかになった唯一の住居跡である。床面からは墨書の土師器坏が出土し、カマドの残存状況も良好であった。西側は緩やかに傾斜しており、基本層序では白頭山火山灰の堆積もみとめられた。この区域では井戸跡と溝跡が検出された。８月下旬には、道路を振り替えながら、残りの中央部の調査を行い、複数の溝跡を検出した。

８月上旬、農道19号の調査に着手した。付け替え道路が不要な西側から調査を行い、平安時代の外周溝を伴う住居跡や土坑が検出された。引き続き東側の調査に着手したが、谷が入り込んでおり、重機を用いて表土の除去を行ったが、現地表面から３ｍ掘り下げても黒色土が堆積している状況であった。遺物も出土せず、遺構確認面はさらに下と考えられたが、調査区幅を考慮すると調査区壁の崩落の危険性も考えられることから、調査を行わないこととした。

道路の振り替え等の問題もなく、調査も順調に進んだことから、９月29日、調査器材や出土遺物等を搬出し、調査を終了した。

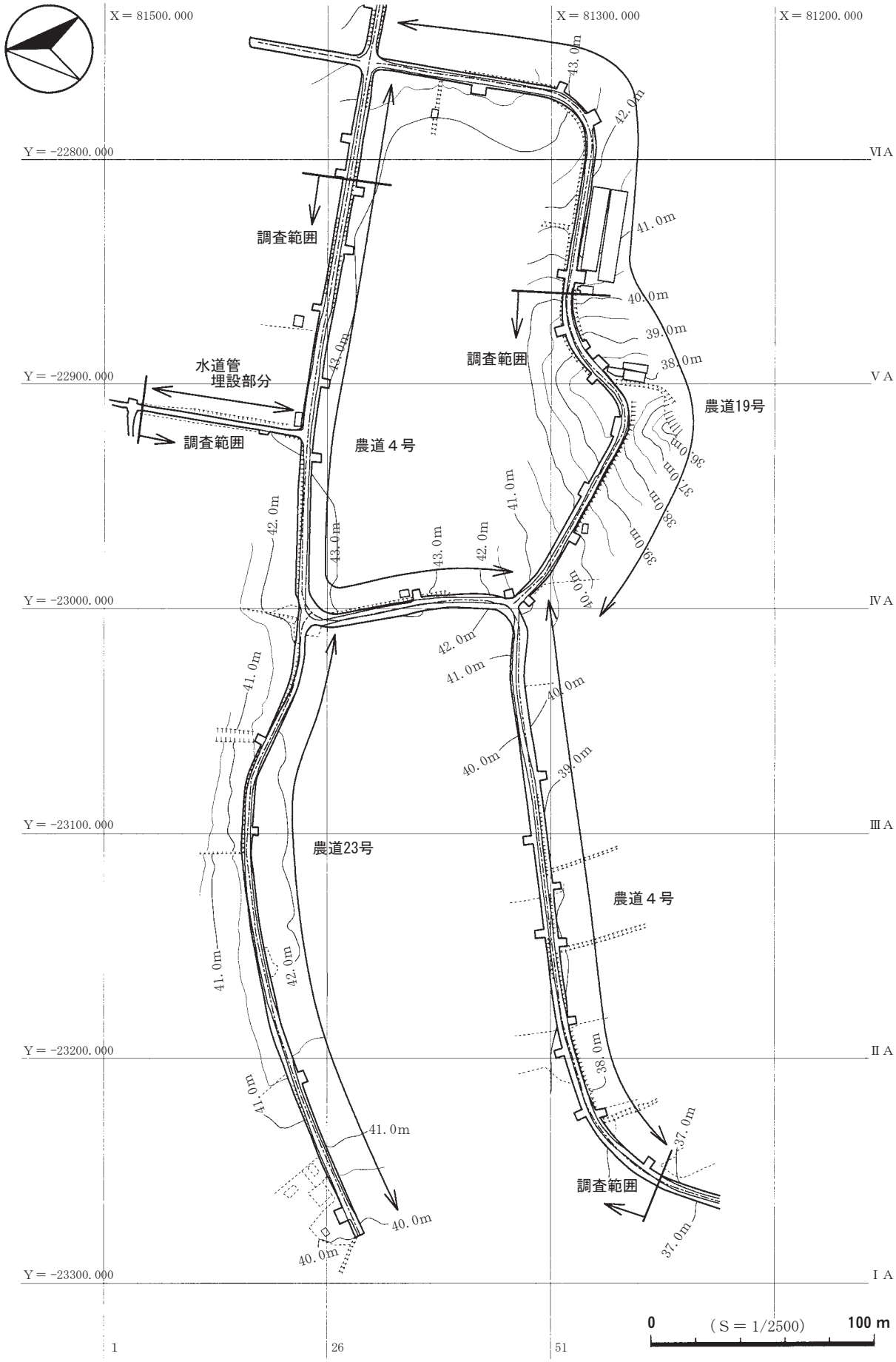

X＝81500.000
X＝81300.000
X＝81200.000
Y＝-22800.000
Y＝-22900.000
Y＝-23000.000
Y＝-23100.000
Y＝-23200.000
Y＝-23300.000
ⅥA
ⅤA
ⅣA
ⅢA
ⅡA
ⅠA
1
26
51
調査範囲
水道管
埋設部分
農道４号
農道19号
農道23号
43.0m
42.0m
41.0m
40.0m
39.0m
38.0m
37.0m
36.0m
0
（S＝1/2500）
100 m

図１　路線図

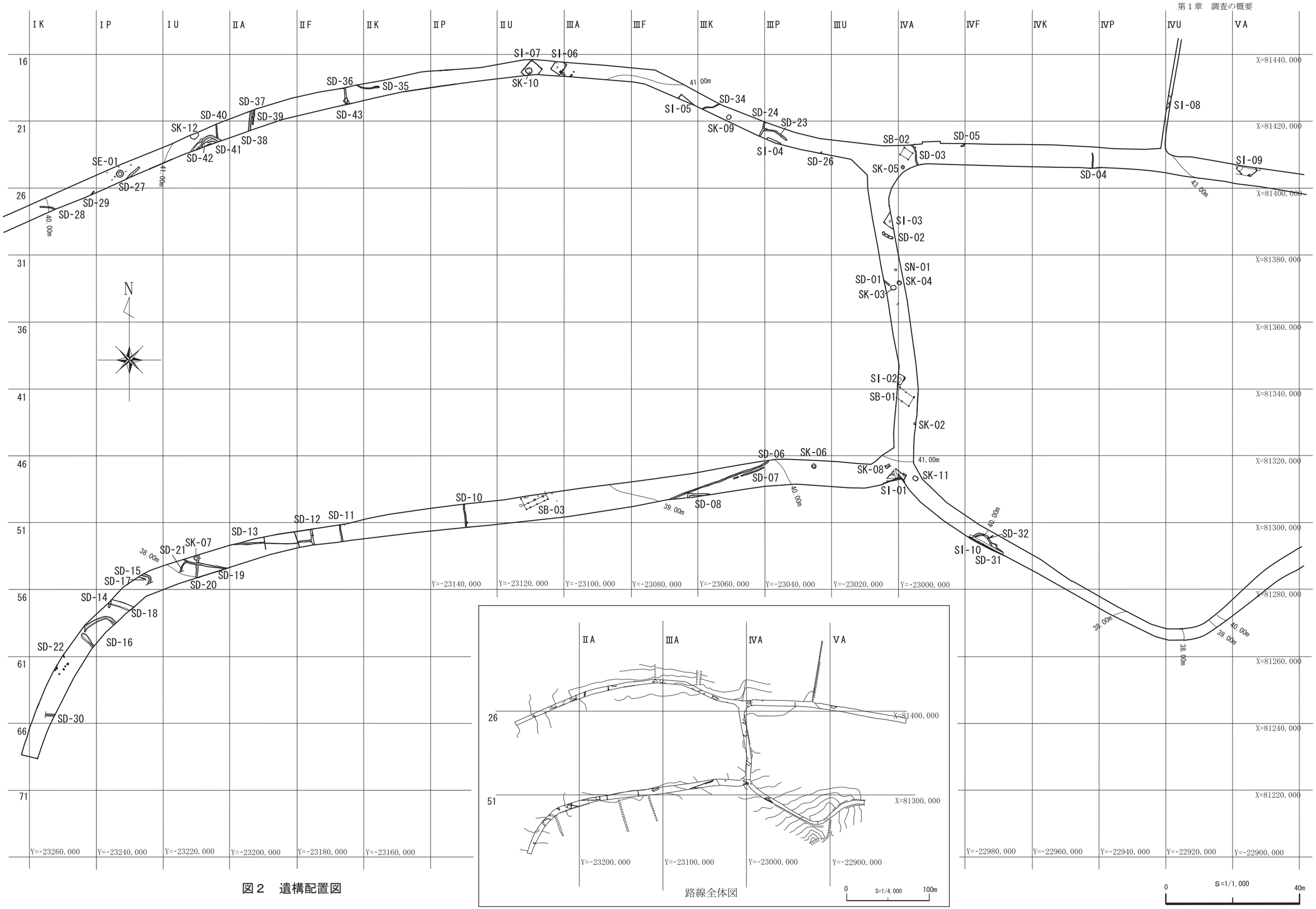

ⅠK
ⅠP
ⅠU
ⅡA
ⅡF
ⅡK
ⅡP
ⅡU
ⅢA
ⅢF
ⅢK
ⅢP
ⅢU
ⅣA
ⅣF
ⅣK
ⅣP
ⅣU
ⅤA
16
21
26
31
36
41
46
51
56
61
66
71
X=81440.000
X=81420.000
X=81400.000
X=81380.000
X=81360.000
X=81340.000
X=81320.000
X=81300.000
X=81280.000
X=81260.000
X=81240.000
X=81220.000
Y=-23260.000
Y=-23240.000
Y=-23220.000
Y=-23200.000
Y=-23180.000
Y=-23160.000
Y=-23140.000
Y=-23120.000
Y=-23100.000
Y=-23080.000
Y=-23060.000
Y=-23040.000
Y=-23020.000
Y=-23000.000
Y=-22980.000
Y=-22960.000
Y=-22940.000
Y=-22920.000
Y=-22900.000
N
SI-07
SI-06
SK-10
SD-36
SD-35
SD-43
SD-37
SD-39
SD-40
SK-12
SD-38
SD-41
SD-42
SE-01
SD-27
SD-29
SD-28
40.00m
41.00m
SI-05
SD-34
SK-09
SD-24
SD-23
SI-04
SD-26
SB-02
SD-03
SK-05
SD-05
SD-04
SI-08
SI-09
43.00m
SI-03
SD-02
SN-01
SD-01
SK-04
SK-03
SI-02
SB-01
SK-02
SD-06
SK-06
SK-08
SK-11
SD-07
SI-01
SD-08
39.00m
SD-10
SB-03
SD-12
SD-11
SD-13
SK-07
SD-21
38.00m
SD-15
SD-17
SD-20
SD-19
SD-14
SD-18
SD-16
SD-22
SD-30
SD-32
SI-10
SD-31
ⅡA
ⅢA
ⅣA
ⅤA
路線全体図
S=1/4,000
0
100m
S=1/1,000
0
40m

図２　遺構配置図

第２章　遺跡の環境

第１節　周辺の遺跡

青森市浪岡地区では、国道７号浪岡バイパス建設や国道 101 号浪岡五所川原道路建設事業等に先立って多くの遺跡の調査が実施され、山本遺跡、野尻 (1) ～ (4) 遺跡、山元 (2)・(3) 遺跡、高屋敷館遺跡等では平安時代の大規模な集落が確認されている。この地域では竪穴住居跡に掘立柱建物跡が付随し、これらを取り囲む外周溝がセットになる例が検出されており、特に野尻 (1)・(3)・(4) 遺跡で多く見られ、なかでも野尻 (3) 遺跡では数時期にわたって規則的な配置が見られる。また、野尻 (2)・(3) 遺跡では、墓の可能性がある円形周溝がまとまって検出されている。高屋敷館遺跡は濠と土塁に囲まれた環濠集落で、内部からは 10 ～ 12 世紀の住居跡や鉄精錬工房などが見つかっており、平成 13 年に国史跡に指定された。

遺物では、錫杖状鉄製品（高屋敷館遺跡）や鉄繞（野尻 (3) 遺跡）などの宗教具や連弁・蓮華文が墨書きされた土師器坏が出土しており、当時の仏教の伝播を考える上で重要な遺物である。このほかにも、高屋敷館遺跡の銅椀の破片や野尻 (3) 遺跡の銅製の柄頭など、中央との関連性がうかがわれる遺物も出土している。

寺屋敷平遺跡の北約３km には五所川原須恵器窯跡群が確認され、主要な窯跡は平成 16 年に国史跡に指定された。窯跡周辺に立地する隠川 (4)・(12) 遺跡などは、須恵器制作に携わる工人に関連する集落と考えられている。

寺屋敷平遺跡周辺では、平成 18 年度に上野遺跡、19 年度に中平遺跡の調査が実施されている。上野遺跡では平安時代の土坑や溝跡が検出され、中平遺跡では縄文時代後期の墓域や道路跡・捨て場が検出されたのに伴い、多量の遺物も出土している。

寺屋敷平遺跡と周辺の遺跡（1）

番号	遺跡名	遺跡番号	時代・時期	種別	関連文献
1	原子溜池 (5)	05040	縄文（前～後）、平安	集落跡	市 20 集 (1998)
2	原子城	05006	中世	城館	市 17 集 (1995)
3	原子溜池 (1)	05003	縄文 (前・中)、平安	集落跡	『青森県遺跡地図』(1998)
4	実吉	05090	縄文、平安、中世～江戸	散布地 / 集落跡	県 207 集 (1997)
5	隈無 (2)	05074	縄文、平安、近世	集落跡 / 斎場	県 237 集 (1998)
6	隈無 (4)	05076	縄文（早）、平安、近世	散布地	県 209 集 (1997)
7	隈無 (1)	05073	縄文（中）、続縄文、平安、近世	散布地 / 集落跡	県 237 集 (1998)
8	隈無 (6)	05078	縄文（中）、平安、近世	散布地 / 集落跡	県 237 集 (1998)
9	隠川 (11)	05071	縄文（早～晩）、弥生、続縄文、古墳、平安、近世	散布地 / 集落跡	県 260・295 集 (1999・2001)
10	隠川 (12)	05072	縄文（前～晩）、弥生（前・後）、平安、近世	散布地 / 集落跡	県 244・260 集 (1998・1999)
11	隠川 (4)	05064	縄文（早～晩）、弥生、平安、近世	散布地 / 集落跡	県 244 集 (1998)
12	隠川 (3)	05063	縄文、弥生、平安	散布地 / 集落跡	県 210 集 (1997)
13	隠川 (2)	05062	旧石器、縄文 (早～晩)、平安	集落跡	市22集(2000)
14	真言館跡	05043	弥生、続縄文、中世	集落跡	市 19 集 (1996)
15	桜ヶ峰 (2)	05059	縄文（前～晩）、弥生（後）、続縄文、平安	散布地	県 208 集 (1997)
16	寺屋敷平	29059	縄文 (前・後・晩)、平安	散布地 / 集落跡	2006 調査・本報告書
17	下下平	29004	平安	散布地	『青森県遺跡地図』(1998)
18	螢沢	29008	縄文 (前)	散布地	『浪岡町史』(2000)
19	旭 (2)	29006	平安	散布地	『青森県遺跡地図』(1998)
20	旭 (1)	29005	平安	散布地	『青森県遺跡地図』(1998)
21	中平	29007	縄文 (中・後)、平安	散布地 / 集落跡	『浪岡町史』(2000)・2007 県調査
22	熊沢溜池	29009	平安	散布地	『浪岡町史』(2000)
23	永原	29010	縄文 (前・後)	散布地	『浪岡町史』(2000)
24	上野	29011	縄文 (中・後)、平安	散布地	『浪岡町史』(2000)・2006 県調査
25	山神宮	29013	縄文 (晩)	散布地	『青森県遺跡地図』(1998)

表中の遺跡は『青森県遺跡地図』(1998) から抜粋・加筆した。
「県」は青森県埋蔵文化財調査報告書、「市」は五所川原市埋蔵文化財調査報告書、「町」は浪岡町埋蔵文化財調査報告書 (青森市を含む) を示す。

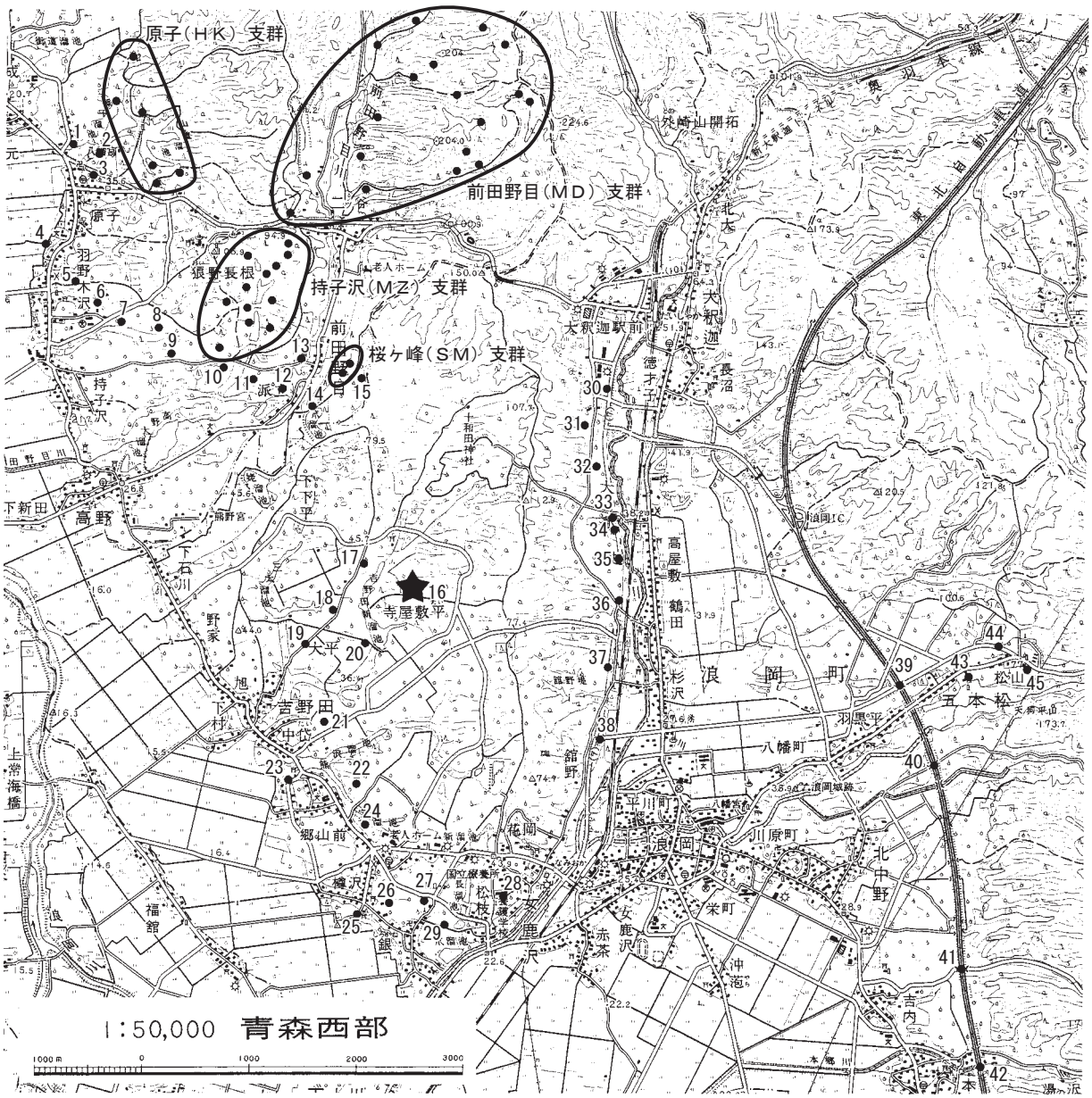


図３　遺跡の位置と周辺の遺跡

寺屋敷平遺跡と周辺の遺跡（2）

番号	遺跡名	遺跡番号	時代・時期	種別	関連文献
26	神明宮	29012	縄文（前・晩）	散布地	『浪岡町史』(2000)
27	大林	29015	平安	散布地	『青森県遺跡地図』(1998)
28	長溜池	29014	縄文（前・後）、弥生、平安、中世、近世	集落跡／墳墓	県 311 集 (2001)
29	杉田	29058	平安	散布地	『浪岡町史』(2000)
30	山本	29049	縄文（前～後）、平安	散布地／集落跡	県 105 集 (1986)
31	野尻 (1)	29060	縄文（草～晩）、弥生（後）、平安、近世	散布地／集落跡	県 234・259・277・320・351・366 集 (1998・1999・2000・2002・2003・2004)
32	野尻 (4)	29063	縄文、平安、鎌倉、江戸	散布地／狩猟場／集落跡	県 186 集 (1996)、町 10 集 (2003)
33	野尻 (2)	29061	縄文（後）、平安、江戸	散布地／狩猟場／集落跡／墓域	県 172・186・366 集 (1995・1996・2004)
34	野尻 (3)	29062	縄文、弥生、平安、近世	散布地／狩猟場／集落跡／墓域	県 186・414 集 (1996・2006)
35	高屋敷館	29003	縄文、平安、近世	狩猟場／集落跡／墓域／道跡	県 206・243・393 集 (1997・1998・2005)、町 (2006)
36	山元 (1)	29054	縄文（前）、弥生、平安	散布地／集落跡	県 395 集 (2005)
37	山元 (2)	29054	縄文、平安	狩猟場／集落跡	県 171 集 (1995)
38	山元 (3)	29056	縄文（早～晩）、平安、近世	狩猟場／集落跡	県 159 集 (1994)
39	羽黒平 (1)	29017	縄文、平安、中世	集落跡	県 170・194 集 (1995・1996)
40	源常平	29027	縄文（早・前・後・晩）、平安、中世	散布地／集落跡／城館	県 39 集 (1977)
41	杉の沢	29038	縄文（早～晩）、続縄文、平安、中世、江戸	散布地／集落跡	県 45 集 (1978)
42	松元	29044	縄文（早～晩）、続縄文、平安	散布地／集落跡	県 46 集 (1978)
43	羽黒平 (2)	29019	縄文（晩）、平安		町５集 (1995)
44	平野	29057	縄文、平安	集落跡	県 193 集 (1996)
45	松山	29026	縄文（早・後・晩）、平安、中世、近世	集落跡	県 170 集 (1995)

第２節　遺跡周辺の地形及び地質

青森県立浪岡高等学校教諭　　山口　義伸

青森市浪岡は津軽平野の南東部にあって、津軽山地の南端部に位置している。

津軽山地は袴腰岳(627m)、大倉岳(677m)、馬ノ神山(549m)、梵珠山(468m)など、津軽半島中央部を南北に連なる山稜からなり、西の津軽平野と東の陸奥湾に臨む青森平野との分水嶺となっている。青森市浪岡の西方に位置する津軽山地南端部は特に梵珠山系と呼ばれ、標高400m以下の低い山稜からなり、その外縁には丘陵化した緩やかな台地が分布している。一方東方には、津軽山地の南方への延長部にあたる奥羽脊梁山脈があって、その西翼には八甲田火山起源の緩やかな火山性丘陵が展開しており、大釈迦丘陵と呼ばれている。

浪岡を流れる主な河川として、大釈迦川、浪岡川などがある。大釈迦川は梵珠山を源とし、梵珠山系の東縁をほぼ南流しており、南北に直線的な浪岡撓曲に支配された構造谷である。一方、浪岡川は東方の大釈迦丘陵を源とし､平野部で大釈迦川と合流している。合流後は梵珠山系外縁を大きく迂回し、

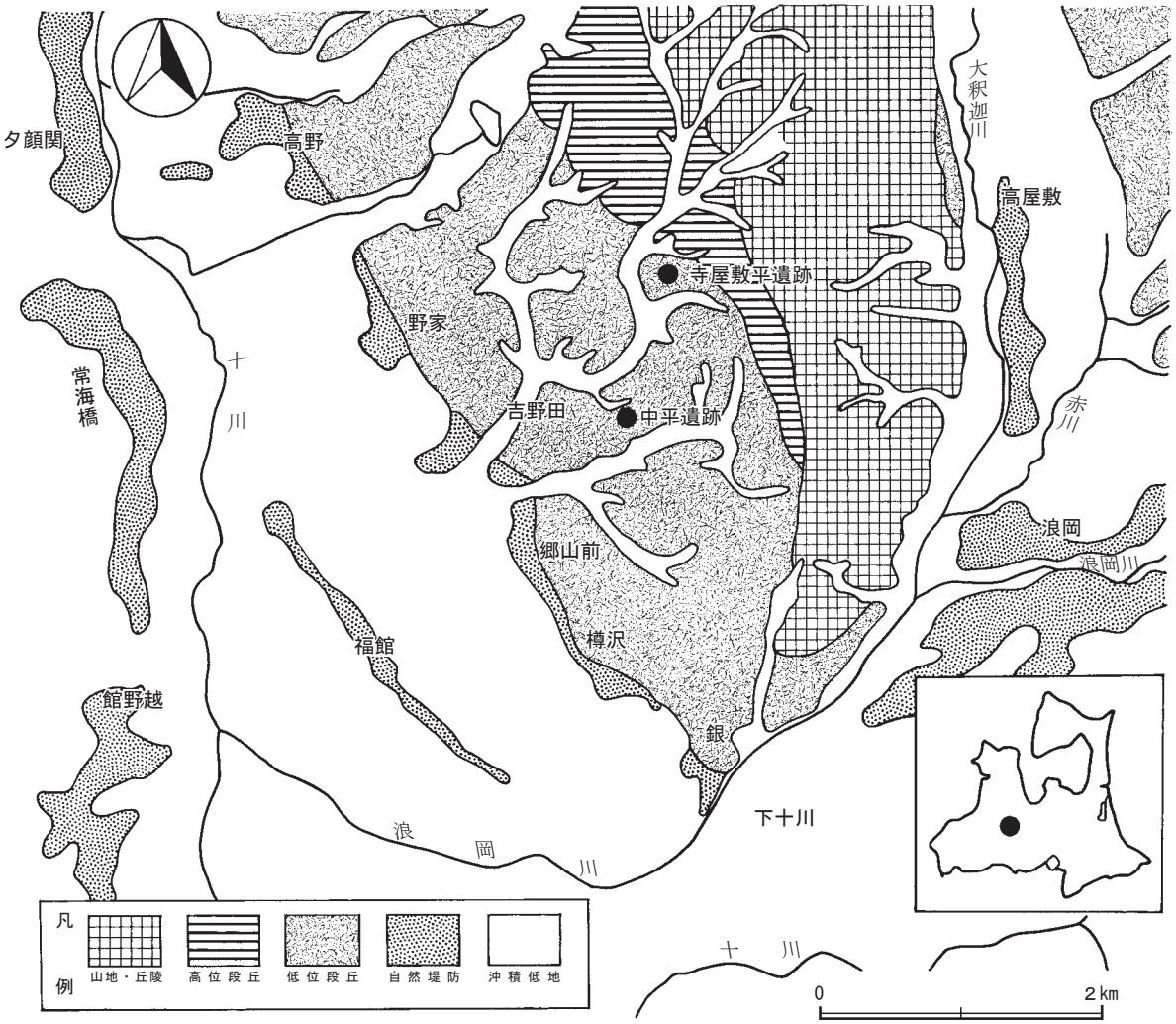


図４　地形分類図

板柳付近で十川と合流している。このほか、前田野目川のように、梵珠山系西麓を刻む小規模な河川も数多くみられる。流域には高野大溜池、吉野田溜池、三太溜池のように、扇状地性の低位段丘を刻む谷筋には堰堤が構築され、園地用の溜め池がみられる。

次に、浪岡周辺の地形及び地質について述べることとする。図４には青森市浪岡周辺の地形分類を示した。浪岡周辺は奥羽脊梁山脈の西翼にあって、いわゆるグリーンタフ地域の前縁部に位置している。この付近の基盤岩は梵珠山系に分布し、流紋岩質溶岩・同凝灰岩（馬ノ神山層）、シルト岩（源八森層）、砂岩（大釈迦層）などの新第三紀層からなっている。そして、梵珠山系外縁の丘陵化した高位段丘では約 65 万年前に流下した八甲田第１期火砕流堆積物と第四紀の前田野目層（細粒砂・シルト）で構成され、基盤の大釈迦層を覆っている。一方、大釈迦川以東に展開する大釈迦丘陵は上述の八甲田第１期火砕流堆積物と約 40 万年前に流下した八甲田第２期火砕流堆積物の厚い堆積物から構成されている。なお、八甲田第１期及び八甲田第２期火砕流堆積物は北八甲田山北東麓に位置する田代平カルデラの形成に絡む噴出物である。

低位段丘は梵珠山系西縁及び大釈迦丘陵西縁に分布している。梵珠山系西縁では標高 20 ～ 50 ｍあり、1000 分の 20 ～ 25 の丘陵に隣接する傾斜地として南北に帯状に分布している。平野部とは比高数ｍの急崖あるいは急斜面で接し、段丘面を刻む小谷の発達でやや起伏に富んでいる。構成層は最上部に低位段丘の指標火山灰である千曳浮石(東北地方第四紀研究グループ、1969)に比定される降下火山灰が認められ、直下に軟弱な有機質粘土と細粒～中粒砂の互層が堆積している。一方、大釈迦丘陵前縁では浪岡川流域の五本松付近を扇頂部とする扇状地が展開している。標高 35 ～ 60 ｍの、1000 分の 15 ～ 20 の緩い傾斜地であって、浪岡川や正平津川などによって大きく開析されている。この扇状地は丘陵から供給された砂礫や有機質粘土、火砕流堆積物で構成されている。この火砕流堆積物は十和田カルデラに起因するものであって、約 3.2 万年前と約 1.3 万年前に流下したと考えられている（山口、1993)。大釈迦川東縁の低位段丘上に立地する高屋敷館遺跡の堀跡から出土した埋没樹の年代測定値をみると、壁面の段丘構成層からは約 1.8 万年前、底面の埋没樹からは約 2.4 万年前の数値が得られている。

さて、寺屋敷平遺跡は青森市浪岡から北西方約 3.0㎞ 地点にあって、梵珠山系西麓に展開する扇状地性の低位段丘上に立地している。調査区域は標高 45 ～ 40 ｍであって、段丘面の丘陵寄りに位置し、東側を除いて、西側には逆”コ”の字形に小谷が流れている。このことから、調査区域内は半径 200 ～ 300 ｍの小丘地をなし、小丘頂部はりんご園造成により削平されている。なお、遺跡周辺の低位段丘面は小谷の発達により緩やかな起伏が認められる。

次に、本遺跡の調査区域内での基本層序について述べる。調査区域内のセクションについては図５に示した。小丘頂部付近では基本層序のＶ層である千曳浮石が降下相の軽石質火山灰であるが、小丘の東西両側では軽石質の砂質～シルト質粘土などの水成堆積相を示している。このほか、調査区域内には周氷河地形としてのインボリューション（凍結融解現象）も認められ、千曳浮石の大きく波打つ堆積構造が確認されている。このインボリューションは梵珠山系縁辺部で広くみられ、本遺跡の北方にあって、同じ低位段丘上に立地する五所川原市の隈無遺跡、隠川遺跡や、梵珠山系東縁の低位段丘上に立地する青森市浪岡の高屋敷館遺跡、山元遺跡等で確認している。

Ⅰ　層　黒褐色土(10YR2/2)　耕作土である。粘性・湿性に欠け、固さはあるが締まりに欠け、脆い。下位層のブロック状の混入が目立つ。

Ⅱａ層　黒色土(10YR1/2)　粘性・湿性が多少あり、固さ・締まりにやや欠け、全体的にソフトな感じがある。軽石粒・粘土粒及び炭化粒が少量ながら混入している。なお、本層下底部には白頭山起源の苫小牧火山灰(B-Tm)がレンズ状に薄く堆積している。

Ⅱｂ層　黒色土(10YR1/2)　粘性・湿性があって、全体的に腐植質である。上位のⅡａ層よりもやや固く締まる。軽石粒・粘土粒及び炭化粒が少量ながら混入している。

Ⅲ　層　黒褐色土(10YR1/3)　漸移層である。粘性・湿性のある腐植質土であるが、多少固さ・締まりがみられる。軽石粒や粘土粒が多少混入している。

Ⅳ　層　にぶい黄橙色土(10YR7/3)　全体的にシルト質～粘土質土であって、下位層の風化侵食による再堆積相を示す。また、部分的に軽石粒や粘土粒の混入が目立ち、粘土化した軽石粒混じりの砂質粘土の層相を示す箇所もあり、低湿地内の堆積環境を示唆する。

Ⅴ　層　黄橙色軽石質砂(10YR7/8)　低位段丘の指標火山灰である千曳浮石に対比される軽石質細粒砂である。調査区域内での本層にはインボリューションがみられ、凸部では降下相の緻密堅固な軽石質火山灰が堆積し、凹部では水成堆積相を示し、軟弱な有機質粘土と粘土化した軽石

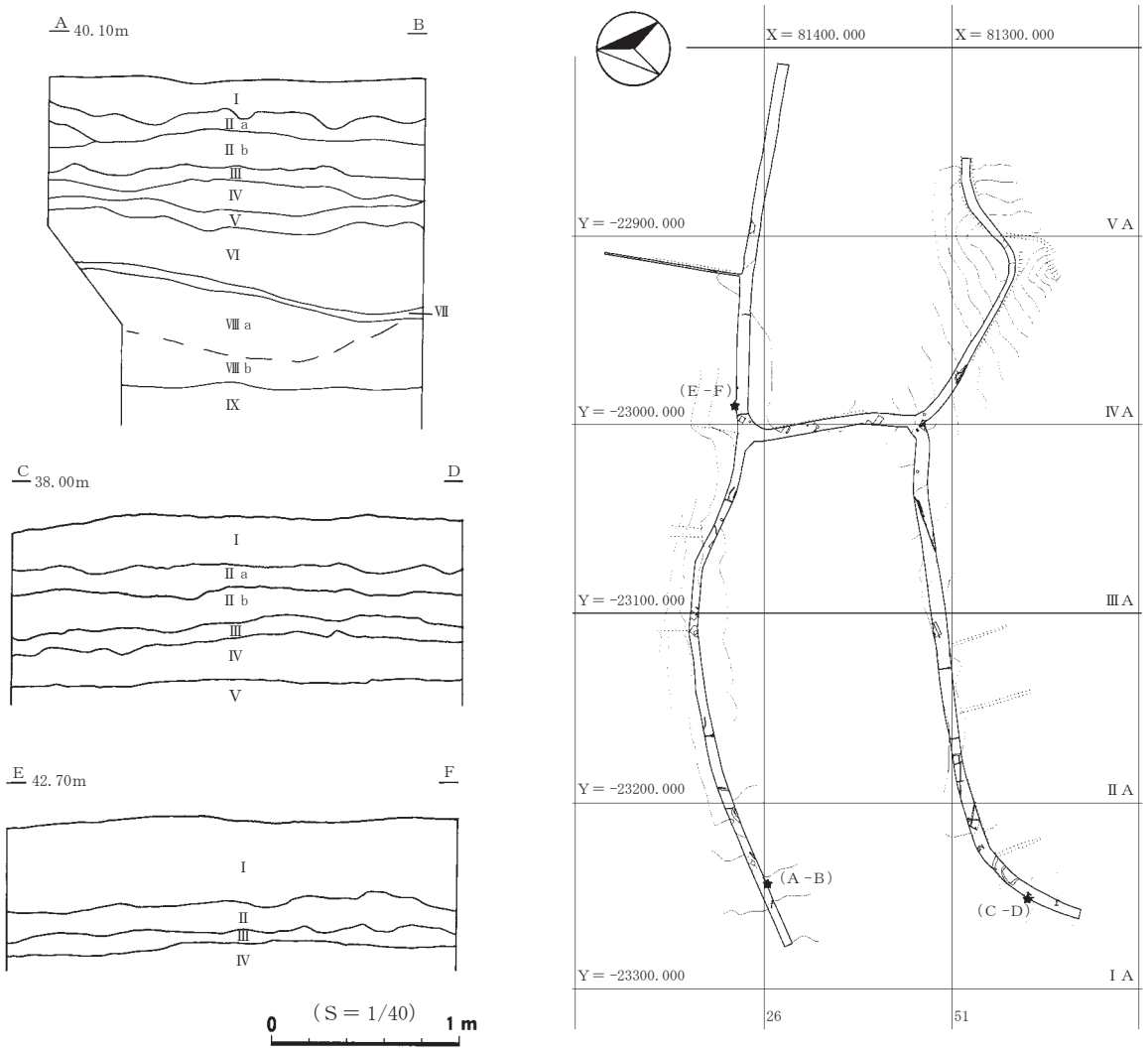


図５　基本層序

粒細粒～中粒砂の互層からなる。

Ⅵ　層　にぶい橙色軽石質砂（7.5YR6/4）粘土化した軽石粒混じりのシルト質砂 であり、上部ほど縦縞状の酸化の染みがみられる。粘土化した軽石粒を多量に包含する湿地性堆積物であって、インボリューションの凹地内の堆積物であり、凸部では堆積していない。

Ⅶ　層　灰白色粘土（10YR8/1）酸化の染みのない緻密堅固な粘土層である。波打つように薄い層状の堆積を示し、凸部寄りではやや砂質粘土となり自然消滅する。なお、下位層を不整合に覆っていることから、堆積間隙が認められる。

Ⅷ　層　灰褐色粘土（10YR6/2）緻密堅固な細粒砂質粘土 層である。クラックが発達した痕跡があり、クラック内には酸化の染みが認められ、マンガン粒を含む暗褐色シルト質砂で充填されている。上部のⅧａ層は灰褐色を呈する細粒砂質粘土であって、全体的に酸化の染みがみられることから、下部層（Ⅷｂ層）の再堆積相と考えられる。

Ⅸ　層　灰白色粘土（10YR7/1）緻密堅固な粘土 層である。

引用・参考文献

東北地方第四紀研究グループ(1969)　『東北地方における第四紀海水準変化』　「日本の第四紀」地学団体研究会専報No. 15

中川久夫(1972)　『青森県の第四系』　「青森県の地質　第二部」　青森県

村岡洋文・長谷紘和(1990)　『黒石地域の地質』　「地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）」地質調査所

活断層研究会編(1991)　『新編　日本の活断層　分布図と資料』　東京大学出版会

山口義伸(1993)　『平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について』「年報　市史ひろさきNo. 2」弘前市

青森県教育委員会(1998)　『隈無（１）遺跡・隈無（２）遺跡・隈無（６）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第237集

青森県教育委員会(1998)　『高屋敷館遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第243集

青森県教育委員会(1998)　『隠川（４）遺跡・隠川(12)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集

浪岡町教育委員会(2004)　『野尻（４）遺跡』　浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第10集

青森県教育委員会(2005)　『山元（１）遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第395集

第３章　検出遺構と出土遺物

第１節　竪穴住居跡

竪穴住居跡は 10 軒検出された。調査区外に延びるものがほとんどで、全体像が明らかになった住居は少ない。分布は、調査区中央部の広い範囲に散在しており、重複している住居はなく、隣接している住居も第６号竪穴住居跡と第７号竪穴住居跡の２軒のみで、他は一定の間隔をもって構築されている。カマドが検出された住居では、いずれも南東壁に構築されている。火山灰の堆積状況や出土遺物からは時間差はあまり大きくはないと考えられ、白頭山火山灰降下前後と考えられる。

調査区中央部はりんご園や畑地の造成の際に削平され、ほぼ平坦となっており、遺構は第Ⅳ層上面で検出された。緩やかな西斜面となっている農道４号西側と農道 23 号西側、谷が調査区を横切る農道 19 号東側では第Ⅲ層が検出面となっている。

第１号竪穴住居跡〈SI － 01〉（図６・７）

［概要］農道４号と農道 19 号の交差部の標高約 41.0 ｍの平坦面に位置する。２本の農道にまたがっていたため、４号部分（西側）と 19 号部分（東側）に分割して調査を行った。本住居の床面上では炭化材が検出され、焼失家屋と考えられる。

［位置・確認］ⅢＹ・ⅣＡ－ 47 グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］住居南側は調査区外に延びる。北東壁 3.95m、北西壁 4.6 ｍで、平面形は北東－南西方向に長い長方形を呈する。北東壁南側に北東壁 1.2 ｍ、北西・南東壁 0.4 ｍの長方形の張り出し部分を有する。

［堆積土］黒褐色土と暗褐色土を主体とし、全体的にロームと炭化物が混入する。自然堆積と考えられる。Ｅ－Ｆセクションの第１層は、住居埋没後に掘削され、その後に堆積した人為堆積層と考えられる。

［壁・床面］壁高は０～ 33cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は褐色土と明黄褐色土・明褐色土で構築され、床面はほぼ平坦である。張り出し部分は、壁は開きながら立ち上がり、床面は第Ⅳ層をそのまま床面としている。

［カマド］検出されなかった。住居南側に構築されていると推測される。

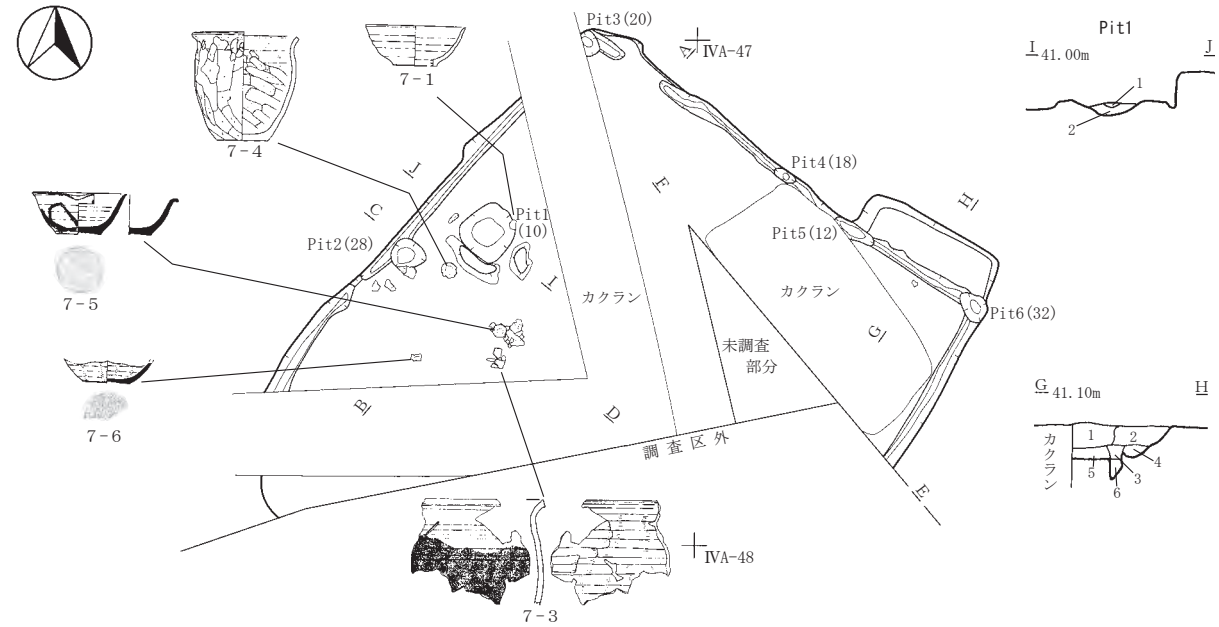
［柱穴］壁際に位置する５基のピット（ピット２～６）は壁柱穴の可能性がある。

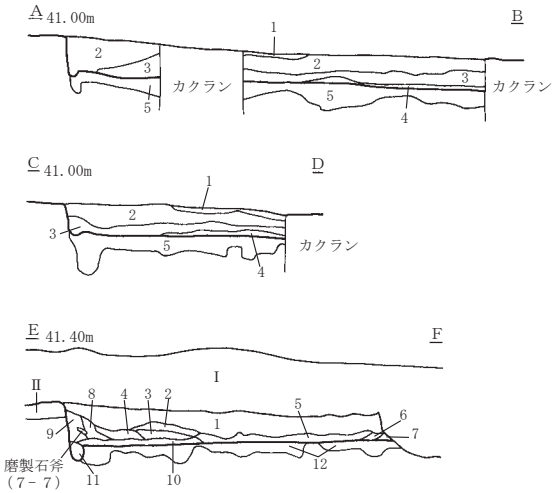
［周溝］幅８～ 16cm、深さ７～ 12cm の周溝がほぼ一巡する。

［ピット］住居北西壁中央部に１基検出された（ピット１）。径約 40cm の円形を呈し、深さは 10cm である。ピットの周囲には高さ３cm の周堤状に粘土が検出された。

［出土遺物］土師器坏２点、土師器甕２点、須恵器坏２点を図示した。図７－１はロクロ調整の土師器坏である。他の坏に比べ胎土が緻密で、硬質である。２は内面黒色処理の土師器坏である。５の須恵器坏は床面に伏せられた状態で出土した。口縁の一部が大きくつまみ出され、片口状となっている。

［小結］床面出土遺物から９世紀末の住居と考えられ、堆積土に白頭山火山灰が混入する住居跡よりも古く、遺構の中でも古手に位置づけられると考えられる。





第１号竪穴住居跡（A-B、C-D）

第１層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～5mm　1%混入。
第２層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ１～20mm　2%混入。
第３層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～15mm　1%混入。
第４層	10YR2/1	黒色土	炭化物層。ロームφ１～2mm　1%混入。
第５層	10YR4/4	褐色土と 10YR6/6　明黄褐色土の混合土	

第１号竪穴住居跡（E-F）

第１層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～50mm　25%、炭化物φ１～10mm　20%混入。
第２層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～5mm　10%、炭化物φ１～10mm　10%混入。
第３層	10YR4/6	褐色土	ロームφ１～2mm　5%、炭化物φ１～5mm　5%混入。
第４層	10YR3/3	暗褐色土	焼土層。ロームφ１～5mm　7%、炭化物φ１～2mm　5%混入。
第５層	10YR1.7/1	黒色土	炭化物層。ロームφ１～8mm　7%混入。
第６層	10YR3/4	暗褐色土	焼土層。ロームφ１～4mm　10%、炭化物φ１～10mm　10%混入。
第７層	10YR1.7/1	黒色土	炭化物層。ロームφ１～3mm　3%混入。
第８層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～5mm　7%、炭化物φ１～3mm　5%混入。
第９層	10YR4/6	褐色土	ロームφ１～5mm　15%、炭化物φ１～3mm　10%混入。
第10層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ１～3mm　5%、灰混入。
第11層	10YR5/6	黄褐色土	ロームφ１～5mm　20%、炭化物φ１～2mm　5%混入。
第12層	10YR6/6	明褐色土	ロームφ１～10mm　20%、炭化物φ１～5mm　10%混入。

第１号竪穴住居跡（G-H）

第１層	10YR4/6	褐色土	ロームφ１～40mm　20%、炭化物φ１～2mm　5%混入。
第２層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ１～100mm　40%、炭化物φ１～2mm　3%混入。
第３層	10YR4/4	褐色土	ロームφ１～10mm　10%、炭化物φ１～2mm　3%混入。
第４層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～50mm　40%混入。
第５層	10YR3/2	黒褐色土	ロームφ１～50mm　5%、炭化物φ１～10mm　7%混入。
第６層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～5mm　5%、炭化物φ１～3mm　5%混入。

第１号竪穴住居跡 Pit1

第１層	7.5Y6/3	オリーブ黄色土	粘土層。
第２層	10YR4/6	褐色土	ロームφ１～3mm　2%混入。

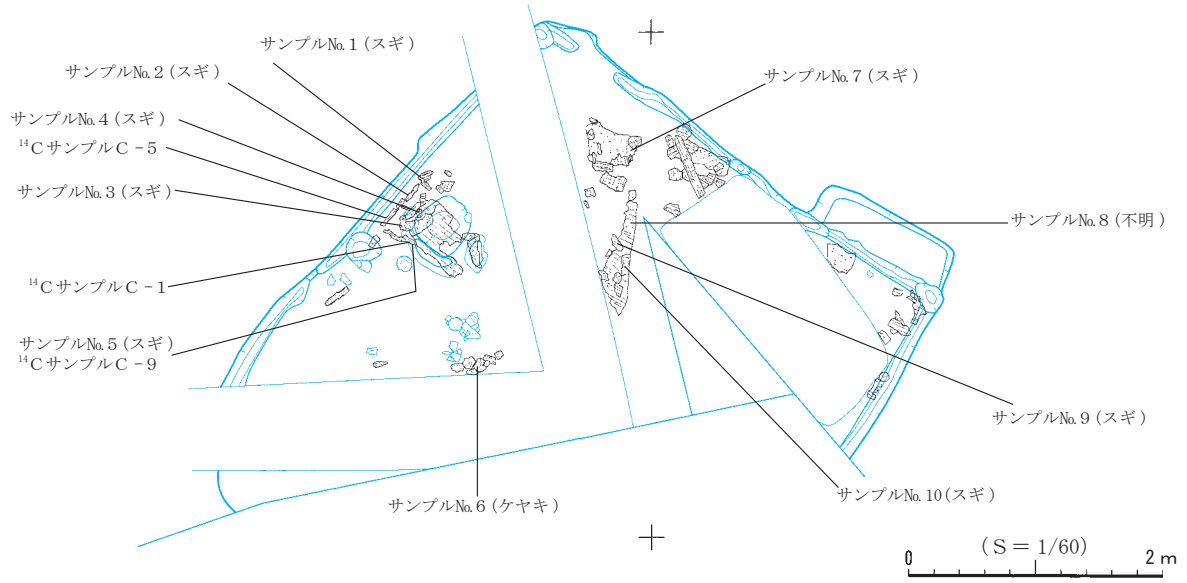


図６　第１号竪穴住居跡（１）

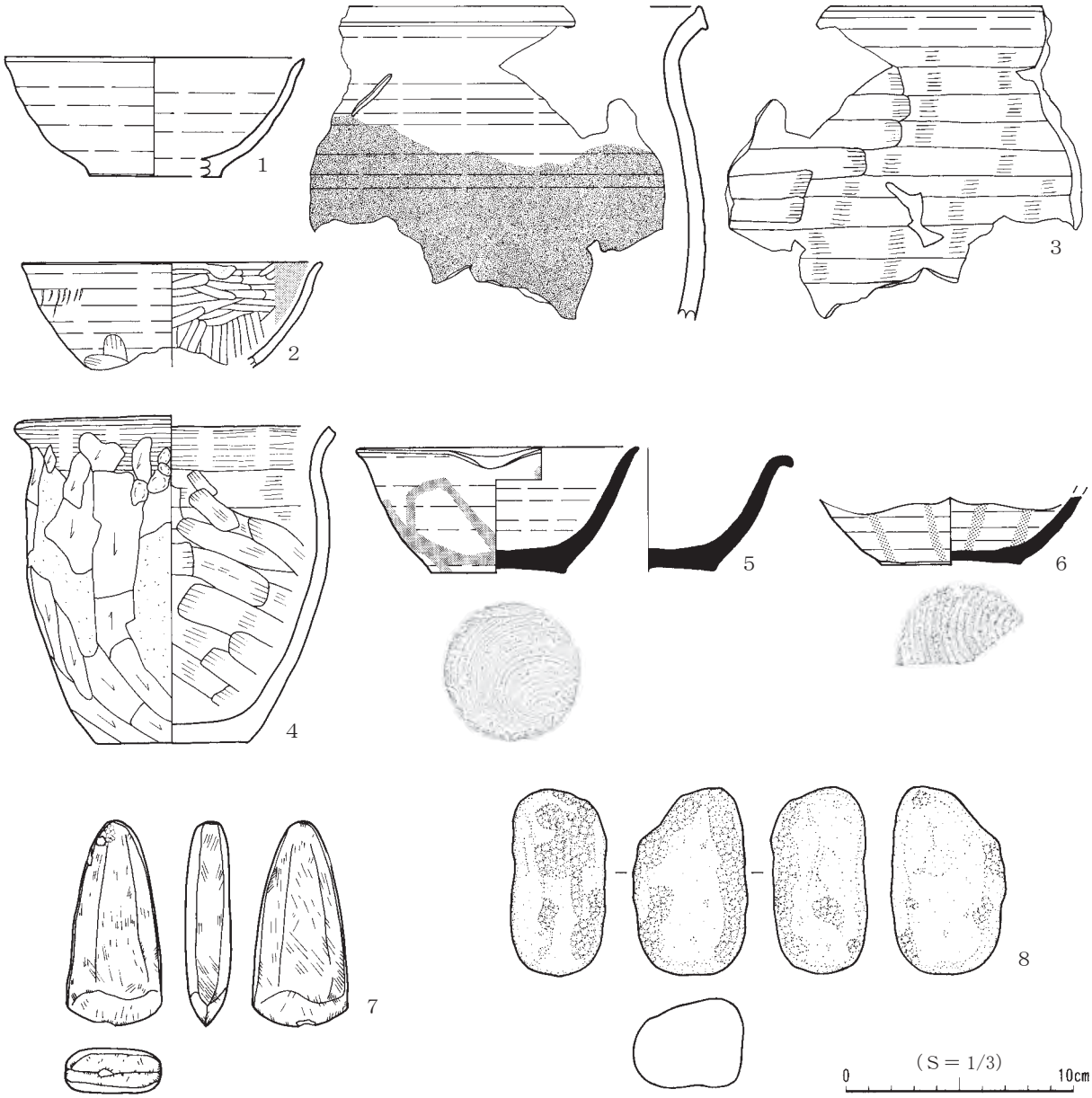


図７　第１号竪穴住居跡（２）

床面で検出された炭化材３点の^{14}C年代を測定したところ、1230 ± 30yrBP、1240 ± 30yrBP、1270 ± 30yrBP という結果を得られ、暦年較正年代は 680AD ～ 890AD、680AD ～ 880AD、680AD ～ 820AD と測定された（第４章第１節）。

炭化材の樹種同定を行ったところ、10 点のうち８点がスギ、１点がケヤキと判明した（第４章第３節）。住居壁際の材が集中する部分で検出されたものはスギ、中央部の材が散在する部分で検出されたものがケヤキと判明し、中央部で検出されたケヤキは住居の部材ではなく、容器などの木製品の可能性が考えられる。

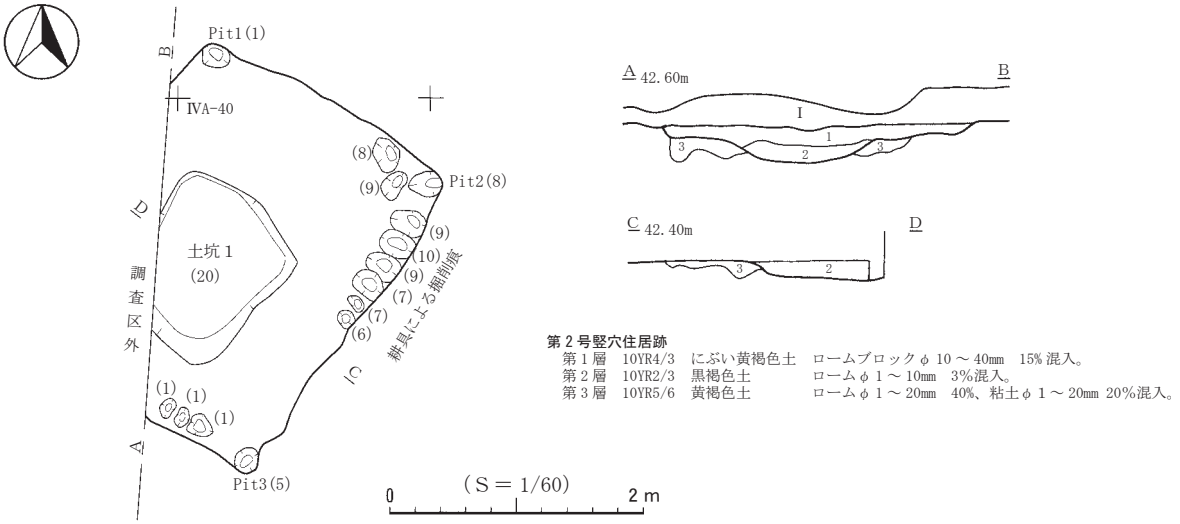


図８　第２号竪穴住居跡

第２号竪穴住居跡〈SI － 02〉（図８）

［概要］農道４号ほぼ中央部の平坦面に位置し、標高は約 42.2 ｍである。本住居の西隅は調査区外に延びる。

［位置・確認］ⅢＹ・ⅣＡ－ 39・40 グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］南東壁 2.8 ｍ、北東壁 2.2 ｍで、平面形は北東－南西方向に長い長方形を呈する。

［堆積土］ロームブロックが中量混入するにぶい黄褐色土が堆積する。

［壁・床面］壁はセクション面でのみ確認され、開きながら立ち上がる形態である。床はロームと粘土が混入する黄褐色土で構築されており、床面には起伏がある。掘方底面には、深さ１～ 10cm の連続したピットが検出され、住居構築の際の掘削痕と考えられる。

［カマド］検出されなかった。

［柱穴］床構築土を除去したところ、住居隅に径 19 ～ 22cm、深さ１～８cm のピットが検出され、柱穴となる可能性もある。

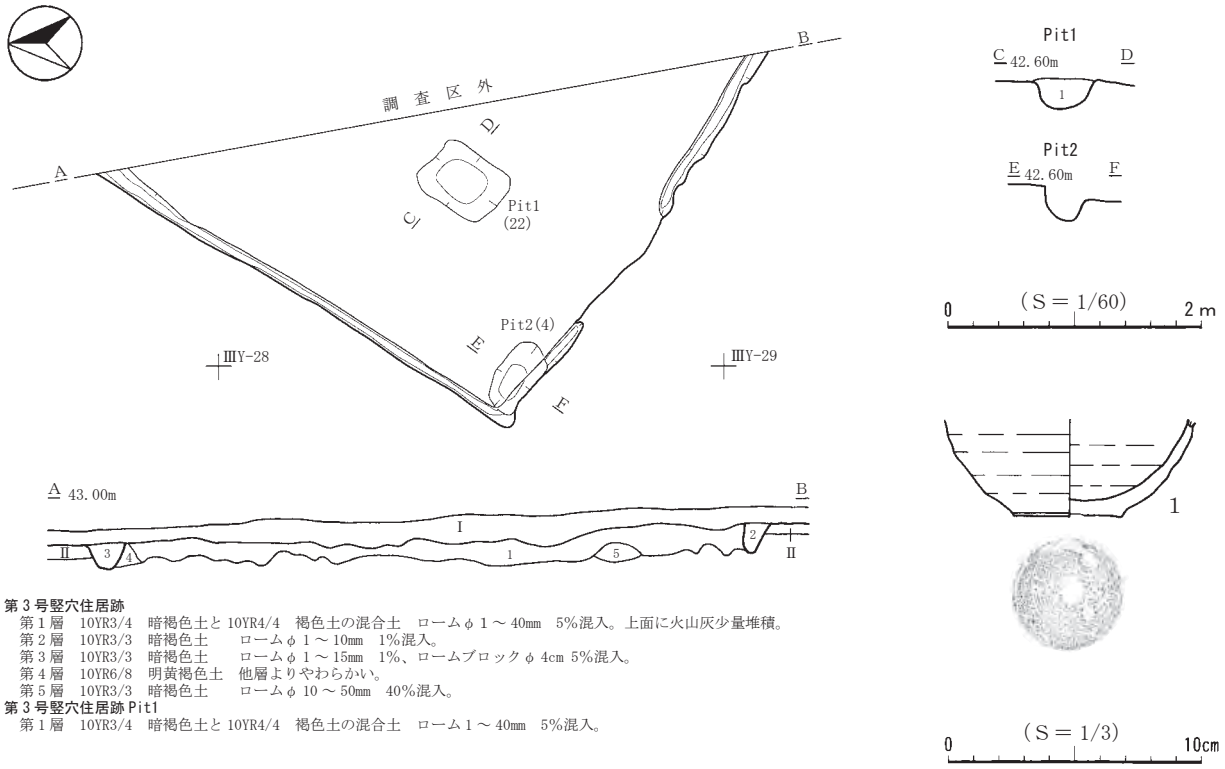
［周溝］検出されなかった。

［ピット］検出されなかった。

［土坑］住居ほぼ中央部に１基検出された。当初、第１号土坑としていたが、明確な重複関係を確認できなかったことから、住居内土坑とした。長辺 133cm、短辺 117cm の方形を呈する。深さは 20cm で、壁は開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］残存状況が良くなく、出土遺物もないため詳細は不明である。



第３号竪穴住居跡
第１層　10YR3/4　暗褐色土と 10YR4/4　褐色土の混合土　ロームφ１～40mm　5%混入。上面に火山灰少量堆積。
第２層　10YR3/3　暗褐色土　　ロームφ１～10mm　1%混入。
第３層　10YR3/3　暗褐色土　　ロームφ１～15mm　1%、ロームブロックφ 4cm 5%混入。
第４層　10YR6/8　明黄褐色土　他層よりやわらかい。
第５層　10YR3/3　暗褐色土　　ロームφ 10～50mm　40%混入。
第３号竪穴住居跡 Pit1
第１層　10YR3/4　暗褐色土と 10YR4/4　褐色土の混合土　ローム１～40mm　5%混入。

図９　第３号竪穴住居跡

第３号竪穴住居跡〈SI－03〉（図９）

［概要］農道４号中央部の平坦面に位置し、標高は約 42.7 mである。本住居の東半は調査区外に位置し、西隅のみが検出された。削平により、床面で確認された。

［位置・確認］ⅢＸ－28・ⅢＹ－27～29 グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］北西壁 3.95 m、南西壁 3.6 mが検出された。平面形は方形を呈すると考えられる。

［堆積土］床構築土上面で火山灰の堆積が認められた。

［壁・床面］削平により、壁は残存せず、床面のみ検出された。床はロームが混入する暗褐色土と褐色土の混合土で構築されている。床面上部が削平されているため、本来の状況は不明である。

［カマド］検出されなかった。

［柱穴］ピットは床下で２基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。

［周溝］南西壁西側を除き、幅７～16cm、深さ８～33cm の周溝が巡る。

［ピット］床構築土を除去したところ、２基検出された。ピット１は住居西側に位置し、長辺 66cm、短辺 52cm の隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは 22cm である。ピット２は住居西隅に位置し、長軸 59cm、短軸 32cm の楕円形を呈する。検出面からの深さは４cm である。

［出土遺物］ロクロ調整の土師器坏が１点出土した（図９－１）。

［小結］床構築土に火山灰の堆積が認められることから 10 世紀前半の住居の可能性があるが、残存状況が良くなく、出土遺物も少ないため詳細は不明である。

第４号竪穴住居跡〈SI － 04〉（図 10・11）

［概要］農道 23 号東側、調査区のほぼ中央部の平坦面に位置し、標高は約 42.0 ｍである。本住居の大半は調査区外に位置し、北壁のみが検出された。本住居の北側には第 23 号・第 24 号溝跡が住居を囲むように構築されており、本住居に付属する外周溝と考えられる。

［位置・確認］ⅢＰ・Ｑ－ 22 グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］北壁は 4.4m で、方形を呈すると考えられる。

［堆積土］暗褐色土と黒褐色土を主体とし、いずれの層にもロームと炭化物が中量含まれる。床面直上に堆積する第３層には火山灰がブロック状に混入する。

［壁･床面］壁高は 32 ～ 35cm で、東壁と北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁は開きながら立ち上がる。床はロームと炭化物が混入する暗褐色土で構築されている。床面には起伏があり、全体的にそれほど堅緻ではない。

［カマド］検出されなかった。

［柱穴］検出されなかった。

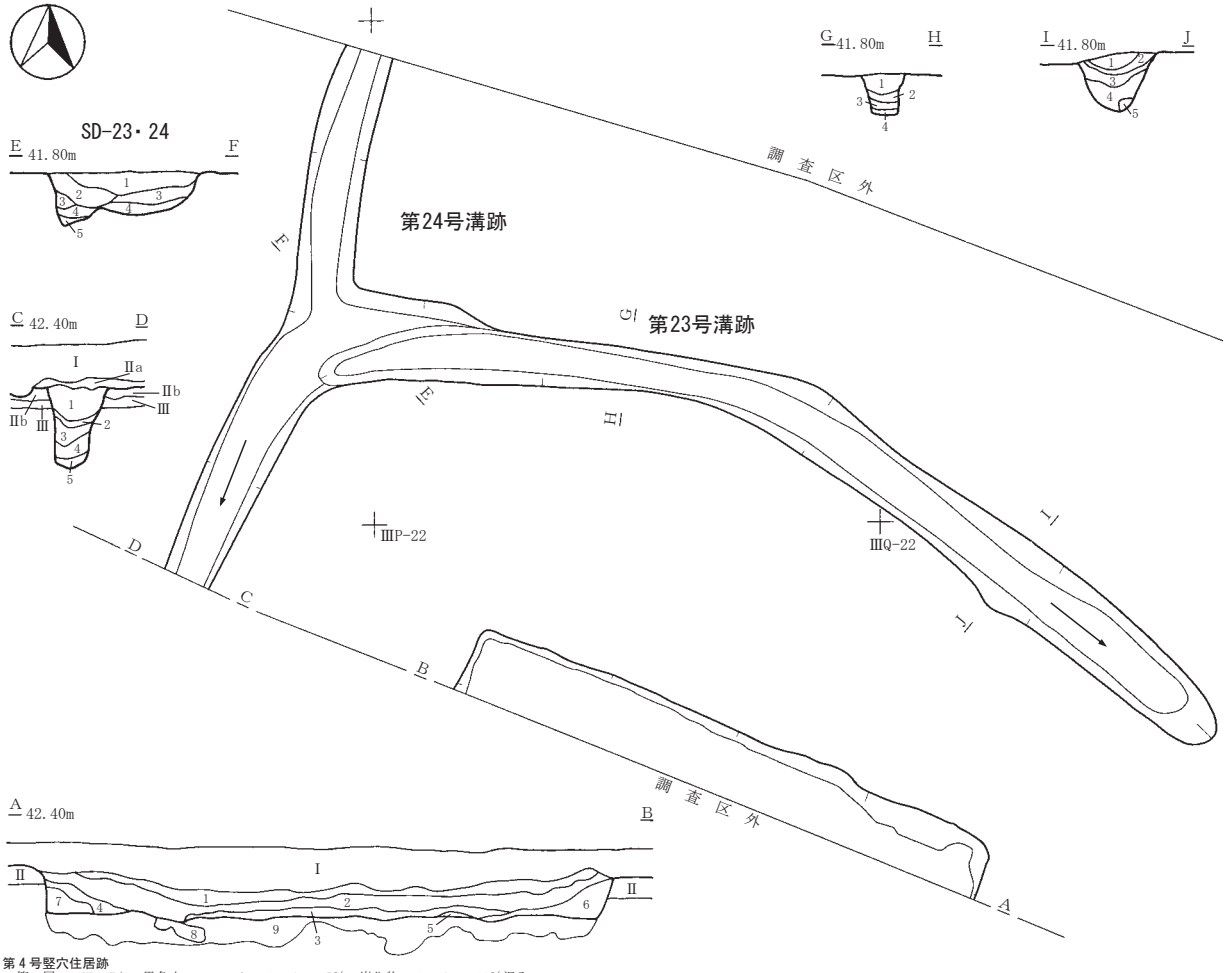
［周溝］検出されなかった。

［ピット］検出されなかった。

［外周溝］第 23 号・第 24 号溝跡が本住居に伴う外周溝と考えられる。第 23 号溝跡は住居西側～北側を巡るコの字状の溝跡である。幅 32 ～ 52cm、深さ 26 ～ 47cm で、断面形は壁がやや開くＵ字状である。第 24 号溝跡と重複する付近の底面には段差が見られる。溝のほぼ中央部・ⅢＱ－ 22 付近では堆積土中に白頭山火山灰が堆積し、遺物がまとまって出土している。第 24 号溝跡は、住居北西側に位置し、第 23 号溝跡から北に分岐する直線状の溝跡である。幅 40 ～ 60cm、深さ 40 ～ 60cm で、断面形はＵ字状である。第 23 号溝跡と重複するが、新旧関係は明らかではなく、同時に機能していた可能性も考えられる。

［出土遺物］第４号竪穴住居跡は土師器甕２点と土師器埵１点を図示した。図 11 － 4 の埵は、口縁にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる器形と考えられ、外面は被熱により赤変し、剥落している。第 23 号溝跡は土師器甕６点と須恵器鉢１点、磨・敲石１点を図示した。第 23 号溝跡出土遺物のうち、図 11－ ７・８は白頭山火山灰の下層から、図 10 － ３・11 － １は白頭山火山灰の上層と下層から出土した破片が接合したものである。図 11 － ６は口縁は短くほぼ直立し、胴部が大きく張り球状を呈する器形で、内外面とも調整は粗い。器壁は厚く、胎土には焼土粒や径５㎜の小礫が混入している。外面には被熱により赤く変色した部分があり、内面には褐色の物質の付着が認められる。図 11 － ７・８は内面黒色処理の甕である。第 24 号溝跡からは磨石が１点出土した。

［小結］住居床面直上層に火山灰がブロック状に混入することや、外周溝に白頭山火山灰が堆積することから、白頭山火山灰降下前後の 10 世紀前半の住居と考えられる。



第４号竪穴住居跡

第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～3mm　5%、炭化物φ１～3mm　10%混入。
第２層　10YR3/3　暗褐色土　ロームφ１～60mm　20%、炭化物φ１～2mm　15%混入。
第３層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～40mm　15%、炭化物φ１～5mm　7%混入。火山灰　ブロック状に混入。
第４層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～5mm　7%、炭化物φ１～3mm　5%混入。
第５層　10YR4/4　褐色土　ロームφ１～20mm　30%、炭化物φ１～2mm　15%混入。
第６層　10YR3/4　暗褐色土　ロームφ１～50mm　30%、炭化物φ１～3mm　15%混入。
第７層　10YR4/4　褐色土　ロームφ１～20mm　20%、炭化物φ１～2mm　7%混入。
第８層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　ロームφ１～20mm　5%、炭化物φ１～3mm　5%、焼土ブロックφ20～50mm　10%混入。
第９層　10YR3/3　暗褐色土　ロームφ１～50mm　40%、炭化物φ１～5mm　20%混入。

第23号溝跡（C-D）

第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～2mm　7%、ロームブロックφ30mm　5%、砂質土混入。
第２層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ1mm　1%、ロームブロックφ20mm　1%混入。
第３層　10YR2/3　黒褐色土　ロームブロックφ30mm　15%、砂質土混入。
第４層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～2mm　5%、ロームブロックφ10mm　10%混入。
第５層　10YR1.7/1　黒色土　ロームブロックφ30mm　3%混入。

第23・24号溝跡（E-F）

第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～2mm　5%、ロームブロックφ20～30mm　2%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　2%混入。
第３層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～2mm　2%混入。
第４層　10YR1.7/1　黒色土
第５層　10YR2/2　黒褐色土

第23号溝跡（G-H）

第１層　10YR1.7/1　黒色土
第２層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～10mm　5%混入。
第３層　10YR1.7/1　黒色土
第４層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～5mm　2%混入。

第23号溝跡（I-J）

第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　1%混入。
第２層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1mm　1%、白頭山火山灰混入。
第３層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～2mm　1%混入。
第４層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～3mm　2%混入。
第５層　10YR3/3　暗褐色土　ロームφ１～30mm　40%混入。

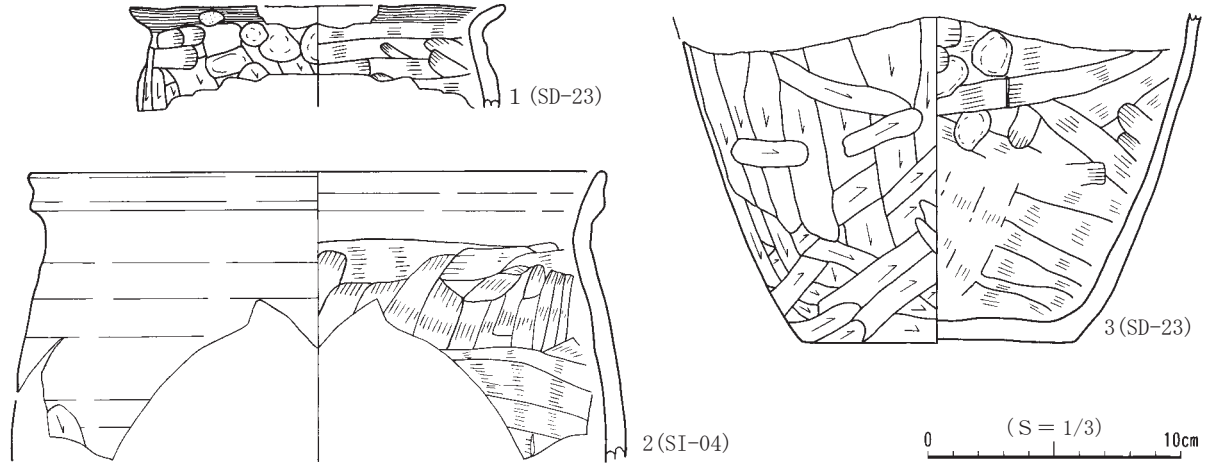


図10　第４号竪穴住居跡（１）

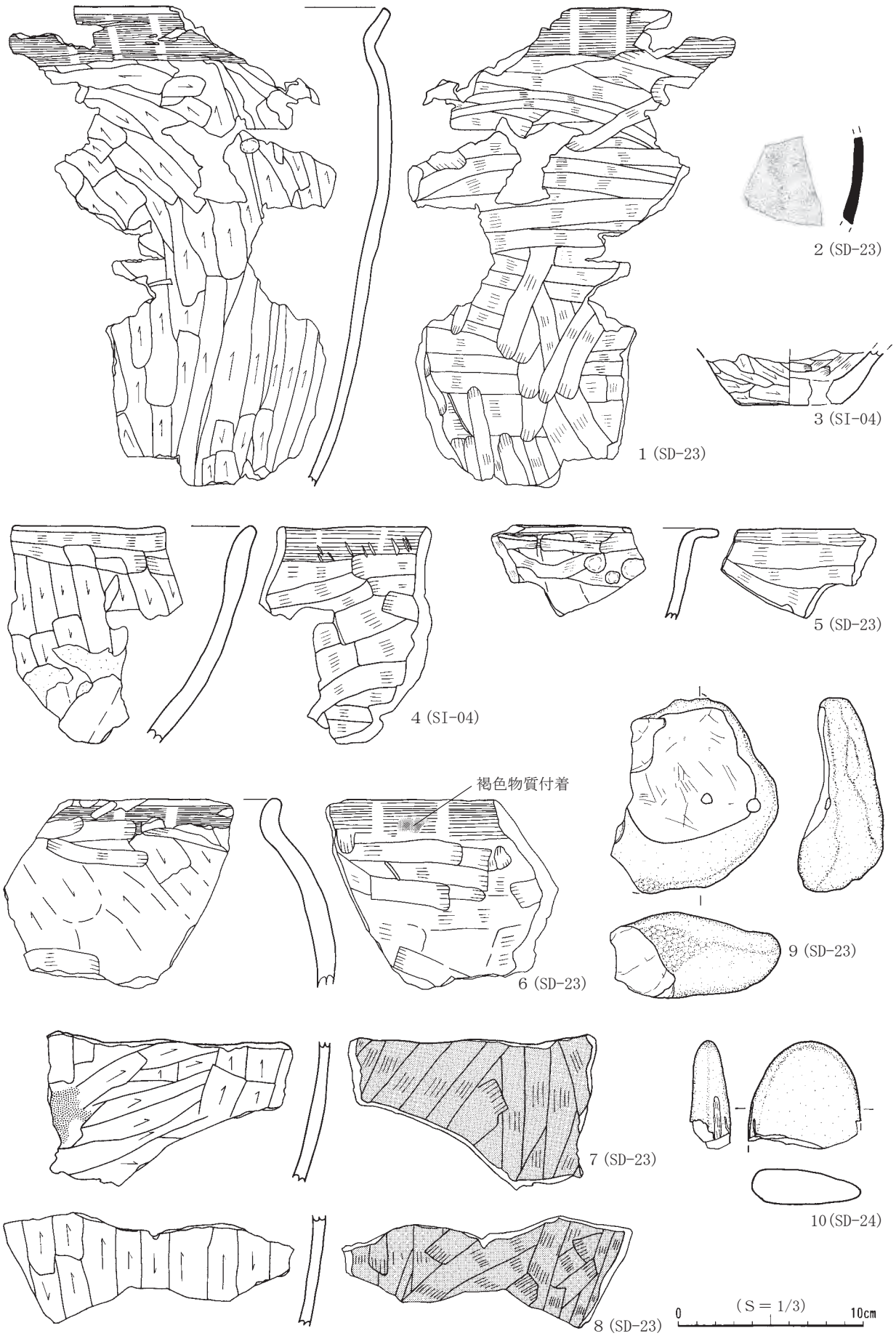


図 11　第 4 号竪穴住居跡（2）

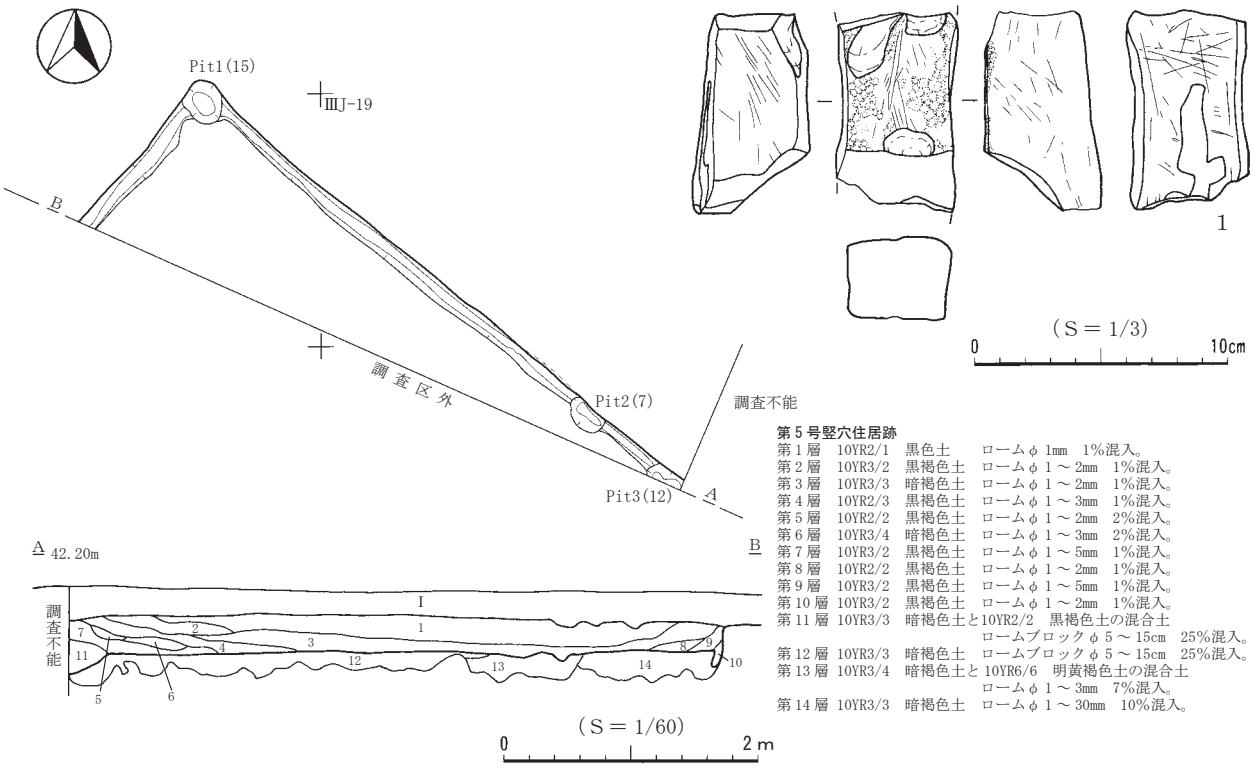


図 12　第５号竪穴住居跡

第５号竪穴住居跡〈SI － 05〉（図 12）

［概要］農道 23 号東側、調査区ほぼ中央部の平坦面に位置し、標高約 41.6 ｍである。本住居の大半は調査区外に位置し、北隅のみが検出された。

［位置・確認］ⅢＩ・Ｊ－ 19 グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］検出された北壁は 5.0 ｍである。平面形は方形を呈すると推測される。

［堆積土］ロームを少量混入する黒褐色土を主体とする。

［壁・床面］壁高は 20 ～ 22cm で、壁は垂直に立ち上がる。床はロームブロックが混入する暗褐色土と明黄褐色土で構築され、床面は概ね平坦であるが、住居西側では起伏がある。

［カマド］検出されなかった。

［柱穴］壁際に３基のピットが検出され、壁柱穴の可能性も考えられる。

［周溝］幅９～ 18cm、深さ 10 ～ 19cm の周溝が巡る。

［ピット］検出されなかった。

［出土遺物］堆積土から砥石が１点出土している（図 12 － 1）。使用面は４面で、使用により中央部が括れている。敲打痕が認められる面があり、再加工を意図した可能性もある。このほかに小破片のため掲載しなかったが、土師器坏・土師器甕の破片が出土している。

［小結］住居の一部分のみの調査であり、出土遺物も少ないことから時期等の詳細は不明である。

第６号竪穴住居跡〈SI － 06〉（図 13・14）

［概要］農道 23 号ほぼ中央部、標高約 41.2 ｍのごく緩やかな斜面に位置する。本住居跡の西側には第７号竪穴住居跡が隣接している。住居北隅は調査区外に位置する。

［位置・確認］ⅡＹ～ⅢＢ－ 16・17 グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

［平面形・規模］南東壁 3.9 ｍ、南西壁 3.3 ｍで、平面形は北東－南西方向が長い長方形を呈する。

［堆積土］砂質土を混入する黒色土と、ロームを中量混入する黒褐色土を主体とする。床面直上の第２層には白頭山火山灰がブロック状に混入する。

［壁・床面］壁高は 23 ～ 27cm で、住居北側では壁は開きながら立ち上がるが、南側ではほぼ垂直に立ち上がる。床はロームが混入する明黄褐色土で構築され、床面は概ね平坦である。床構築土は住居南側で薄く、北側では厚い。

［カマド］南東壁南側に位置し、残存状態は良好であった。カマドの主軸方位はＮ－ 53°－Ｗである。袖は粘土で構築され、左側の袖は長さ 126cm、幅７～ 19cm、高さ９～ 14cm、右側の袖は長さ 107cm、幅 13 ～ 15cm、高さ８～ 15cm である。両袖の間隔は 25 ～ 35cm である。火床面は長軸 32cm、短軸 24cm の楕円形を呈し、にぶい橙色に赤変していた。火床面の奥には支脚に用いられた土師器甕が倒立して設置され、支脚の下には深さ５cm のピットが検出された。支脚を据える際の掘方と考えられる。煙道は半地下式で､底面は煙出しに向かって緩やかに上昇する。確認面では煙道部に粘土の堆積が認められ、煙出しを平面的にとらえることができた。

［柱穴］住居隅に位置するピット２・３は柱穴となる可能性がある。

［周溝］幅 11 ～ 28cm、深さ８～ 13cm の周溝が巡る。

［ピット］住居中央（ピット１）、住居北側（ピット５）、カマド北東側（ピット６・７）に検出された。ピット１は長軸 42cm、短軸 32cm の楕円形で、深さは 23cm、断面形はすり鉢状を呈する。

［出土遺物］床面に半分埋もれた状態で、墨書が見られる土師器坏が１点出土した（図 14 － １）。ロクロ使用で内面をミガキ後黒色処理しており、胴部外面に「卄」の墨書が見られる。カマドからは多くの遺物が出土しており、土師器甕を５点図示した。いずれもロクロが使用されており、胴部にケズリやナデが施される。図 14 － ３はカマド周辺から出土した破片が接合したもので、胴部に「八」の刻書が見られる。４は口径 14.8cm、高さ 14.1cm の小型の甕である。６はカマド支脚に利用されていたものである。底面に一条の直線の刻書が見られる。

［小結］床面直上層に白頭山火山灰がブロック状に混入することや、出土遺物から 10 世紀前半の住居と考えられる。

第７号竪穴住居跡〈SI － 07〉（図 15）

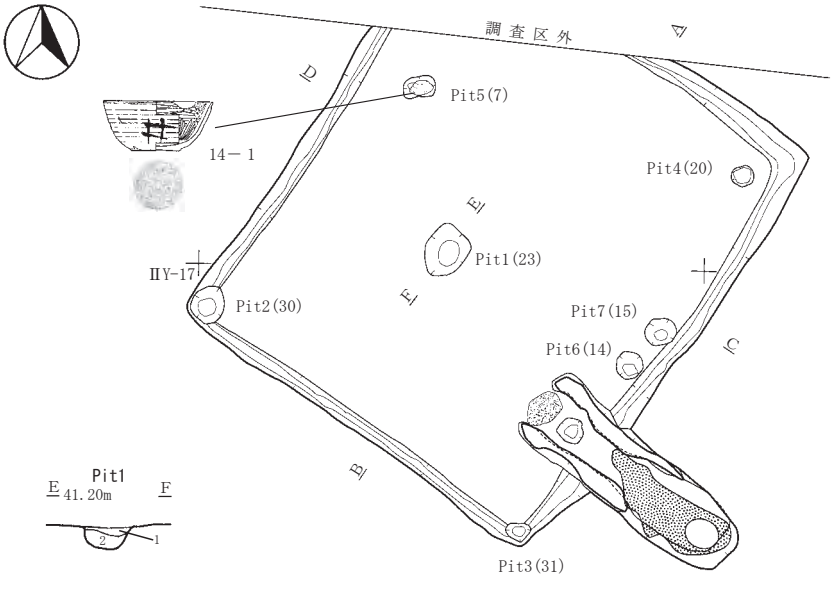
［概要］農道 23 号ほぼ中央部、標高約 41.3 ｍのごく緩やかな西斜面に位置する。本住居跡の東側には第６号竪穴住居跡が隣接している。住居南隅は調査区外に延びる。

［位置・確認］ⅡＶ～Ｘ－ 16・17 グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。

［重複］第 10 号土坑と重複し、本住居跡が古い。

［平面形・規模］北東壁 4.4 ｍ、北西壁 5.0 ｍで、平面形は北東－南西方向が長い長方形を呈する。

［堆積土］ロームが少量混入する暗褐色土を主体とする。



第６号竪穴住居跡

第１層　10YR1.7/1　黒色土
砂質土混入。

第２層　10YR2/2　黒褐色土
ロームφ１～10mm7%、
白頭山火山灰
ブロック状に5%混入。

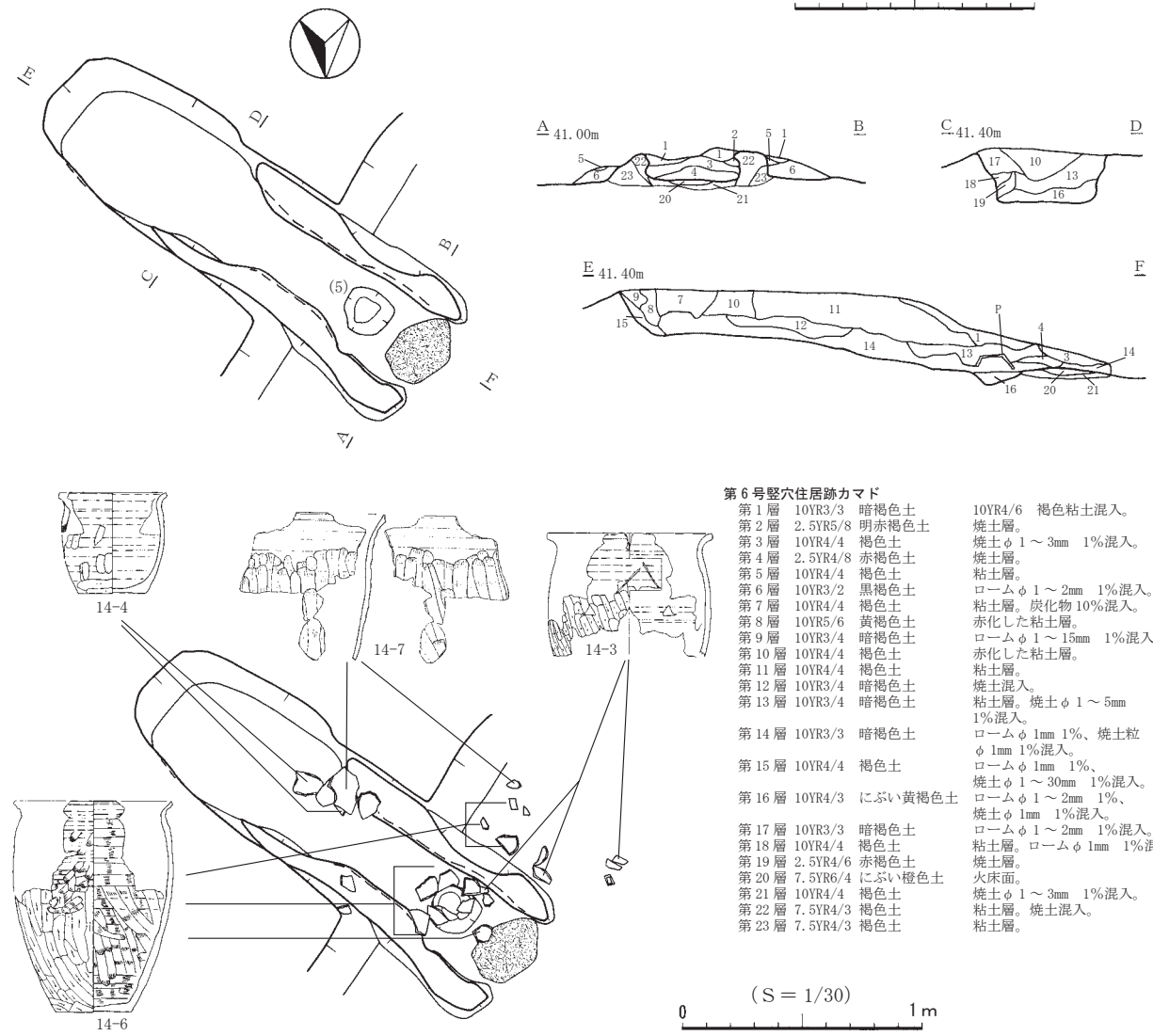
第３層　10YR2/2　黒褐色土
ロームφ１～30mm
10%混入。

第４層　10YR6/6　明黄褐色土
ロームφ１～30mm
15%混入。

第６号竪穴住居跡Pit1

第１層　10YR3/4　暗褐色土
ロームφ１～3mm
1%、白頭山火山灰混入。

第２層　10YR6/6　明黄褐色土
ローム質土。



第６号竪穴住居跡カマド

第１層	10YR3/3　暗褐色土	10YR4/6　褐色粘土混入。
第２層	2.5YR5/8 明赤褐色土	焼土層。
第３層	10YR4/4　褐色土	焼土φ１～3mm　1%混入。
第４層	2.5YR4/8 赤褐色土	焼土層。
第５層	10YR4/4　褐色土	粘土層。
第６層	10YR3/2　黒褐色土	ロームφ１～2mm　1%混入。
第７層	10YR4/4　褐色土	粘土層。炭化物10%混入。
第８層	10YR5/6　黄褐色土	赤化した粘土層。
第９層	10YR3/4　暗褐色土	ロームφ１～15mm　1%混入。
第10層	10YR4/4　褐色土	赤化した粘土層。
第11層	10YR4/4　褐色土	粘土層。
第12層	10YR3/4　暗褐色土	焼土混入。
第13層	10YR3/4　暗褐色土	粘土層。焼土φ１～5mm 1%混入。
第14層	10YR3/3　暗褐色土	ロームφ1mm 1%、焼土粒φ1mm 1%混入。
第15層	10YR4/4　褐色土	ロームφ1mm　1%、焼土φ１～30mm　1%混入。
第16層	10YR4/3　にぶい黄褐色土	ロームφ１～2mm　1%、焼土φ1mm　1%混入。
第17層	10YR3/3　暗褐色土	ロームφ１～2mm　1%混入。
第18層	10YR4/4　褐色土	粘土層。ロームφ1mm　1%混入。
第19層	2.5YR4/6 赤褐色土	焼土層。
第20層	7.5YR6/4 にぶい橙色土	火床面。
第21層	10YR4/4　褐色土	焼土φ１～3mm　1%混入。
第22層	7.5YR4/3 褐色土	粘土層。焼土混入。
第23層	7.5YR4/3 褐色土	粘土層。

図13　第６号竪穴住居跡（１）

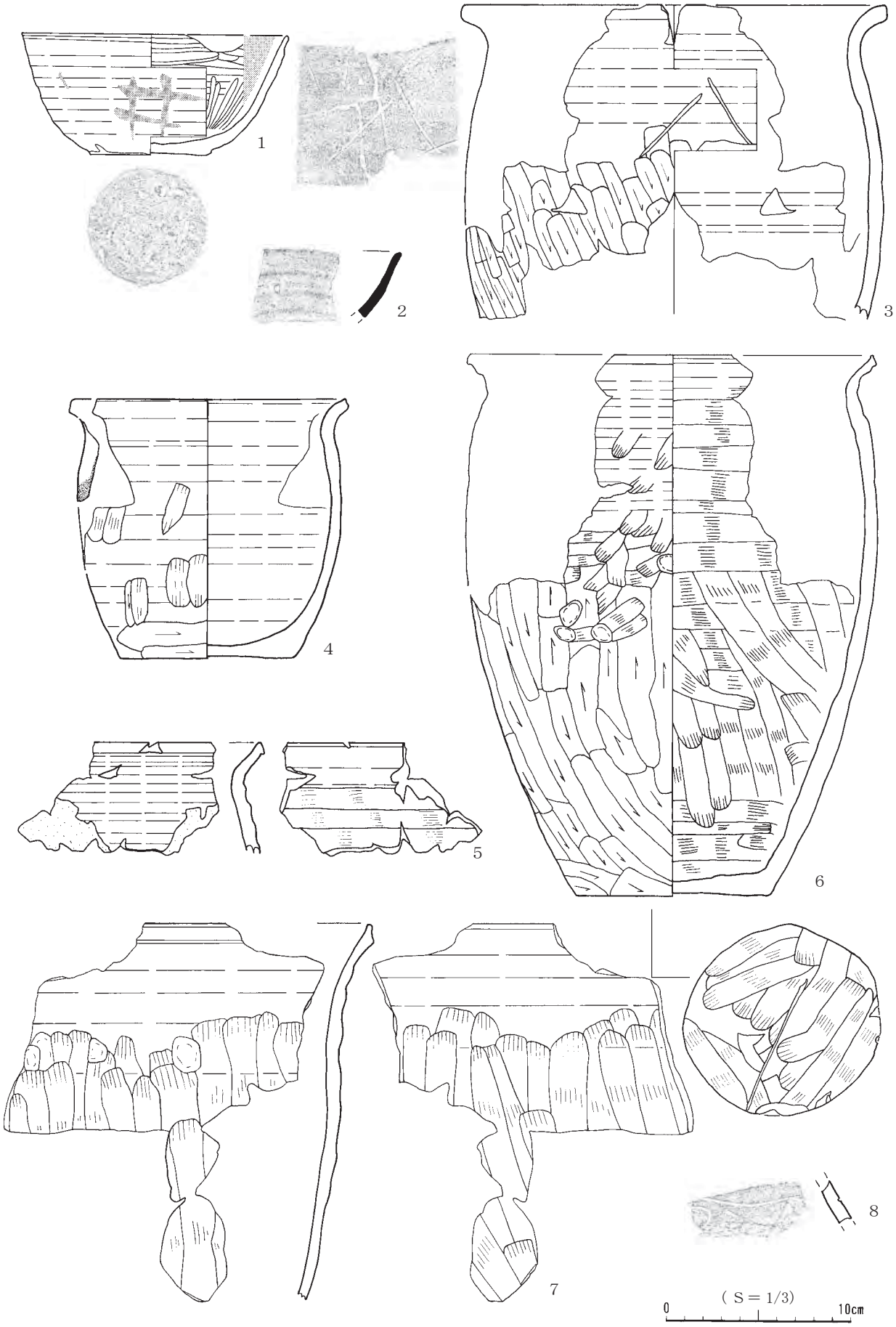


図 14　第 6 号竪穴住居跡（2）

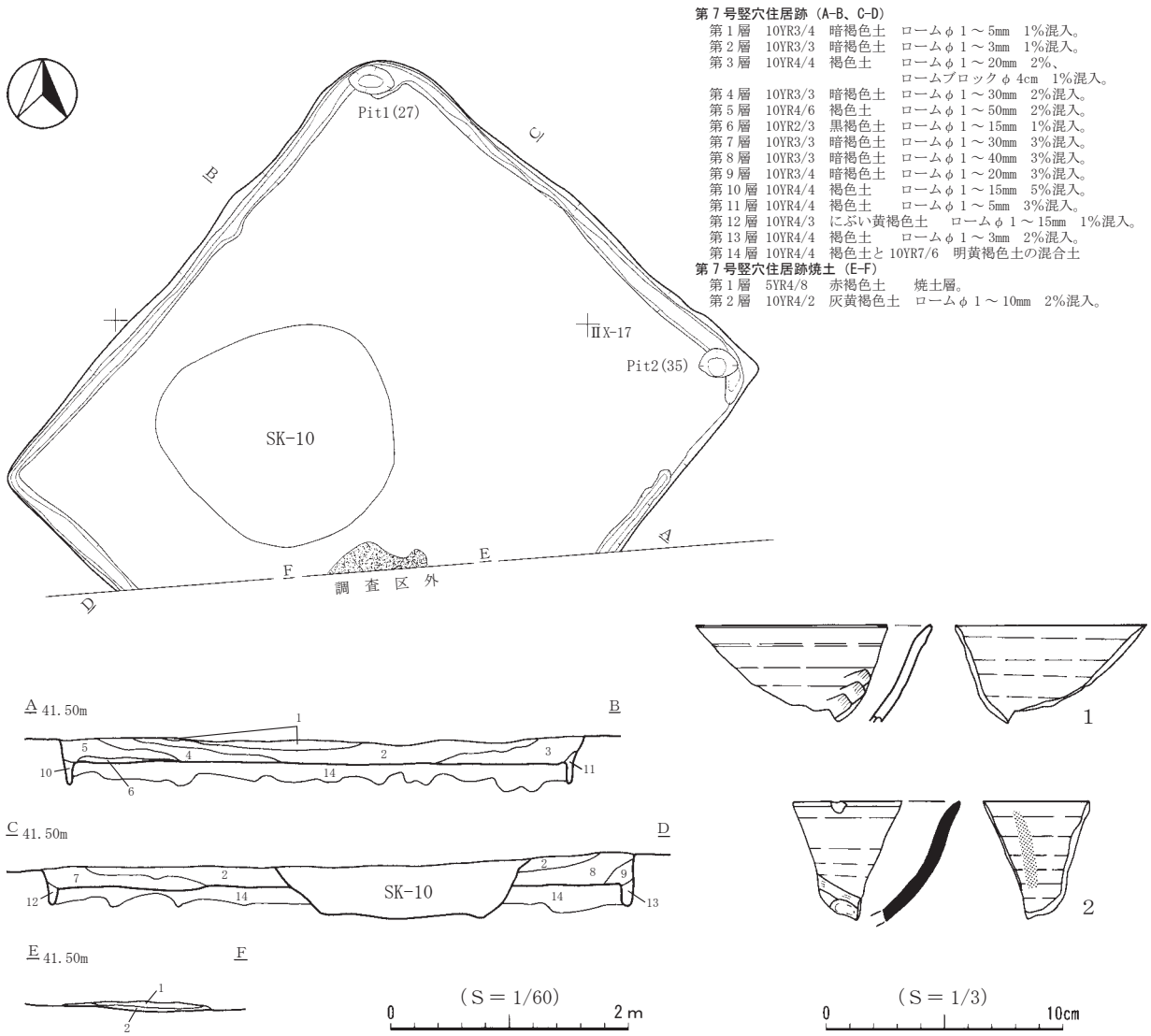


図 15　第７号竪穴住居跡

［壁・床面］壁高は 14 ～ 24cm で、北西壁はやや開きながら立ち上がるが、これ以外はほぼ垂直に立ち上がる。床面は褐色土と明黄褐色土の混合土で構築され、ほぼ平坦で、堅く締まっている。

［カマド］住居南側で焼土が検出されており、カマドに関連する可能性がある。

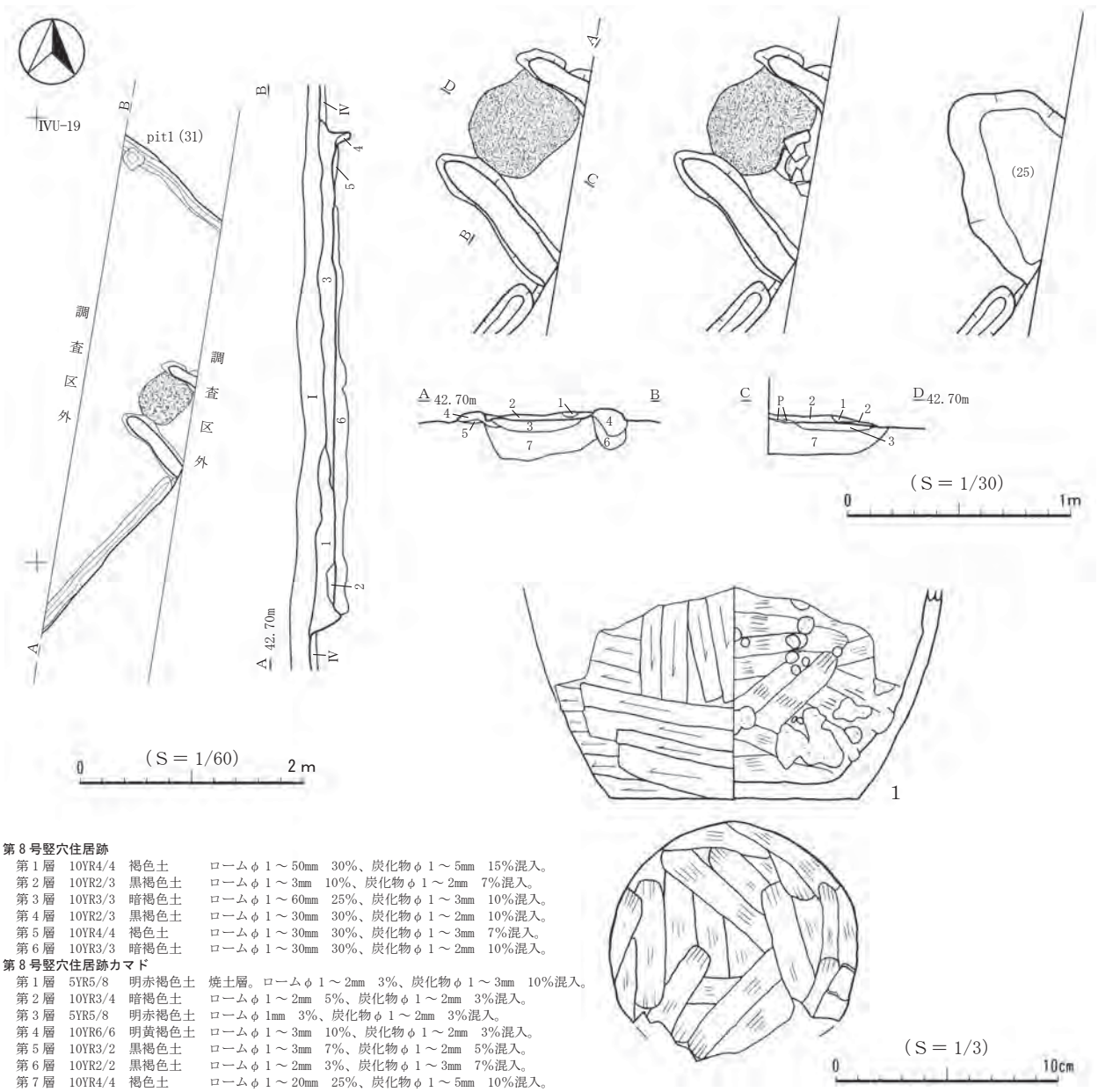
［柱穴］北隅・東隅にピットが検出され、柱穴の可能性が考えられる。

［周溝］南東壁北側を除き、幅９～ 17cm、深さ１～ 20cm の周溝が巡る。

［ピット］検出されなかった。

［出土遺物］土師器坏１点と須恵器坏１点を図示した。このほかに、小破片のため図示しなかったが、土師器甕の破片が出土している。

［小結］出土遺物も少なく、時期等の決定は困難であるが、第６号竪穴住居跡と近接していることから同時存在とは考えらづらく、第６号竪穴住居跡の前後の時期と推測される。



第８号竪穴住居跡

第１層	10YR4/4	褐色土	ロームφ１～50mm　30%、炭化物φ１～５mm　15%混入。
第２層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～3mm　10%、炭化物φ１～2mm　7%混入。
第３層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～60mm　25%、炭化物φ１～3mm　10%混入。
第４層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～30mm　30%、炭化物φ１～2mm　10%混入。
第５層	10YR4/4	褐色土	ロームφ１～30mm　30%、炭化物φ１～3mm　7%混入。
第６層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～30mm　30%、炭化物φ１～2mm　10%混入。

第８号竪穴住居跡カマド

第１層	5YR5/8	明赤褐色土	焼土層。ロームφ１～2mm　3%、炭化物φ１～3mm　10%混入。
第２層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ１～2mm　5%、炭化物φ１～2mm　3%混入。
第３層	5YR5/8	明赤褐色土	ロームφ1mm　3%、炭化物φ１～2mm　3%混入。
第４層	10YR6/6	明黄褐色土	ロームφ１～3mm　10%、炭化物φ１～2mm　3%混入。
第５層	10YR3/2	黒褐色土	ロームφ１～3mm　7%、炭化物φ１～2mm　5%混入。
第６層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ１～2mm　3%、炭化物φ１～3mm　7%混入。
第７層	10YR4/4	褐色土	ロームφ１～20mm　25%、炭化物φ１～5mm　10%混入。

図 16　第８号竪穴住居跡

第８号竪穴住居跡〈SI － 08〉（図 16）

［概要］農道４号から北側に延伸する水道管埋設に伴う調査区で検出された。標高約 42.3 ｍの北斜面の上位に位置する。住居中央の一部分を調査した。

［位置・確認］ⅣU－ 19・20 グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］北東壁と南東壁の一部が検出された。平面形は方形を呈すると考えられる。

［堆積土］ロームを中量混入する暗褐色土を主体とする。人為堆積と考えられる。

［壁・床面］壁高は 12 ～ 20cm で、壁は開きながら立ち上がる。床面はロームブロックを混入する暗褐色土で構築され、緩やかな起伏があり、北側が５cm ほど高くなっている。床構築土は住居北側では薄く、南側では厚くなっている。

［カマド］住居南東壁南側に位置する。袖と火床面が検出された。袖は粘土で構築され、左側の袖は検出できた部分の長さは 40cm、幅９～ 17cm、高さ１～４cm、右側の袖は長さ 74cm、幅 15 ～ 20cm、高さ

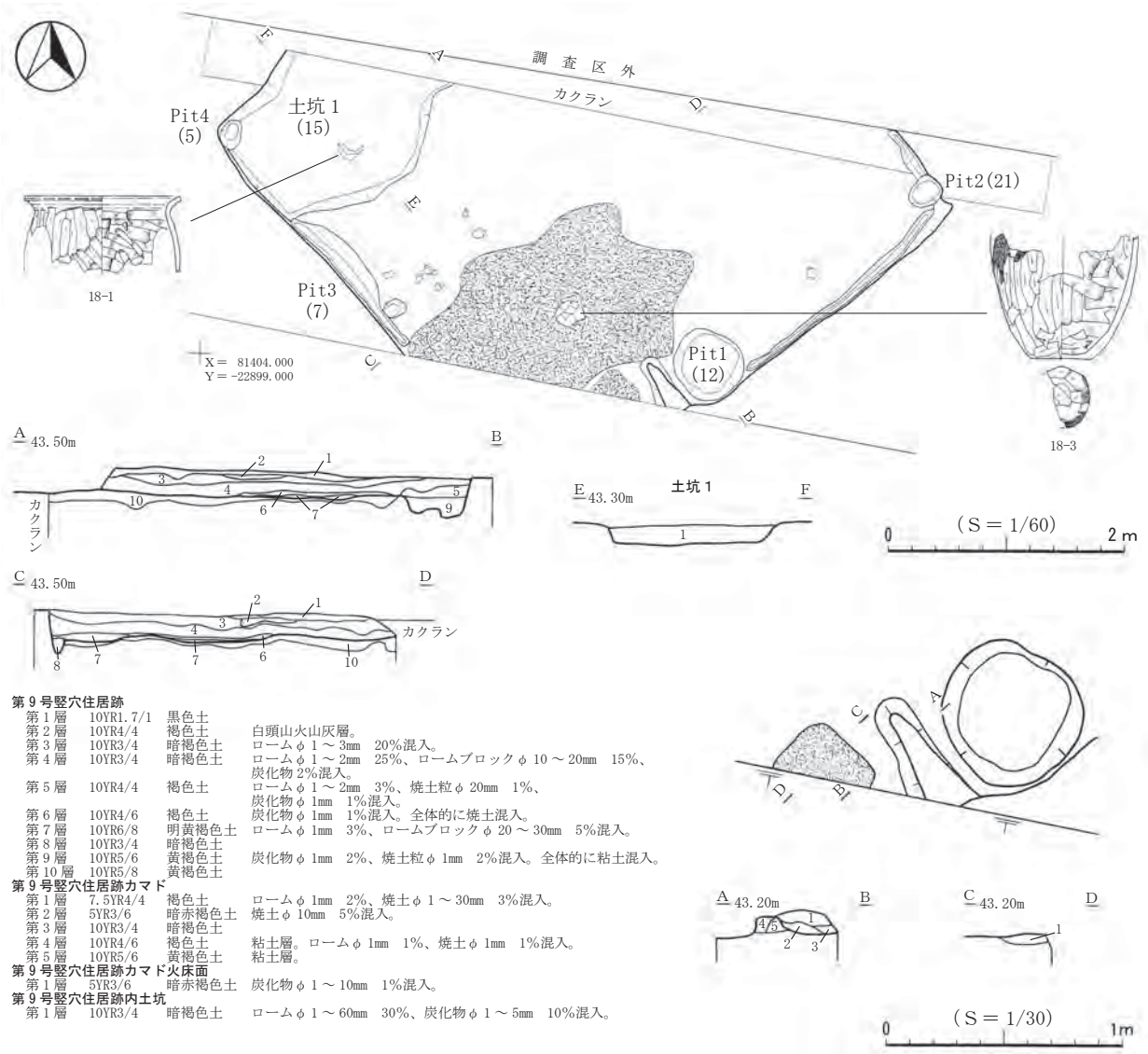


図 17　第９号竪穴住居跡（１）

３cm である。検出できた部分での両袖の間隔は 45 ～ 50cm である。火床面は長軸 47cm、短軸 41cm の楕円形を呈し、明赤褐色に赤変していた。火床面奥には支脚の土師器甕底部が伏せて置かれていた。カマド下部には深さ 25cm の楕円形の掘方を有する。

［柱穴］北東壁壁際に１基検出された。壁柱穴となる可能性も考えられる。

［周溝］検出された部分では、幅８～ 13cm、深さ６～ 13cm の周溝が巡る。

［ピット］検出されなかった。

［出土遺物］出土したのは、カマド支脚の土師器甕のみである。

［小結］調査部分が少なく、時期等の詳細は不明である。

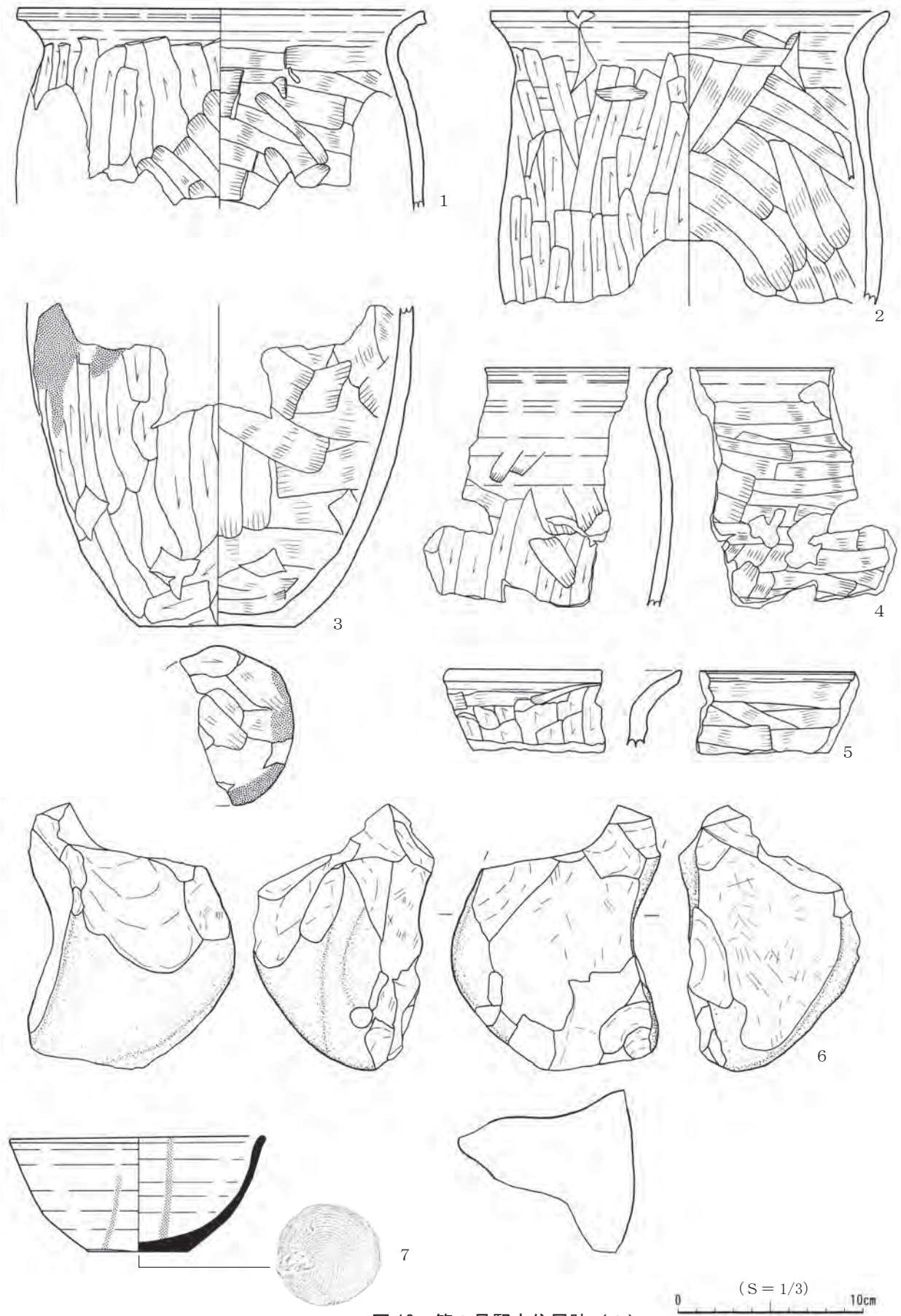


図 18　第９号竪穴住居跡（２）

第９号竪穴住居跡〈SI － 09〉（図 17・18）

［概要］農道４号東側の平坦面に位置し、標高は約 43.3 ｍである。住居北半は調査区外に延び、南隅は削平により検出されなかった。

［位置・確認］ＶＡ・Ｂ－ 29・30 グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］南東壁 4.4 ｍ、南西壁 4.5 ｍの方形を呈すると推定される。

［堆積土］ロームやロームブロックを混入する暗褐色土を主体とする。堆積土上位には部分的ではあるが、白頭山火山灰の堆積が認められた。床面直上の第５層・第６層には焼土が混入する。

［壁・床面］壁高は０～ 25cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は粘土が混入する黄褐色土で構築されており、緩やかな起伏がある。カマド周辺の床面には 240cm × 170cm の不整形の範囲で焼土が検出された。

［カマド］南東壁に位置し、左側の袖と火床面の北半のみ残存していた。袖は粘土で構築され、検出できた部分では長さ 55cm、幅 16 ～ 22cm、高さ５～ 10cm である。火床面は一辺が約 40cm の隅丸方形を呈すると考えられ、暗赤褐色に赤変していた。

［柱穴］東隅のピット２・西隅のピット４・南西壁中央のピット３が壁柱穴の可能性がある。

［周溝］幅４～ 21cm、深さ１～ 20cm の周溝が巡る。

［ピット］カマド北東側に、径 56 ～ 60cm の円形のピット（ピット１）が検出された。深さは 12cm で、堆積土から土師器甕（図 18 －２）と磨石（図 18 －６）が出土した。

［土坑］住居西隅に深さ 15cm の隅丸方形の土坑が１基検出された。北側は調査区外に延び、検出できた長辺は約 190cm、短辺は 148cm である。壁は開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面からは土師器甕（図 18 －１）が出土した。

［出土遺物］土師器甕５点、須恵器坏１点、磨石１点を図示した。土師器甕は４点がロクロ調整で、胴部にはケズリやナデの調整が施される。口縁が比較的短く、胴部の張り出しが弱い器形と考えられる。

［小結］堆積土上位に白頭山火山灰が堆積することから、白頭山火山灰降下以前の 10 世紀初頭の住居と考えられる。

第 10 号竪穴住居跡〈SI － 10〉（図 19）

［概要］農道 19 号の西側、農道の中央部に入り込む谷へ傾斜する東斜面に位置する。標高は約 40.3 ｍである。本住居の大部分は調査区外に位置し、攪乱により北側を壊されているため、幅 30cm を精査したのみである。本住居の北側には第 31 号溝跡が住居を囲むように構築されており、本住居に伴う外周溝と考えられる。

［位置・確認］ⅣＦ・Ｇ－ 51 ～ 53 グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］平面形は方形を呈すると考えられるが、規模は不明である。

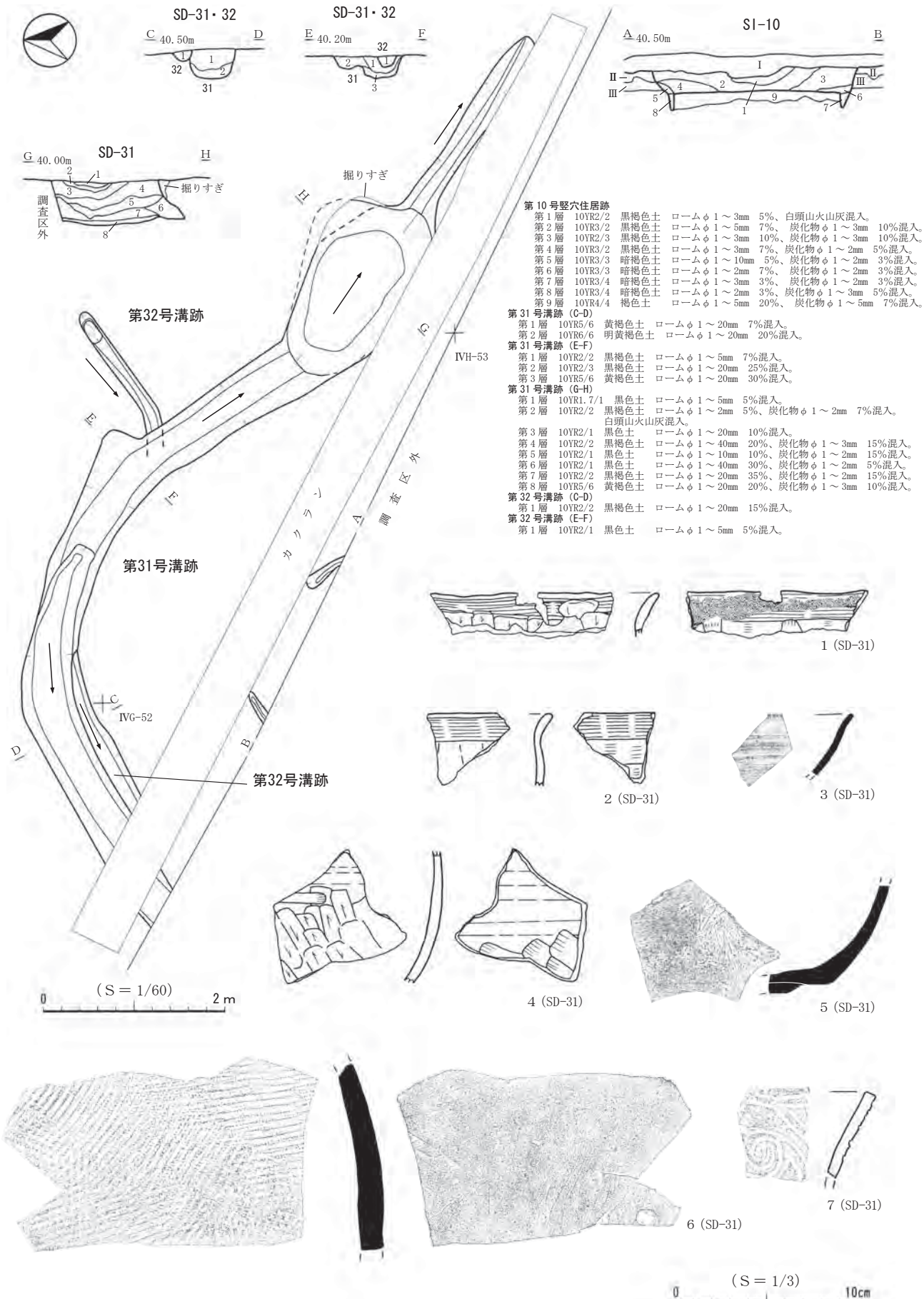
［堆積土］ロームと炭化物が混入する黒褐色土を主体とする。第１層には白頭山火山灰が混入する。

［壁・床面］壁高は 24 ～ 28cm で、壁はやや開きながら立ち上がる。床面は炭化物が混入する褐色土で構築されており、ほぼ平坦である。

［カマド］検出されなかった。

［柱穴］検出されなかった。

［周溝］幅８～ 14cm、深さ 13 ～ 24cm の周溝が検出された。



第10号竪穴住居跡

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～3mm 5%、白頭山火山灰混入。
第2層	10YR3/2	黒褐色土	ロームφ1～5mm 7%、炭化物φ1～3mm 10%混入。
第3層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ1～3mm 10%、炭化物φ1～3mm 10%混入。
第4層	10YR3/2	黒褐色土	ロームφ1～3mm 7%、炭化物φ1～2mm 5%混入。
第5層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ1～10mm 5%、炭化物φ1～2mm 3%混入。
第6層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ1～2mm 7%、炭化物φ1～2mm 3%混入。
第7層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ1～3mm 3%、炭化物φ1～2mm 3%混入。
第8層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ1～2mm 3%、炭化物φ1～3mm 5%混入。
第9層	10YR4/4	褐色土	ロームφ1～5mm 20%、炭化物φ1～5mm 7%混入。

第31号溝跡（C-D）

第1層	10YR5/6	黄褐色土	ロームφ1～20mm 7%混入。
第2層	10YR6/6	明黄褐色土	ロームφ1～20mm 20%混入。

第31号溝跡（E-F）

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～5mm 7%混入。
第2層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ1～20mm 25%混入。
第3層	10YR5/6	黄褐色土	ロームφ1～20mm 30%混入。

第31号溝跡（G-H）

第1層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ1～5mm 5%混入。
第2層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～2mm 5%、炭化物φ1～2mm 7%混入。白頭山火山灰混入。
第3層	10YR2/1	黒色土	ロームφ1～20mm 10%混入。
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～40mm 20%、炭化物φ1～3mm 15%混入。
第5層	10YR2/1	黒色土	ロームφ1～10mm 10%、炭化物φ1～2mm 15%混入。
第6層	10YR2/1	黒色土	ロームφ1～40mm 30%、炭化物φ1～2mm 5%混入。
第7層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～20mm 35%、炭化物φ1～2mm 15%混入。
第8層	10YR5/6	黄褐色土	ロームφ1～20mm 20%、炭化物φ1～3mm 10%混入。

第32号溝跡（C-D）

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～20mm 15%混入。

第32号溝跡（E-F）

第1層	10YR2/1	黒色土	ロームφ1～5mm 5%混入。

図19　第10号竪穴住居跡

［ピット］検出されなかった。
［外周溝］第 31 号溝跡は住居北側を巡る溝跡である。検出された部分では、平面形は弧状である。斜面上位の西側では幅 48 ～ 75cm で、底面に段差を有し、深さは 12 ～ 42cm である。斜面下位の東側では部分的に広がり、最大幅は 110cm を上回る土坑状となり、深さは 52cm を測る。東端は再び幅が狭まり、26 ～ 30cm となる。断面形はＵ字状を呈し、土坑状の部分では壁はオーバーハングし、フラスコ状となる。堆積土はロームを中量混入する黒褐色土を主体とするが、土坑状の部分では炭化物が中量混入し、堆積土上位に白頭山火山灰が堆積する。第 32 号溝跡は、第 31 号溝跡に沿って延び、中央部で北東方向に屈曲するＳ字状の溝跡である。幅 16 ～ 20cm で、深さは１～ 12cm である。第 31 号溝跡より新しく規模も小さいことから、外周溝の可能性は低いと考えられる。
［出土遺物］住居からは遺物は出土しなかった。遺物はすべて第 31 号溝跡から出土したものである。土師器甕３点、須恵器坏１点、須恵器壷１点、須恵器甕１点を図示した。この他に、小破片のため図示しなかったが、土師器坏の破片も出土している。図 19 －４はロクロ使用の甕で、胴部にケズリが施される。５は須恵器壷の底部で、底面に須恵器片が溶着したものである。６は外面に円形の変色が認められる。
［小結］住居部分については、調査面積が狭く遺物も出土していないため詳細は不明であるが、住居と外周溝の堆積土の上位に白頭山火山灰が混入することから、白頭山火山灰降下以前の 10 世紀初頭の住居と考えられる。

第２節　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は３棟検出されたが、いずれも削平が著しく、残存状況はよくない。

第１号掘立柱建物跡と第２号掘立柱建物跡は長軸方向がほぼ同じで、竪穴住居跡とも軸方向が似ることから、平安時代のものである可能性が高い。第３号掘立柱建物跡については、他の２棟に比べ、規模が大きく、長軸方向も異なっており、柱穴の堆積土の状況から比較的新しく、平安時代以降のものと考えられる。

図中に示した柱間寸法はｍで表している。（　）には柱穴の深さを cm で示している。

第１号掘立柱建物跡〈SB － 01〉（図 20）

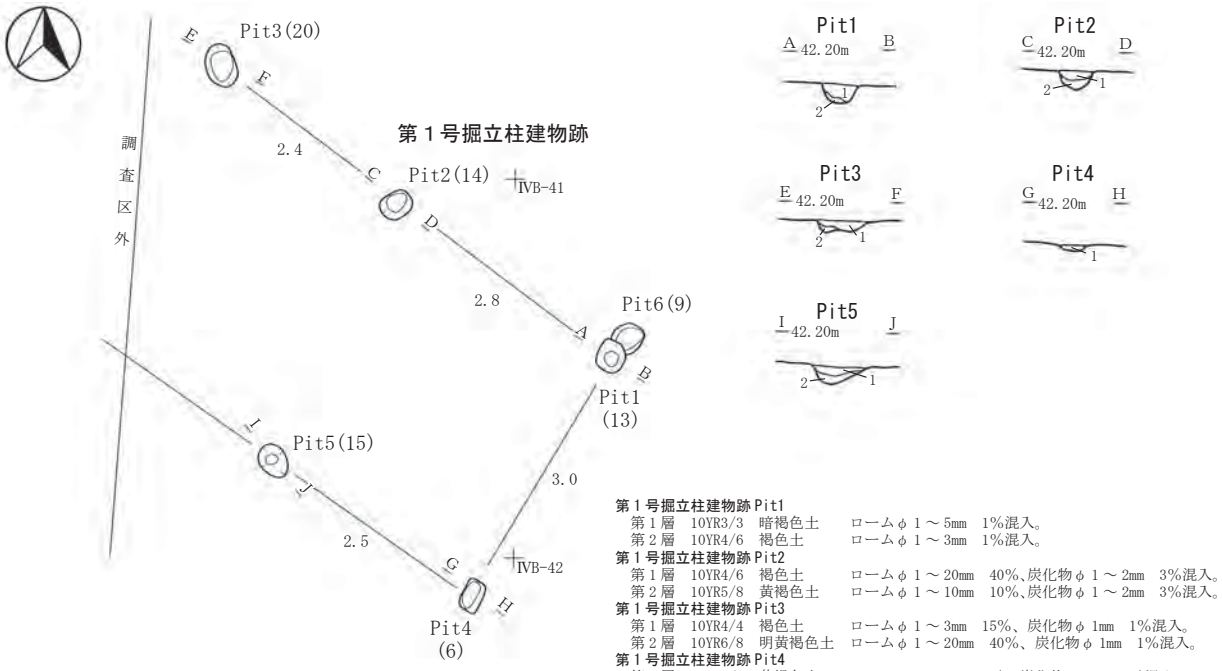
農道４号、ⅣＡ・ⅣＢ－ 40 ～ 42 グリッドに位置し、標高は約 41.9 ～ 42.1 ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。北東－南西方向柱列 3.0 ｍ、北西－南東方向柱列 5.2 ｍの１間×２間の建物跡で、西隅の柱穴は調査区外に位置すると考えられる。長軸方向はＮ－ 53°－Ｗである。柱穴は径 22 ～ 46cm の円形あるいは楕円形を呈する。確認面からの深さはピット４が６cm と浅いほかは、13 ～ 20cm である。

第２号掘立柱建物跡〈SB － 02〉（図 20）

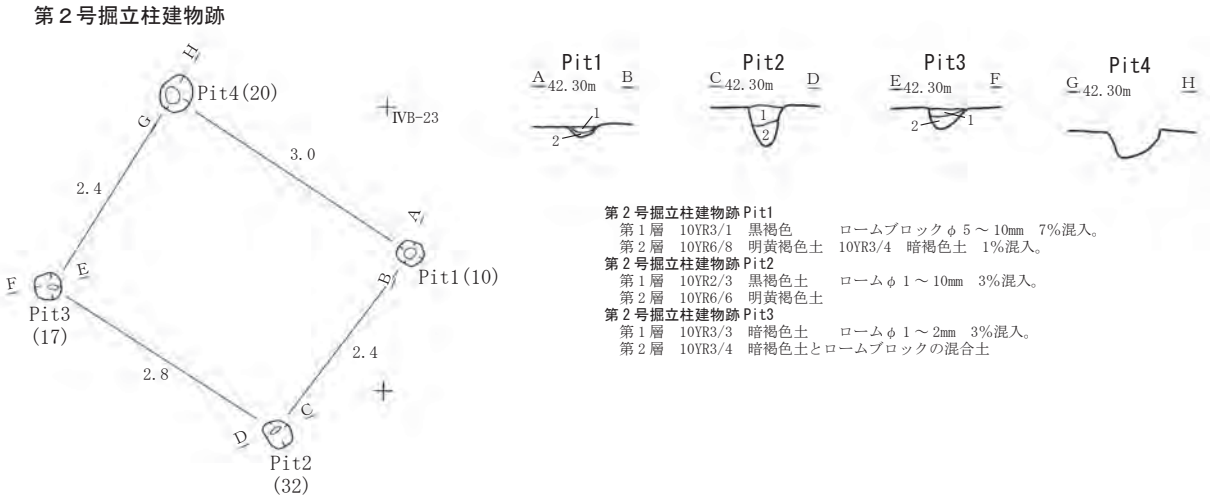
農道４号、ⅣＡ・ⅣＢ－ 22・23 グリッドに位置し、標高は約 42.0 ～ 42.2 ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。北東―南西方向柱列 2.4 ｍ、北西―南東方向柱列 2.8 ～ 3.0 ｍの１間×１間の建物跡である。長軸方向はＮ－ 57°－Ｗである。柱穴は径 26 ～ 40cm の円形あるいは楕円形を呈する。確認面からの深さはピット２が 32cm と深いほかは、10 ～ 20cm である。

第３号掘立柱建物跡〈SB － 03〉（図 20）

農道４号、ⅡＶ～ⅡＸ－ 48 ～ 50 グリッドに位置し、標高は約 38.1 ～ 38.3 ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。北東－南西方向柱列 7.1 ｍ、北西－南東方向柱列 3.5 ｍ以上の４間×２間以上の建物跡である。北側は調査区外に延びるため全体像は不明であるが、庇付きの建物跡と考えられる。長軸方向はＮ－ 65°－Ｅである。柱穴は円形あるいは楕円形を呈し、周辺部の柱穴が径 26 ～ 38cm であるのに対し、中央部の３基の柱穴は径 35 ～ 60cm で周辺部の柱穴よりも規模が大きい。確認面からの深さは 27 ～ 46cm で、北側の柱穴が南側の柱穴よりも深い。



第１号掘立柱建物跡 Pit1
第１層　10YR3/3　暗褐色土　　ロームφ１～5mm　1%混入。
第２層　10YR4/6　褐色土　　ロームφ１～3mm　1%混入。
第１号掘立柱建物跡 Pit2
第１層　10YR4/6　褐色土　　ロームφ１～20mm　40%、炭化物φ１～2mm　3%混入。
第２層　10YR5/8　黄褐色土　　ロームφ１～10mm　10%、炭化物φ１～2mm　3%混入。
第１号掘立柱建物跡 Pit3
第１層　10YR4/4　褐色土　　ロームφ１～3mm　15%、炭化物φ1mm　1%混入。
第２層　10YR6/8　明黄褐色土　ロームφ１～20mm　40%、炭化物φ1mm　1%混入。
第１号掘立柱建物跡 Pit4
第１層　10YR5/8　黄褐色土　　ロームφ１～3mm　3%、炭化物φ1mm　1%混入。
第１号掘立柱建物跡 Pit5
第１層　10YR4/6　褐色土　　ロームφ１～20mm　30%、炭化物φ1mm　7%混入。
第２層　10YR6/8　明黄褐色土　ロームφ１～50mm　40%、炭化物φ１～3mm　7%混入。



第２号掘立柱建物跡 Pit1
第１層　10YR3/1　黒褐色　　ロームブロックφ５～10mm　7%混入。
第２層　10YR6/8　明黄褐色土　10YR3/4　暗褐色土　1%混入。
第２号掘立柱建物跡 Pit2
第１層　10YR2/3　黒褐色土　　ロームφ１～10mm　3%混入。
第２層　10YR6/6　明黄褐色土
第２号掘立柱建物跡 Pit3
第１層　10YR3/3　暗褐色土　　ロームφ１～2mm　3%混入。
第２層　10YR3/4　暗褐色土とロームブロックの混合土

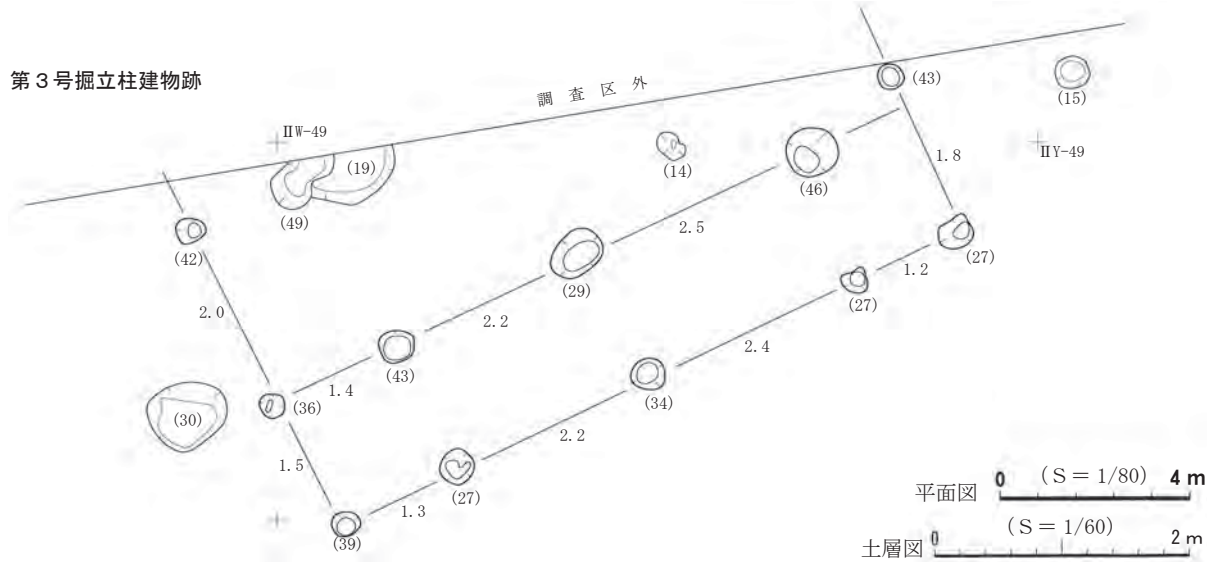


図 20　掘立柱建物跡

第３節　土坑

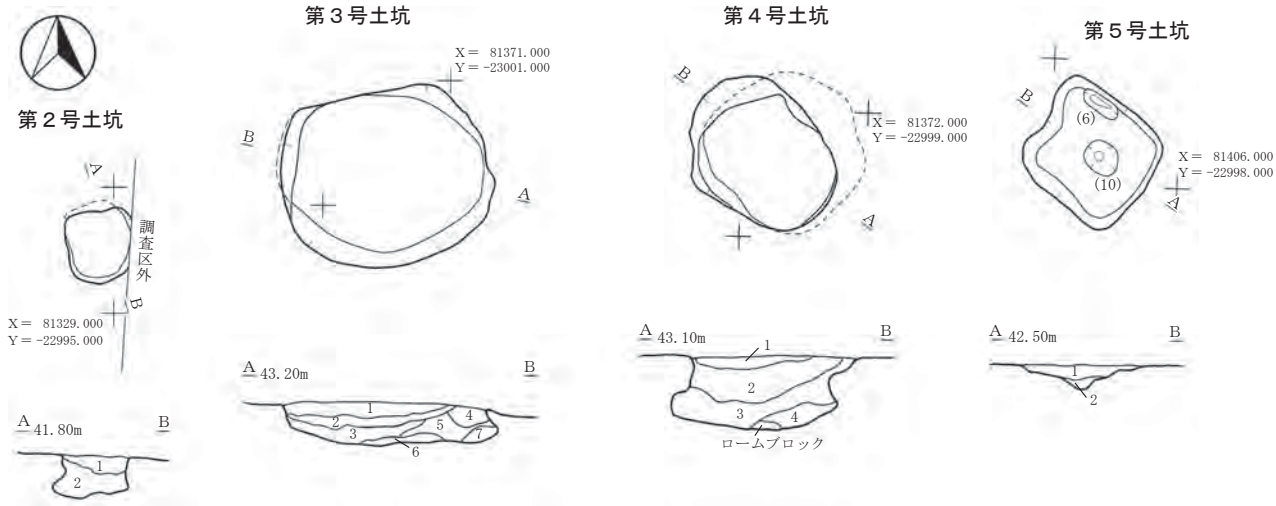
土坑は11基検出された。分布は住居跡とほぼ同様で、調査区中央部に位置するものが多く、２・３基まとまって構築されているものもある。出土遺物や他の遺構との重複などから、平安時代に属すると考えられるものが大半である。なお、第１号土坑は第２号竪穴住居跡の住居内土坑と判断したため、欠番とした。

第２号土坑〈SK－02〉（図21）
［位置・確認］農道４号ほぼ中央、ⅣＢ－43グリッドに位置し、標高は約41.6ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。
［平面形・規模］東側が調査区外に位置するため明確ではないが、径約60cmの不整な円形を呈すると推測される。検出面からの深さは34cmである。
［堆積土］ロームブロック混入土を主体とし、人為堆積と考えられる。
［壁・底面］底面が開口部より広がり、断面は袋状を呈する。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第３号土坑〈SK－03〉（図21）
［位置・確認］農道４号ほぼ中央、ⅢＹ－33グリッドに位置し、標高は約43.0ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。本土坑の東側には第４号土坑が検出された。
［平面形・規模］径152～160㎝の不整な円形を呈する。検出面からの深さは27cmである。
［堆積土］ロームや粘土が混入する黒褐色土を主体とするが、底面直上には褐色土が堆積する。
［壁・底面］壁は開きながら立ち上がるが、西壁はオーバーハングし、袋状である。底面は緩やかな起伏がある。
［出土遺物］小破片のため掲載しなかったが、土師器甕の破片が出土した。

第４号土坑〈SK－04〉（図21）
［位置・確認］農道４号ほぼ中央、ⅢＹ・ⅣＡ－33グリッドに位置し、標高は約43.0ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。本土坑の西側には第３号土坑が検出された。
［平面形･規模］開口部は長軸136cm･短軸114cmの不整な楕円形を呈し、底面は径120cmの円形である。検出面からの深さは53cmである。
［堆積土］ロームやロームブロックが混入する黒褐色土を主体とする。
［壁・底面］底面が開口部より広がり、断面は袋状を呈する。底面中央部がやや凹み、底面全体が緩やかに傾斜している。
［出土遺物］小破片のため掲載しなかったが、土師器甕の破片が出土した。

第５号土坑〈SK－05〉（図21）
［位置・確認］農道４号ほぼ中央、ⅣＡ－24グリッドに位置し、標高は約42.3ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。



第２号土坑

第１層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ２～5mm　3%、 ロームブロックφ10～50mm　5%混入。
第２層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～2mm　3%、 ロームブロックφ10～20mm　3%混入。

第３号土坑

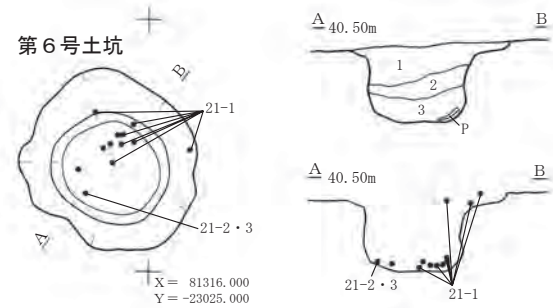
第１層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ２～3mm　3%、炭化物φ２～3mm　1%混入。
第２層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～2mm　3%、 ロームブロックφ10mm　2%、粘土φ10mm　1%混入。
第３層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～5mm　3%、 ロームブロックφ10～15mm　5%混入。
第４層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ５～10mm　1%、粘土φ10～15mm　2%混入。
第５層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～3mm　5%、 ロームブロックφ15mm　7%、粘土φ30mm　1%混入。
第６層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ４～5mm　1%、 ロームブロックφ10mm　1%、粘土φ10～40mm　2%混入。
第７層	10YR4/4	褐色土	ロームφ1mm　1%、 ロームブロックφ10mm　1%、 粘土φ40mm　1%混入。

第４号土坑

第１層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ１～2mm　10%、 ロームブロックφ10～20mm　10%混入。
第２層	10YR3/2	黒褐色土	ロームφ１～2mm　10%、 ロームブロックφ10～20mm　5%混入。
第３層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ１～2mm　10%、 ロームブロックφ10～60mm　7%混入。
第４層	10YR3/1	黒褐色土	ロームブロックφ10～20mm　20%混入。

第５号土坑

第１層	10YR2/1	黒色土	ロームφ２～3mm　3%、 ロームブロックφ５～80mm　7%混入。
第２層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ２～3mm　10%、 ロームブロックφ10～50mm　40%混入。



第６号土坑

第１層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～30mm　10%、炭化物φ1mm　3%混入。
第２層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～60mm　30%、炭化物φ１～3mm　7%混入。
第３層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ１～40mm　25%、炭化物φ１～5mm　10%混入。

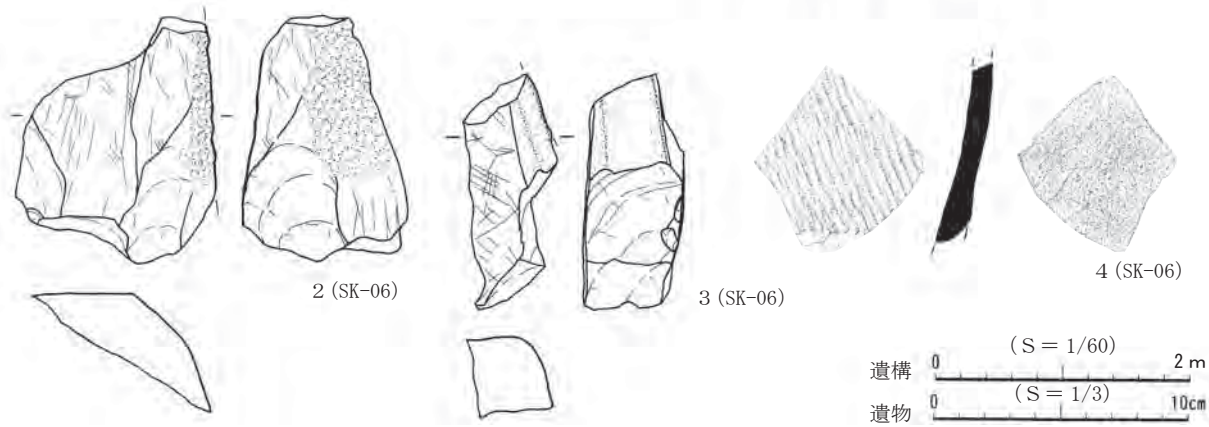


図21　土坑（１）

［平面形・規模］長辺 103cm・短辺 94cm の長方形で、北西辺中央部がやや凹む。検出面からの深さは 13cm である。
［堆積土］黒色土の単層である。
［壁・底面］壁は開きながら立ち上がる。底面には起伏があり、中央部に径 24 ～ 28cm・深さ 10cm の円形のピットが、北東壁際に長軸 34 cm・短軸 12cm・深さ６cm の楕円形のピットが検出された。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第６号土坑〈SK － 06〉（図 21）
［位置・確認］農道４号ほぼ中央、ⅢＳ－ 46 グリッドに位置し、標高は約 40.4 ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。
［平面形・規模］開口部は径 140 ～ 150cm の不整な円形を呈し、底面は径 76cm の円形である。検出面からの深さは 56cm である。
［堆積土］ロームや炭化物が混入する黒褐色土を主体とする。
［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で大きく開く。底面はほぼ平坦である。
［出土遺物］堆積土及び底面から土師器甕・須恵器甕・砥石・磨石が出土した。遺物は土坑の北東～南西部にかけて出土し、北東側では確認面付近からと底面からやや浮いた状態で、南西側では底面から出土している。遺物は、土坑周辺の土が流れ込んだ際に混入したものと推測される。

第７号土坑〈SK － 07〉（図 22）
［位置・確認］農道４号西側、ＩＷ－ 53 グリッドに位置し、標高は約 38.4 ｍである。第Ⅲ層上面で確認した。
［重複］第 20 号溝跡と重複し、本土坑が古い。
［平面形・規模］重複により東半を欠失しているが、長軸約２ｍ、短軸約 1.6 ｍの楕円形を呈すると推定される。検出面からの深さは 26cm である。
［堆積土］黒褐色土を主体とする。
［壁・底面］壁は開きながら立ち上がり、底面には起伏がある。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第８号土坑〈SK － 08〉（図 22）
［位置・確認］農道４号中央、ⅢＷ－ 46 グリッドに位置し、標高は約 40.9 ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。本土坑の北東側には、第１号竪穴住居跡が検出された。
［平面形･規模］攪乱により明確ではないが､不整な楕円形を呈すると考えられる。長軸は 148cm を測り、短軸は約 120cm と推定される。検出面からの深さは 30cm である。
［堆積土］ロームが混入する黒褐色土を主体とする。
［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。
［出土遺物］堆積土及び底面から須恵器坏・甕が出土した。

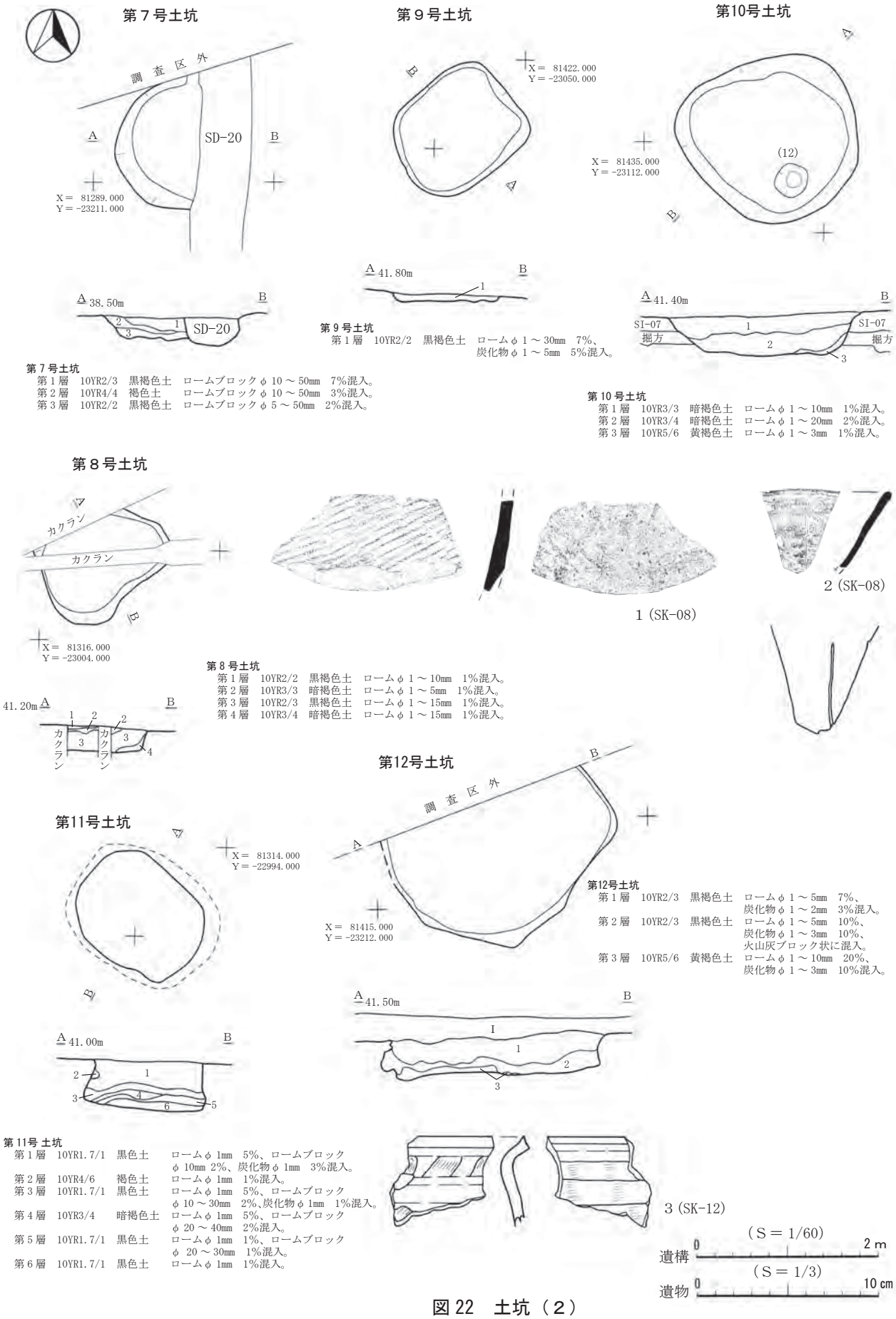

第７号土坑
調査区外
SD-20
A
B
X＝ 81289.000
Y＝-23211.000
38.50m
第７号土坑
第１層　10YR2/3　黒褐色土　ロームブロックφ10～50mm　7%混入。
第２層　10YR4/4　褐色土　ロームブロックφ10～50mm　3%混入。
第３層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロックφ5～50mm　2%混入。
第９号土坑
X＝ 81422.000
Y＝-23050.000
41.80m
第９号土坑
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1～30mm　7%、
炭化物φ1～5mm　5%混入。
第10号土坑
X＝ 81435.000
Y＝-23112.000
(12)
41.40m
SI-07
掘方
第10号土坑
第１層　10YR3/3　暗褐色土　ロームφ1～10mm　1%混入。
第２層　10YR3/4　暗褐色土　ロームφ1～20mm　2%混入。
第３層　10YR5/6　黄褐色土　ロームφ1～3mm　1%混入。
第８号土坑
カクラン
X＝ 81316.000
Y＝-23004.000
41.20m
第８号土坑
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1～10mm　1%混入。
第２層　10YR3/3　暗褐色土　ロームφ1～5mm　1%混入。
第３層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ1～15mm　1%混入。
第４層　10YR3/4　暗褐色土　ロームφ1～15mm　1%混入。
1 (SK-08)
2 (SK-08)
第11号土坑
X＝ 81314.000
Y＝-22994.000
41.00m
第11号土坑
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　5%、ロームブロック
φ10mm 2%、炭化物φ1mm　3%混入。
第２層　10YR4/6　褐色土　ロームφ1mm　1%混入。
第３層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　5%、ロームブロック
φ10～30mm　2%、炭化物φ1mm　1%混入。
第４層　10YR3/4　暗褐色土　ロームφ1mm　5%、ロームブロック
φ20～40mm　2%混入。
第５層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　1%、ロームブロック
φ20～30mm　1%混入。
第６層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　1%混入。
第12号土坑
調査区外
X＝ 81415.000
Y＝-23212.000
41.50m
第12号土坑
第１層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ1～5mm　7%、
炭化物φ1～2mm　3%混入。
第２層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ1～5mm　10%、
炭化物φ1～3mm　10%、
火山灰ブロック状に混入。
第３層　10YR5/6　黄褐色土　ロームφ1～10mm　20%、
炭化物φ1～3mm　10%混入。
3 (SK-12)
遺構
(S＝1/60)
0
2 m
遺物
(S＝1/3)
0
10 cm

図 22　土坑（２）

第９号土坑〈SK － 09〉（図 22）

［位置・確認］農道 23 号東側、ⅢＭ－ 20 グリッドに位置し、標高は約 41.6 ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］長辺 146cm、短辺 121cm の隅丸方形を呈し、南西隅がやや張り出す平面形である。検出面からの深さは 22cm である。

［堆積土］黒褐色土の単層である。

［壁・底面］壁は開きながら立ち上がり、底面には起伏がある。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第 10 号土坑〈SK － 10〉（図 22）

［位置・確認］農道 23 号、ⅡＷ－ 17 グリッドに位置し、標高は約 41.2 ｍである。第７号竪穴住居跡の床面で確認した。

［重複］第７号竪穴住居跡と重複し、本土坑が新しい。

［平面形・規模］開口部は径 195cm のやや歪な円形を呈する。検出面からの深さは 54cm である。

［堆積土］暗褐色土を主体とする。

［壁・底面］壁は開きながら立ち上がり、底面には極緩やかな起伏が見られる。

［出土遺物］小破片のため掲載しなかったが、土師器坏・土師器甕の破片が出土した。

第 11号 土坑〈SK － 11〉（図 22）

［位置・確認］農道 19 号の西側、農道４号との交点付近・ⅣＢ－ 47 グリッドに位置し、標高は約 40.8 ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。本土坑西側には第１号竪穴住居跡が検出された。

［平面形・規模］開口部は長軸 147cm、短軸 120cm の楕円形を呈し、底面は長軸 190cm、短軸 136cm の楕円形を呈する。検出面からの深さは 46cm である。

［堆積土］黒色土を主体とする。第３層以下は自然堆積の様相を呈するが、第１層は人為堆積と考えられる。

［壁・底面］底部が開口部より広い袋状を呈する。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

第 12 号土坑〈SK － 12〉（図 22）

［位置・確認］農道 23 号の西側、ＩＷ－ 22 グリッドに位置し、標高は約 41.1 ｍである。第Ⅳ層上面で確認した。

［平面形・規模］一辺 2.5 ｍの不整な方形と推測される。検出面からの深さは 37cm である。

［堆積土］ロームと炭化物が中量混入する黒褐色土を主体とするが、底面直上には粘土が堆積していた。人為堆積と考えられる。第２層には火山灰がブロック状に混入していた。

［壁・底面］壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面には起伏がある。

［出土遺物］堆積土から土師器甕が出土した。

第４節　溝跡

溝跡は 40 条検出された。調査区が道路幅と狭いため、全体像が明らかになったものは少ない。出土遺物や堆積土の状況などから、平安時代に属すると考えられるものが大半である。

検出面は、調査区中央部では第Ⅳ層、緩やかな西斜面となっている農道４号西側と農道 23 号西側では第Ⅱ層あるいは第Ⅲ層である。

第 23 号・第 24 号溝跡は第４号竪穴住居跡の外周溝、第 31 号・第 32 号溝跡は第 10 号竪穴住居跡の外周溝と考えられたため、それぞれの住居の項に掲載している。なお、第９号溝跡・第 25 号溝跡・第 33 号溝跡は遺構番号の重複などによる欠番である。

図中の「→」は溝底面の高低差を示し、「高→低」を表している。

以下、概略について述べることとする。個々の溝跡の位置・規模等については、後掲の計測表を参照されたい。

第３号溝跡（図 23）

本溝跡は調査区を南北に縦断する溝跡で、両端は調査区外に延びる。検出できた長さは 6.3 ｍで、緩やかに蛇行している。幅は 32 ～ 46cm とほぼ一定である。深さは 24 ～ 49cm で、南側が浅く、北側が深くなっており、底面は南から北に向かって傾斜している。

第６号・第７号溝跡（図 24）

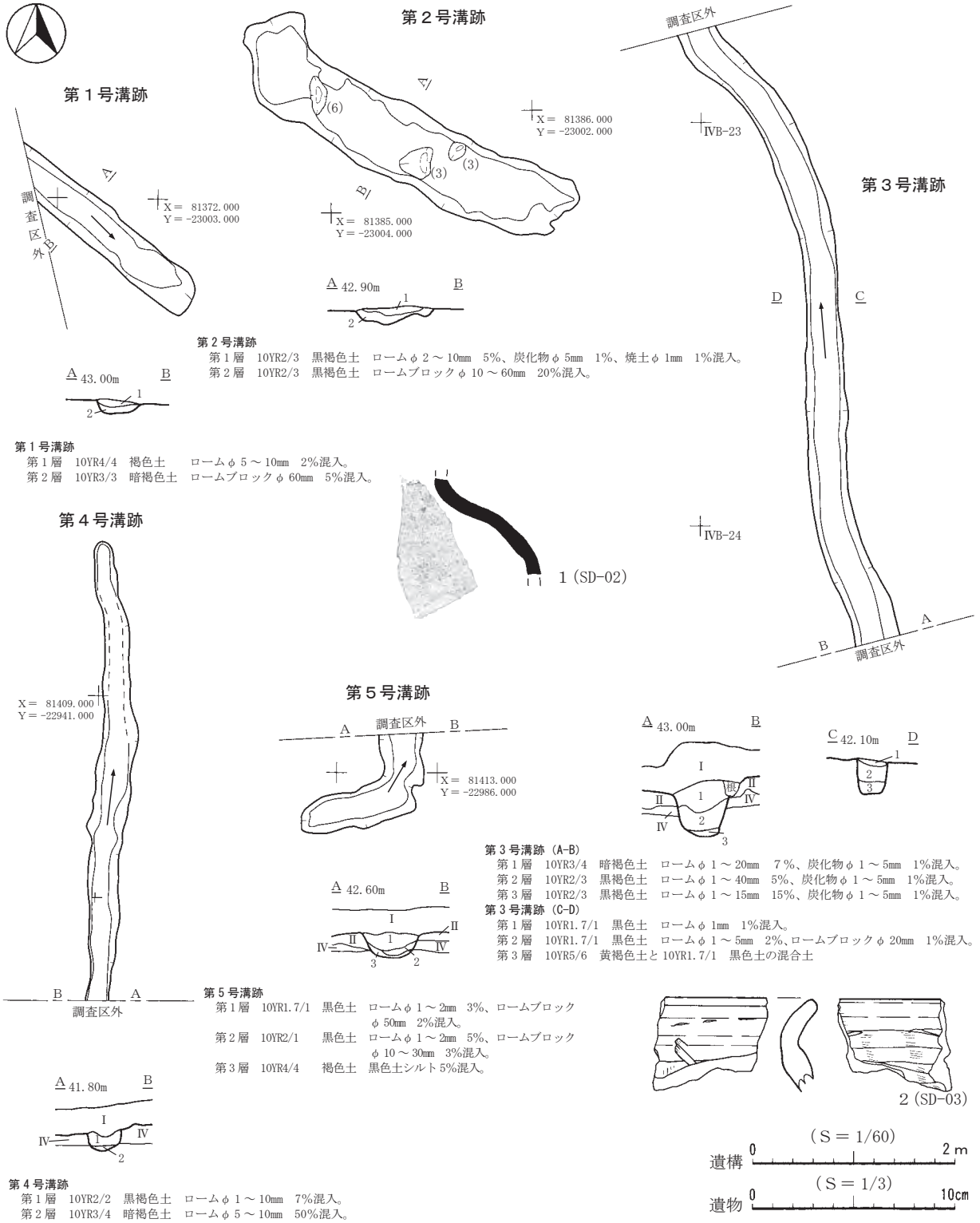
第６号溝跡は調査区を北東－南西方向に斜めに横切る溝跡で、検出された長さは 31.6 ｍである。底面は北東から南西方向に向かって緩やかに傾斜している。第７号溝跡は、第６号溝跡に平行して延びる溝跡で、長さは 9.8 ｍを測る。底面は第６号溝跡同様、北東から南西方向に向かって緩やかに傾斜している。第６号溝跡からは土師器塝１点と須恵器甕１点を図示した。このほかに小破片のため図示しなかったが、土師器坏と土師器甕の破片が出土している。図 24 － 1 は頸部がやや括れる器形で、外面にはタール状の炭化物が付着している。摩滅が著しく、胎土には径２㎜の砂粒が混入している。

第８号溝跡（図 24）

本溝跡は調査区際で確認され、大部分は調査区外に位置する。検出された部分では平面形はＬ字状を呈する。幅は 54 ～ 98cm で、屈曲する部分がやや外側に張り出し幅が広がっている。深さは 13 ～ 23cm で、断面形は箱形を呈する。底面は東から西へ緩やかに傾斜している。

第 10 号・第 11 号溝跡（図 25）

どちらも調査区を南北に縦断する溝跡で、約 18 m離れているが、ほぼ平行である。断面形はどちらもＵ字状で、壁はやや開きながら立ち上がる。第 10 号溝跡は幅が 40 ～ 46cm、深さが 20 ～ 30cm、第 11 号溝跡は幅が 38 ～ 52cm、深さが 10 ～ 30cm である。底面はどちらも北から南に向かって傾斜している。第 10 号溝跡からは、酸化焔焼成の須恵器甕が出土している（図 25 － 1）。



第２号溝跡
第１層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ２～10mm　5%、炭化物φ5mm　1%、焼土φ1mm　1%混入。
第２層　10YR2/3　黒褐色土　ロームブロックφ10～60mm　20%混入。

第１号溝跡
第１層　10YR4/4　褐色土　ロームφ５～10mm　2%混入。
第２層　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロックφ60mm　5%混入。

第３号溝跡（A-B）
第１層　10YR3/4　暗褐色土　ロームφ１～20mm　７%、炭化物φ１～5mm　1%混入。
第２層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～40mm　5%、炭化物φ１～5mm　1%混入。
第３層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～15mm　15%、炭化物φ１～5mm　1%混入。

第３号溝跡（C-D）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　1%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～5mm　2%、ロームブロックφ20mm　1%混入。
第３層　10YR5/6　黄褐色土と10YR1.7/1　黒色土の混合土

第５号溝跡
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～2mm　3%、ロームブロックφ50mm　2%混入。
第２層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～2mm　5%、ロームブロックφ10～30mm　3%混入。
第３層　10YR4/4　褐色土　黒色土シルト5%混入。

第４号溝跡
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～10mm　7%混入。
第２層　10YR3/4　暗褐色土　ロームφ５～10mm　50%混入。

図23　溝跡（１）

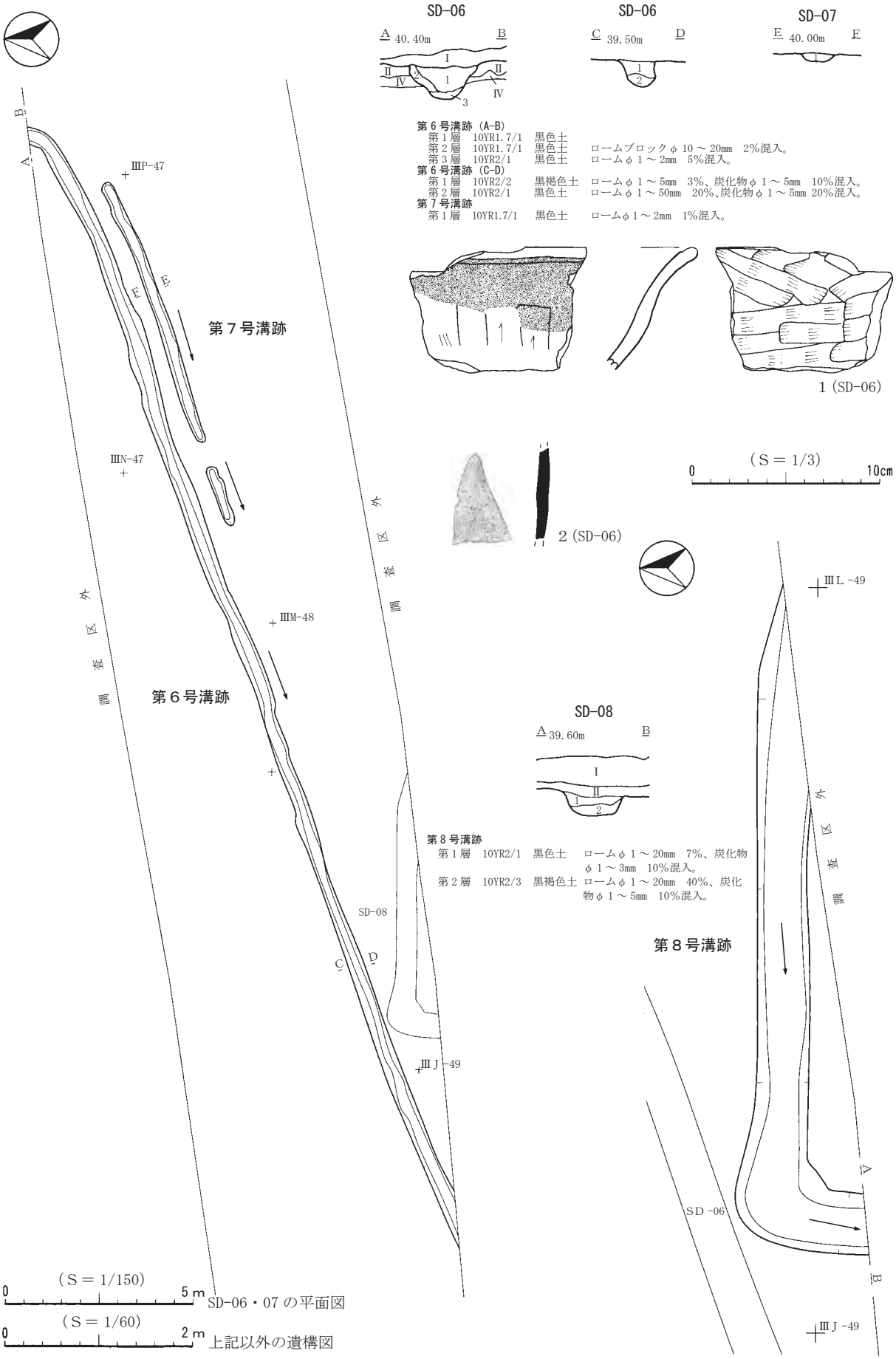

SD-06
A 40.40m B
SD-06
C 39.50m D
SD-07
E 40.00m F
第６号溝跡（A-B）
第１層　10YR1.7/1　黒色土
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームブロックφ 10 ～ 20mm　2%混入。
第３層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～２mm　5%混入。
第６号溝跡（C-D）
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～５mm　3%、炭化物φ１～５mm　10%混入。
第２層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～50mm　20%、炭化物φ１～５mm 20%混入。
第７号溝跡
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～２mm　1%混入。
1（SD-06）
2（SD-06）
（S＝1/3）
0　10cm
第７号溝跡
第６号溝跡
外区道路
SD-08
A 39.60m B
第８号溝跡
第１層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～20mm　7%、炭化物φ１～３mm　10%混入。
第２層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～20mm　40%、炭化物φ１～５mm　10%混入。
第８号溝跡
SD-06
ⅢP-47
ⅢN-47
ⅢM-48
ⅢJ-49
ⅢL-49
（S＝1/150）
0　5m
SD-06・07 の平面図
（S＝1/60）
0　2m
上記以外の遺構図

図 24　溝跡（２）

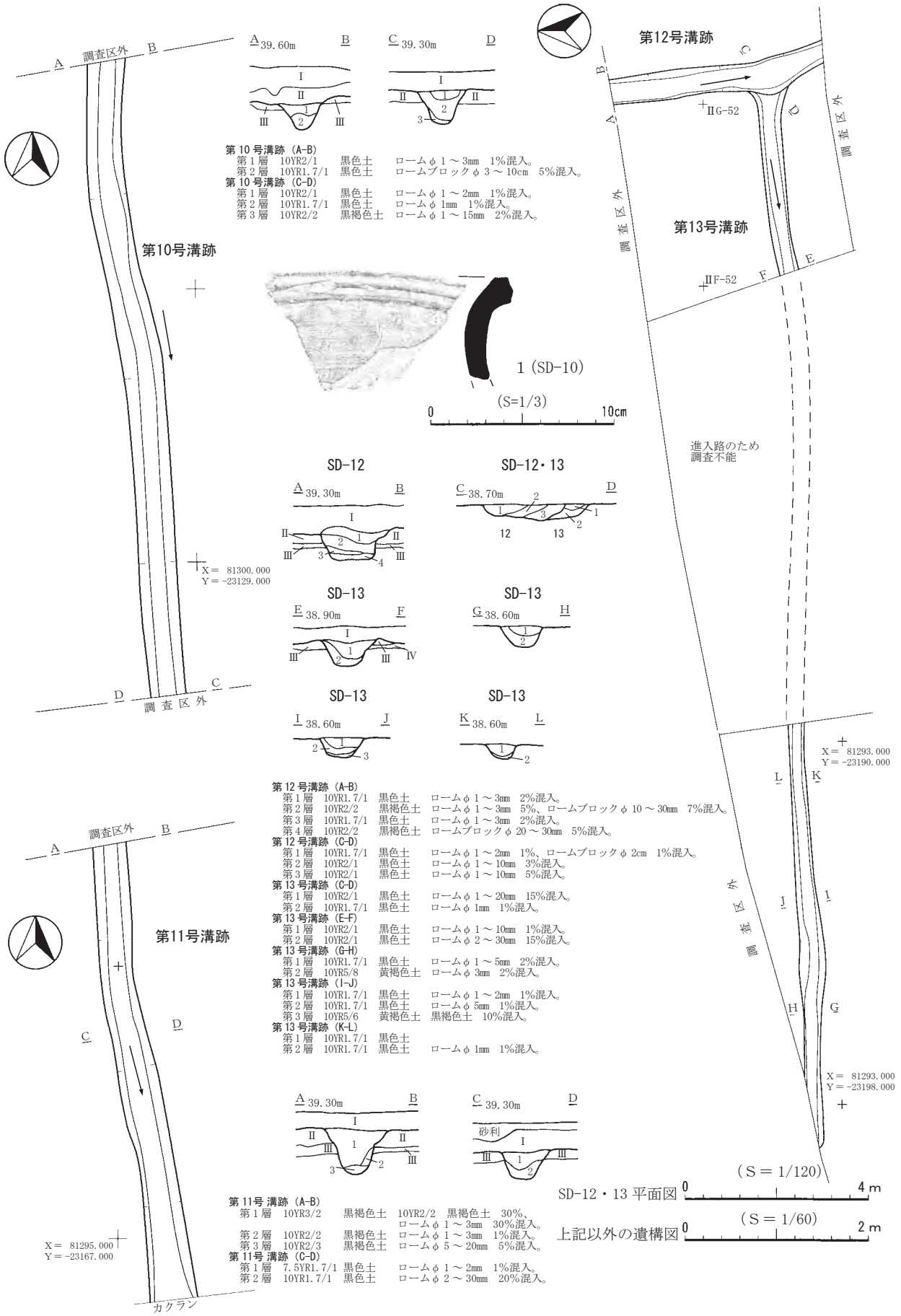

第12号溝跡
第13号溝跡
第10号溝跡
第11号溝跡
調査区外
進入路のため
調査不能
X＝ 81300.000
Y＝-23129.000
X＝ 81293.000
Y＝-23190.000
X＝ 81293.000
Y＝-23198.000
X＝ 81295.000
Y＝-23167.000
カクラン
1（SD-10）
(S=1/3)
0
10cm
SD-12
SD-12・13
SD-13
SD-13
SD-13
SD-13
第 10 号溝跡（A-B）
第１層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～3mm　1%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームブロックφ３～10cm　5%混入。
第 10 号溝跡（C-D）
第１層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～2mm　1%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　1%混入。
第３層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～15mm　2%混入。
第 12 号溝跡（A-B）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～3mm　2%混入。
第２層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～3mm　5%、ロームブロックφ10～30mm　7%混入。
第３層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～3mm　2%混入。
第４層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロックφ20～30mm　5%混入。
第 12 号溝跡（C-D）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～2mm　1%、ロームブロックφ2cm　1%混入。
第２層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～10mm　3%混入。
第３層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～10mm　5%混入。
第 13 号溝跡（C-D）
第１層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～20mm　15%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　1%混入。
第 13 号溝跡（E-F）
第１層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～10mm　1%混入。
第２層　10YR2/1　黒色土　ロームφ２～30mm　15%混入。
第 13 号溝跡（G-H）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～5mm　2%混入。
第２層　10YR5/8　黄褐色土　ロームφ3mm　2%混入。
第 13 号溝跡（I-J）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～2mm　1%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ5mm　1%混入。
第３層　10YR5/6　黄褐色土　黒褐色土　10%混入。
第 13 号溝跡（K-L）
第１層　10YR1.7/1　黒色土
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　1%混入。
第 11 号溝跡（A-B）
第１層　10YR3/2　黒褐色土　10YR2/2　黒褐色土　30%、ロームφ１～3mm　30%混入。
第２層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～3mm　1%混入。
第３層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ５～20mm　5%混入。
第 11 号溝跡（C-D）
第１層　7.5YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～2mm　1%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ２～30mm　20%混入。
SD-12・13 平面図　(S＝1/120)　0　4 m
上記以外の遺構図　(S＝1/60)　0　2 m

図 25　溝跡（３）

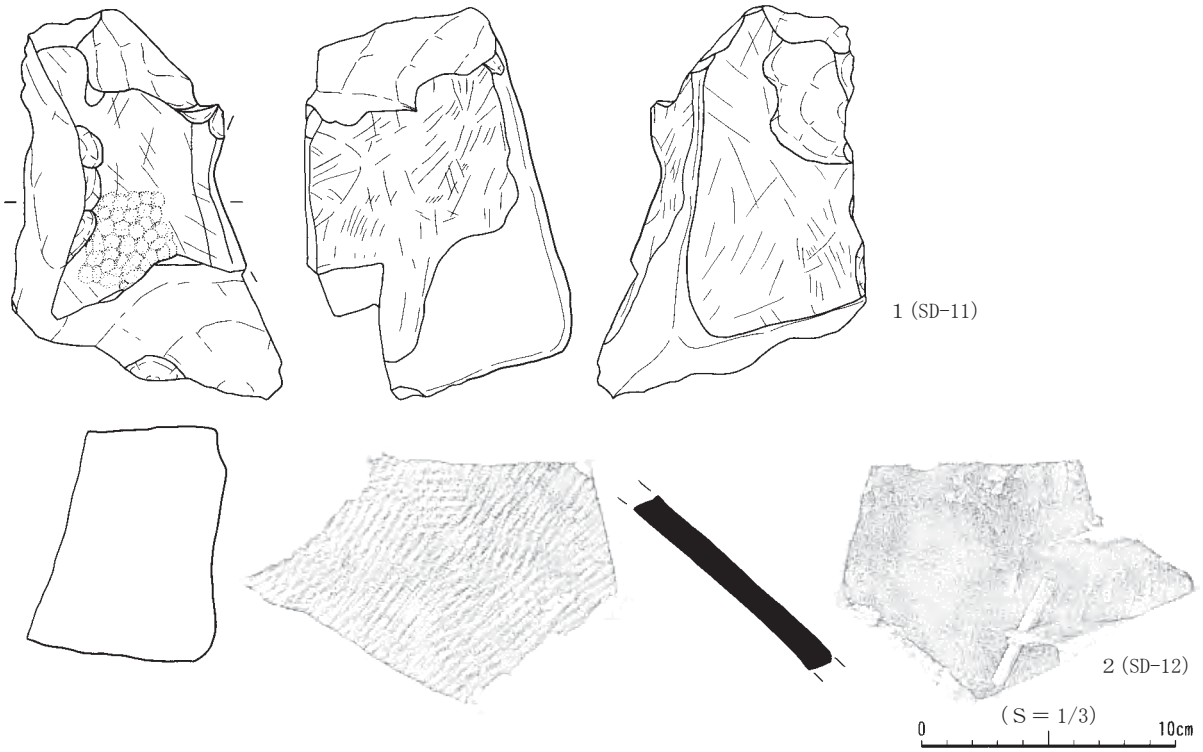


図 26　溝跡（４）

第 15 号溝跡（図 27）

平面形はＬ字状を呈する溝跡である。幅は 64 ～ 72cm とほぼ一定で、断面形はＵ字状で、壁は開きながら立ち上がる。深さは 64 ～ 72cm で、底面はほぼ平坦である。

第 16 号溝跡（図 28・29）

北西部で一旦途切れるが、コの字状に巡る溝跡で、北東－南西方向は 7.6 ｍを測る。溝跡の南東半は調査区外であるが、全体形が方形を呈する可能性が考えられる。断面形は逆台形状を呈し、壁は開きながら立ち上がる。堆積土はロームや炭化物が混入する黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。底面は、溝が途切れる北西部に向かって傾斜しているが、北東側のＬ字状に屈曲する部分よりも南西側の直線的な部分の傾斜が緩い。底面にはロームブロックを中量混入する掘方を有するが、東側では西側よりもローム混入の割合が高い。掘方上面では径 20cm 程度、深さ 10 ～ 20cm のピットが検出された。

本溝跡の出土遺物は多く、土師器坏２点、土師器甕７点、須恵器坏３点、ミニチュア土器１点と土製品１点を図示した。土師器坏は２点ともロクロ調整のみのものである。土師器甕は頸部が短く外反するものが多い。図 28 －４は口径 10.6cm の小型の甕である。５～７の土師器甕の底部は底径 6.0 ～ 7.4cm で、他に比べると小型である。図 29 －４の須恵器坏は口径 18.4cm で、一般的な須恵器坏の口径が 12 ～ 14cm であるのに比べ、大型である。胴部には刻書が見られる。７は円盤状の土製品で、粘土を指で押しつぶして側面に刻みを加えている。

第 18 号溝跡（図 27）

本溝跡は、幅 156 ～ 174cm の直線状の溝跡である。確認面からの深さは 37 ～ 50cm で、底面は西から東に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形状を呈し、ロームブロックを混入する灰黄褐色～黄褐色土の掘方をもつ。堆積土は黒褐色土を主体とし、全体的にロームが混入する。堆積土中位には白頭山火山灰が面的に堆積しており、自然堆積と考えられる。Ｃ－Ｄセクションでは、火山灰が上下２層に堆積している様子が確認されており、分析の結果、どちらも白頭山火山灰であることが判明している（第４章第２節参照）。

第 28 号溝跡（図 31）

本溝跡は、第Ⅲ層上面で白頭山火山灰が堆積する溝状のプランとして確認された。東西方向に緩やかに湾曲しながら延びる溝跡で、末端部のみ検出された。幅は 32 ～ 36cm とほぼ一定である。確認面からの深さは 32 ～ 36cm で、断面形はＵ字状を呈する。遺物は土師器甕４点、須恵器甕１点、須恵器鉢１点を図示した。土師器甕はロクロを使用するものと使用しないものが出土している。図 31 －６はロクロ使用の土師器甕で、胎土には径２㎜程度の小礫を混入するが、焼成は良好で、硬質である。内面には縦方向のナデが施され、黒色に変色している。

第 30 号溝跡（図 30）

本溝跡は、幅 60 ～ 66cm の直線状の溝跡で、検出できた長さは 2.8 ｍである。断面形は逆台形状で、壁は開きながら立ち上がる。深さは37～50cmで、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色土を主体とし、最下層にはロームブロックが中量混入している。

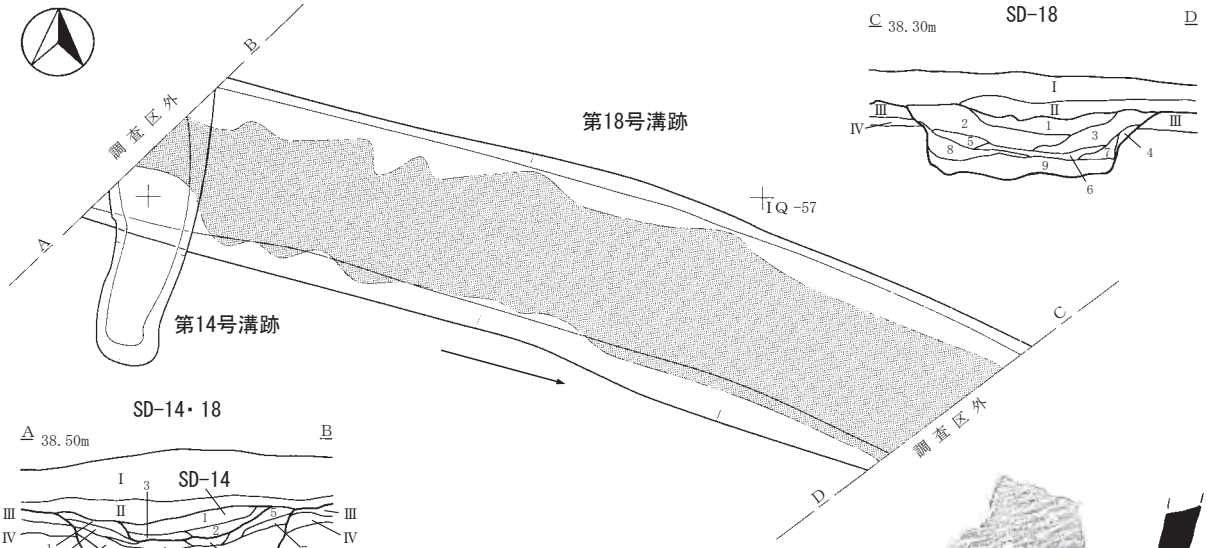
本溝跡の南側に平坦面が検出され、この平坦面は自然地形より一段低く掘り込まれており、溝跡北側に比べ約 20cm 低くなっている。この上には基本層序とは異なる黒褐色土と黒色土が堆積していた。この平坦面には貼り床や硬化などは認められなかった。遺構となる可能性も考えられたが、りんご園への進入路のため、調査できなかった。

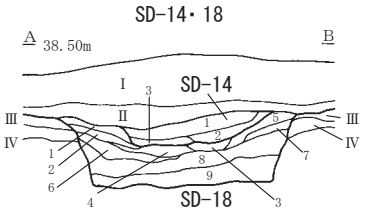
第 35 号溝跡（図 32）

本溝跡は、第Ⅱ層精査中に溝状に延びる遺物や焼土・火山灰の混入土のプランとして確認された。やや湾曲しながら東西方向に延びる溝跡で、末端部のみが検出された。幅は 24 ～ 40cm で、溝が２条に分岐する東側が幅が広い。確認面からの深さは４～20cm と浅く、底面には起伏がある。確認面からは、焼土と一緒に土師器片や焼けた粘土塊が出土した。土師器片は被熱し、摩滅が著しく、廃棄された焼土中に混入していたものと考えられる。図 32 －２は底面に回転糸切りの痕跡が見られるが、底径 7.1cm で一般的な土師器坏より大きく、胴部の湾曲も強いため壷と考えられる。

第 36 号・第 43 号溝跡（図 33）

調査時には１条の溝跡としていたが、重複関係が認められ、作り替えの可能性も考えられるが、古いものを第 36 号溝跡、新しいものを第 43 号溝跡とした。大部分は調査区外にあるため全体像は不明であるが、調査区内では平行する直線状の溝跡である。第 36 号溝跡は幅 48 ～ 62cm で、断面形が逆台





遺物 0 (S＝1/3) 10cm

第 14 号溝跡（A-B）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	
第２層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロックφ 10 ～ 60mm　3%混入。
第３層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 10mm　1%混入。

第 18 号溝跡（A-B）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　2%混入。
第２層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　3%混入。
第３層	10YR2/1	黒色土	ロームブロックφ 20 ～ 30mm　1%混入。
第４層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　3%、ロームブロックφ５～ 20mm 1%混入。
第５層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ１～ 5mm　2%混入。
第６層	10YR2/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　5%、白頭山火山灰φ５～ 10mm のブロック状に 5%混入。
第７層	10YR3/2	黒褐色土	
第８層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ１～ 2mm　5%、ロームブロックφ 20 ～ 30mm 5%混入。
第９層	10YR5/6	黄褐色土	ロームブロックφ 10 ～ 20mm　7%混入。

第 18 号溝跡（C-D）

第１層	10YR2/1	黒色土	ロームφ２～ 3mm　1%混入。
第２層	10YR2/2	黒褐色土	白頭山火山灰φ 70mm のブロック状に 1%混入。
第３層	10YR2/1	黒色土	白頭山火山灰φ 10 ～ 20mm のブロック状に 1%混入。
第４層	10YR3/2	黒褐色土	ロームφ１～ 2mm　1%混入。
第５層	10YR2/1	黒色土	白頭山火山灰φ５～ 10mm のブロック状に 2%混入。
第６層	10YR2/2	黒褐色土	白頭山火山灰φ 50 ～ 100mm のブロック状に　30%混入。
第７層	10YR2/1	黒色土	ロームφ 10 ～ 20mm　2%混入。
第８層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　2%混入。
第９層	10YR4/2	灰黄褐色土	ロームブロックφ５～ 10cm　50%混入。

第 15 号溝跡（A-B）

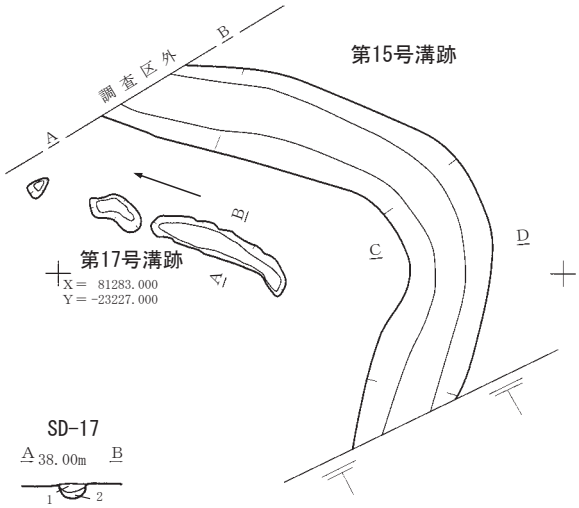
第１層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 3mm　3%混入。
第２層	10YR2/1	黒色土	ロームφ１～ 5mm　5%混入。
第３層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ１～ 50mm　10%、炭化物 5%混入。
第４層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 50mm　10%混入。
第５層	10YR5/6	黄褐色土	ロームφ１～ 20mm　40%、炭化物φ 5mm　10%混入。

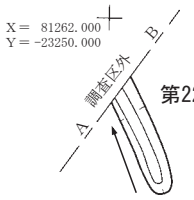
第 15 号溝跡（C-D）

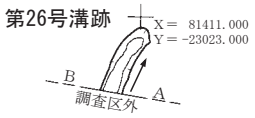
第１層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　5%、炭化物φ 2mm　3%混入。
第２層	10YR2/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　7%混入。
第３層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　5%混入。
第４層	10YR4/6	褐色土	ロームφ１～ 10mm　40%混入。

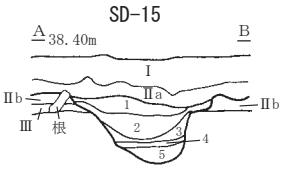
第 17 号溝跡

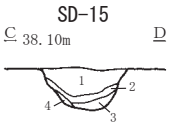
第１層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ 1mm　2%混入。
第２層	10YR3/4	暗褐色土	黒褐色土混入。

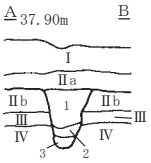


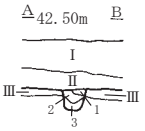












第 26 号溝跡

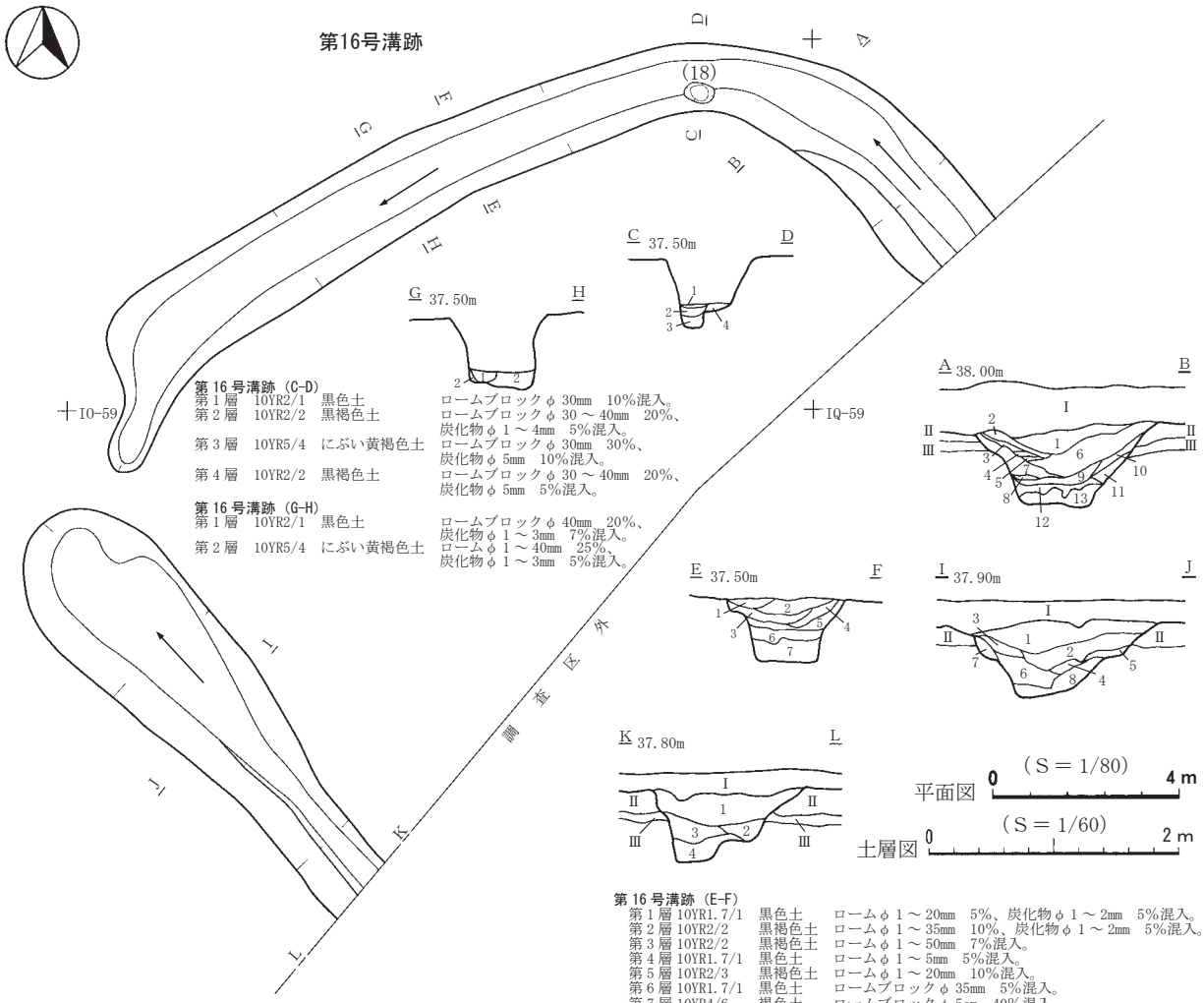
第１層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ１～ 2mm　3%、炭化物φ１～ 5mm　5%混入。
第２層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～ 3mm　3%、炭化物φ１～ 2mm　3%混入。
第３層	10YR4/6	褐色土	ロームφ１～ 3mm　7%、炭化物φ１～ 3mm　3%混入。

第 22 号 溝跡

第１層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　1%混入。
第２層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～ 2mm　1%混入。
第３層	10YR4/6	褐色土	

遺構 0 (S＝1/60) 2 m

図 27　溝跡（５）



第16号溝跡（C-D）

第1層	10YR2/1	黒色土	ロームブロックφ30mm 10%混入。
第2層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロックφ30～40mm 20%、炭化物φ1～4mm 5%混入。
第3層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	ロームブロックφ30mm 30%、炭化物φ5mm 10%混入。
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロックφ30～40mm 20%、炭化物φ5mm 5%混入。

第16号溝跡（G-H）

第1層	10YR2/1	黒色土	ロームブロックφ40mm 20%、炭化物φ1～3mm 7%混入。
第2層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	ロームφ1～40mm 25%、炭化物φ1～3mm 5%混入。

第16号溝跡（A-B）

第1層	10YR2/1	黒色土	ロームφ1～20mm 10%、炭化物φ1mm 5%混入。
第2層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ1～2mm 3%、炭化物φ1mm 5%混入。
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～10mm 7%、炭化物φ1mm 3%混入。
第4層	10YR2/1	黒色土	ロームφ1～2mm 3%、炭化物φ1～2mm 3%混入。
第5層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ1～2mm 3%混入。
第6層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～30mm 25%、炭化物φ1～2mm 10%混入。
第7層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ1～10mm 7%、炭化物φ1～3mm 7%混入。
第8層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～5mm 5%、炭化物φ1～2mm 3%混入。
第9層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～30mm 10%、炭化物φ1～2mm 5%混入。
第10層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ1～5mm 5%、炭化物φ1～3mm 5%混入。
第11層	10YR2/1	黒色土	ロームφ1～40mm 20%、炭化物φ1～2mm 5%混入。
第12層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ1～50mm 15%、炭化物φ1mm 3%混入。
第13層	10YR5/6	黄褐色土	ロームφ1～50mm 40%、炭化物φ1～5mm 10%混入。

第16号溝跡（E-F）

第1層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ1～20mm 5%、炭化物φ1～2mm 5%混入。
第2層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～35mm 10%、炭化物φ1～2mm 5%混入。
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～50mm 7%混入。
第4層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ1～5mm 5%混入。
第5層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ1～20mm 10%混入。
第6層	10YR1.7/1	黒色土	ロームブロックφ35mm 5%混入。
第7層	10YR4/6	褐色土	ロームブロックφ5cm 40%混入。

第16号溝跡（I-J）

第1層	10YR2/1	黒色土	ロームφ5～10mm 3%混入。
第2層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロックφ10～60mm 5%混入。
第3層	10YR1.7/1	黒色土	
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～2mm 1%混入。
第5層	10YR2/1	黒色土	粘土ブロックφ60mm 帯状に混入。
第6層	10YR2/1	黒色土	粘土φ10～20mm 2%混入。
第7層	10YR2/1	黒色土	
第8層	10YR1.7/1	黒色土	ロームブロックφ20～50mm 10%混入。

第16号溝跡（K-L）

第1層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ1～2mm 1%混入。
第2層	10YR1.7/1	黒色土	
第3層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロックφ10～40mm 4%混入。
第4層	10YR2/2	黒褐色土	ロームブロックφ10～40mm 7%混入。

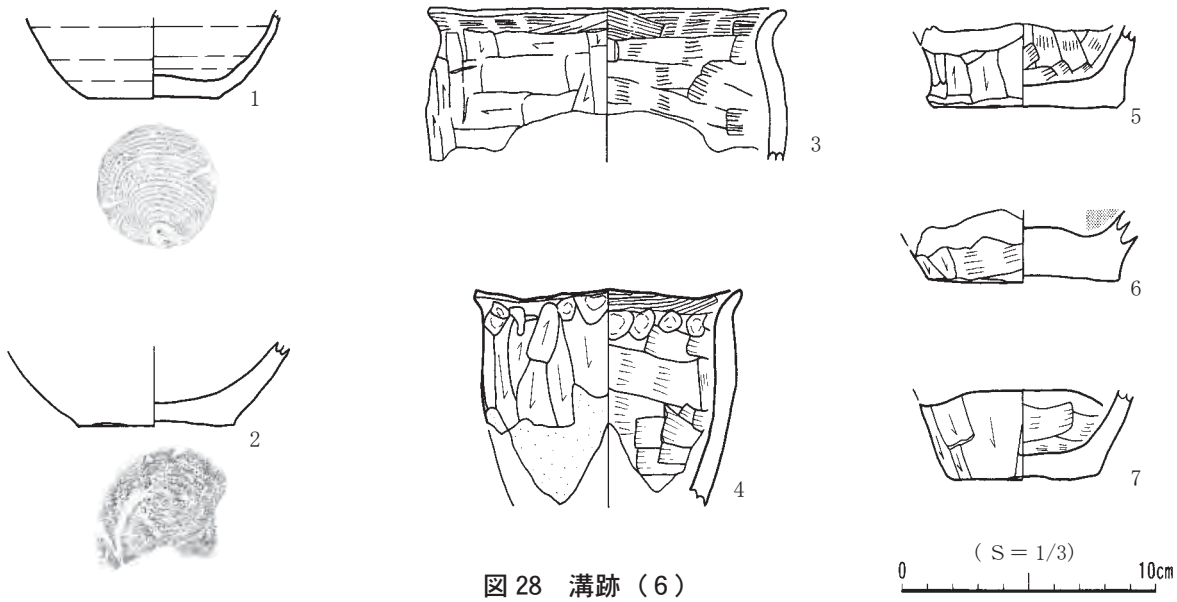


図28 溝跡（6）

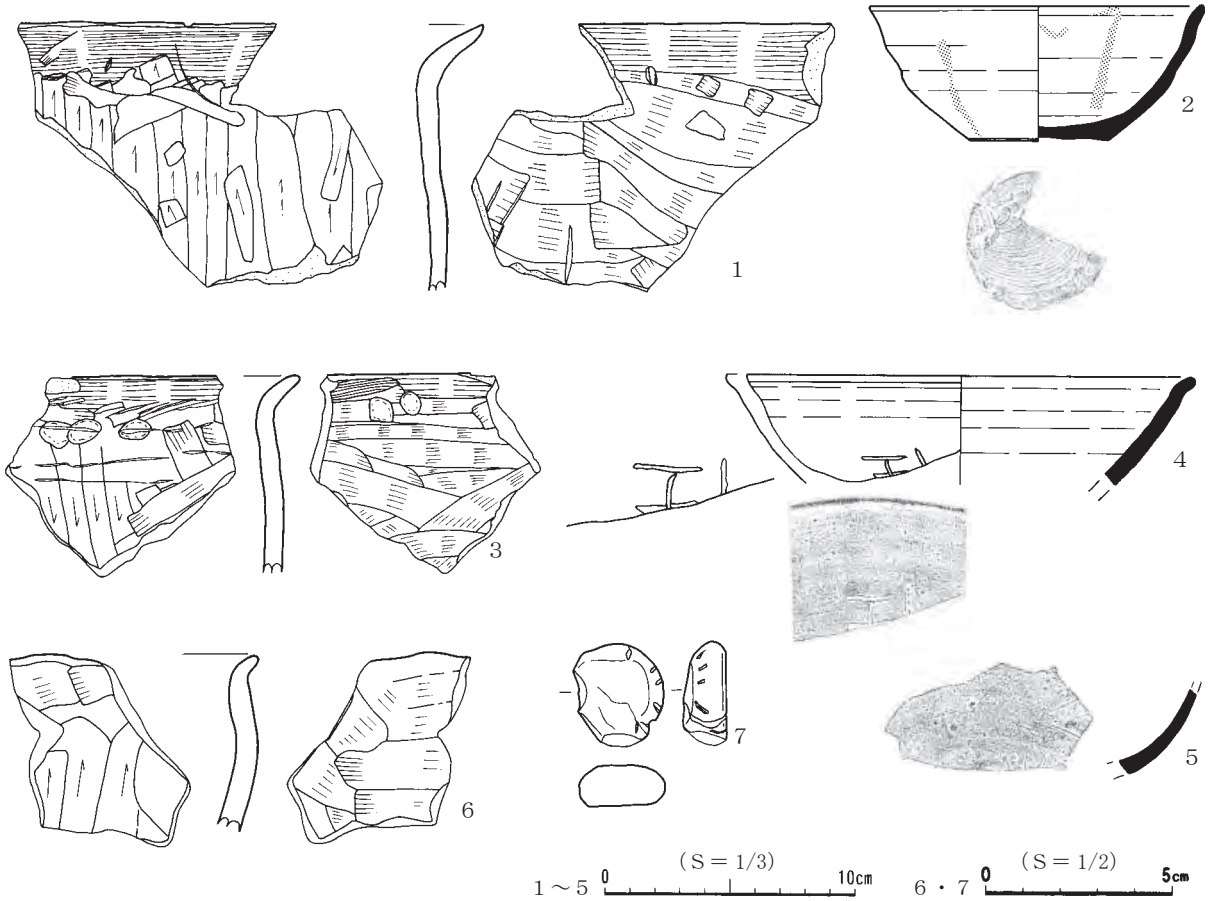
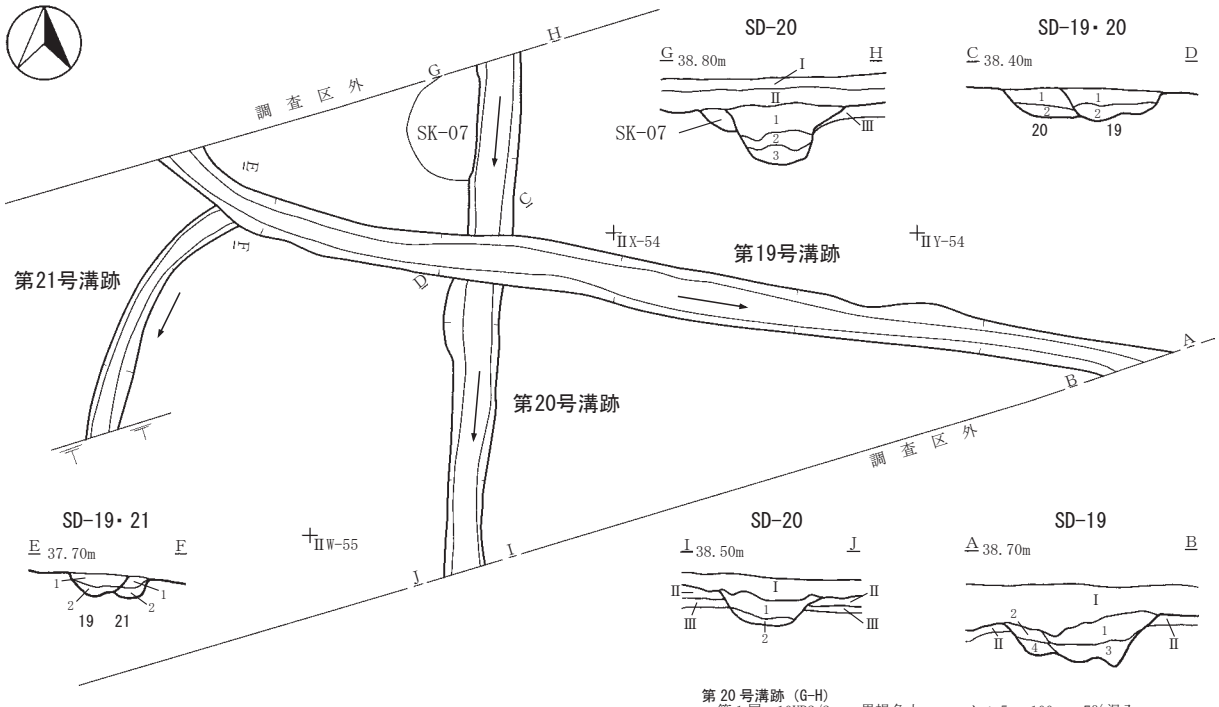


図 29　溝跡（７）

形状の溝跡である。第 43 号溝跡は土坑状に広がる北端部のみが検出され、底面が開口部より広がり袋状を呈する。土坑部の堆積土中位に火山灰混入土が面的に広がっていた。

第 36 号溝跡からは遺物がやや多く出土している。出土位置が明確で第 43 号溝跡出土と断定できるもののみを第 43 号溝跡出土とした。そのため、第 36 号溝跡出土としたものは一括で取り上げたため出土位置が明確ではなく、第 43 号溝跡に伴う可能性もある。土師器甕２点、須恵器坏１点、土製品２点、石製品１点を図示した。このほかに、小破片のため図示しなかったが土師器坏も出土している。図 33－１・２は土師器甕で、１は頸部が短く外反し、２は頸部が比較的長く、大きく外反する。４は粘土を指で薄く押しつぶして成形し、焼成したものである。５は焼成粘土塊で、胎土には繊維の混入が認められる。６は器面に擦痕が認められる凝灰岩の小礫である。器面全体に黒色の物質が付着している。



第19号溝跡（A-B）
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1～3mm　3%、ロームブロックφ5～10mm　1%混入。
第2層　10YR2/1　黒色土　白頭山火山灰φ5～10mmのブロック状に1%混入。
第3層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ2～5mm　5%、ロームブロックφ40～50mm　10%混入。
第4層　10YR2/1　黒色土　白頭山火山灰φ30mmのブロック状に1%混入。

第19号溝跡（C-D）
第1層　10YR2/1　黒色土　ロームφ1～3mm　1%混入。
第2層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1～3mm　2%、ロームブロックφ10～20mm　1%混入。

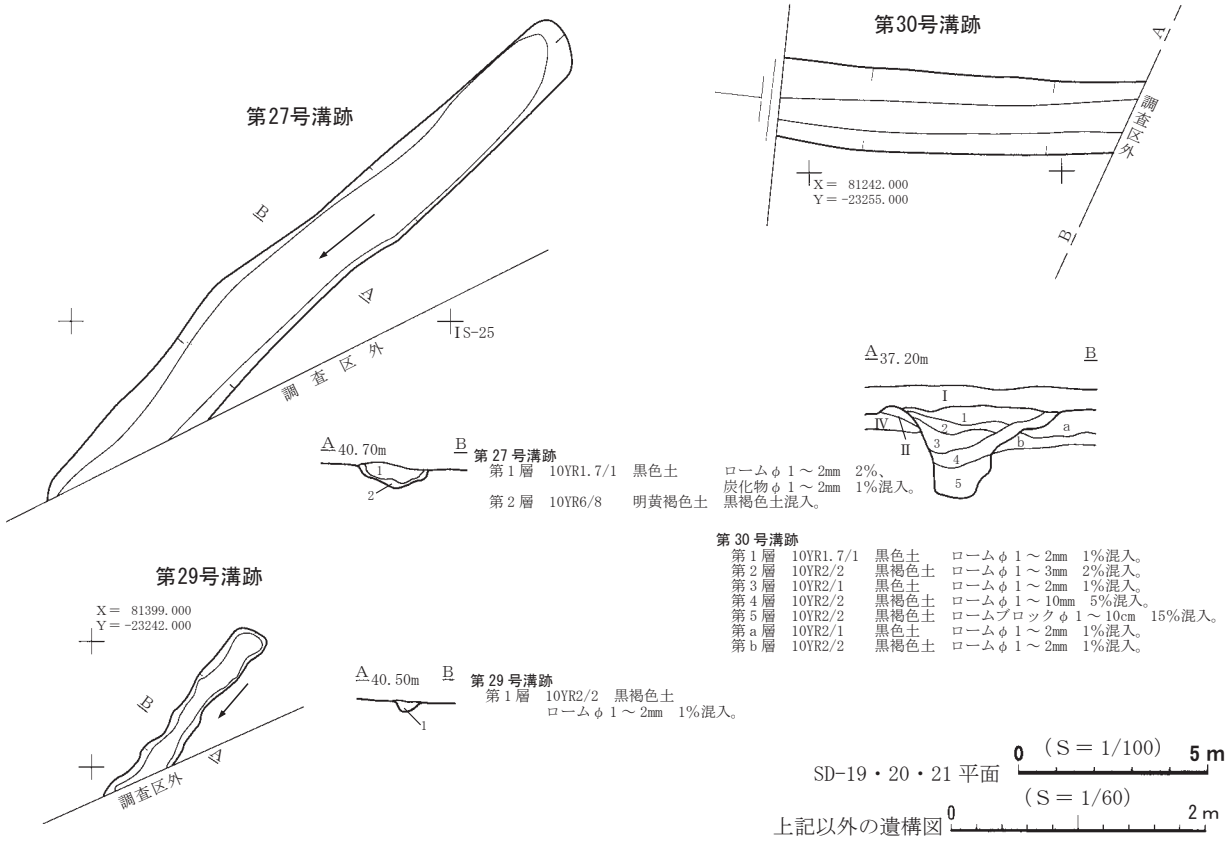
第19号溝跡（E-F）
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1～2mm　1%混入。
第2層　10YR3/2　黒褐色土　ロームブロックφ10～40mm　2%混入。

第20号溝跡（C-D）
第1層　10YR2/1　黒色土　ロームφ1～5mm　2%混入。
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロックφ10～60mm　5%混入。

第20号溝跡（G-H）
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ5～100mm　7%混入。
第2層　10YR2/1　黒色土　ロームブロックφ4～10cm　10%混入。
第3層　10YR1.7/1　黒色土　ロームブロックφ20～30mm　3%混入。

第20号溝跡（I-J）
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1～2mm　1%混入。
第2層　10YR2/1　黒色土　ロームφ1～5mm　3%混入。

第21号溝跡（E-F）
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1～2mm　1%混入。
第2層　10YR2/1　黒色土　ロームφ1～3mm　3%混入。



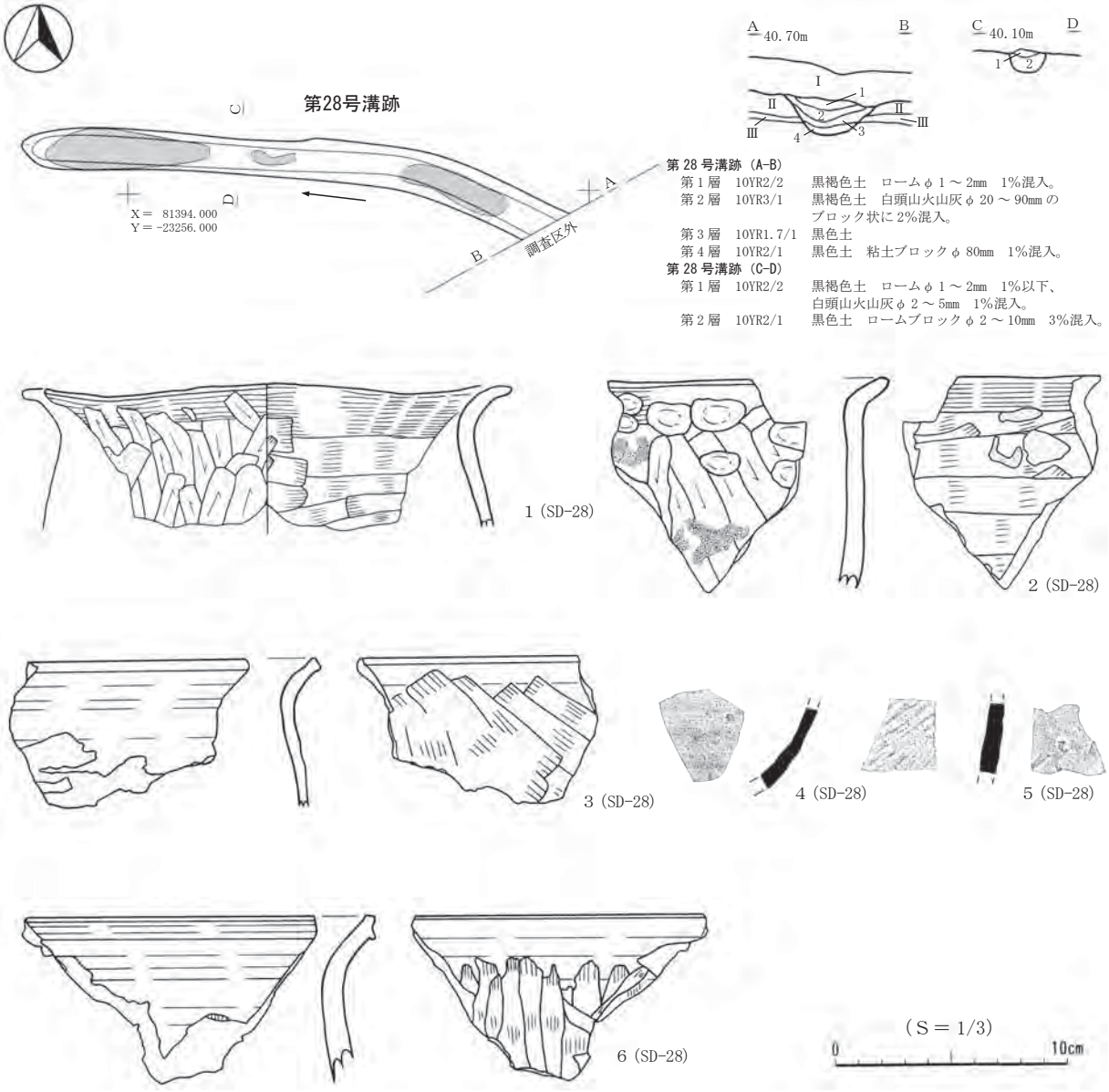
第27号溝跡
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1～2mm　2%、炭化物φ1～2mm　1%混入。
第2層　10YR6/8　明黄褐色土　黒褐色土混入。

第30号溝跡
第1層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1～2mm　1%混入。
第2層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1～3mm　2%混入。
第3層　10YR2/1　黒色土　ロームφ1～2mm　1%混入。
第4層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1～10mm　5%混入。
第5層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロックφ1～10cm　15%混入。
第a層　10YR2/1　黒色土　ロームφ1～2mm　1%混入。
第b層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1～2mm　1%混入。

第29号溝跡
第1層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1～2mm　1%混入。

SD-19・20・21平面　0　（S＝1/100）　5m
上記以外の遺構図　0　（S＝1/60）　2m

図30　溝跡（8）


第28号溝跡
X＝ 81394.000
Y＝-23256.000
調査区外
A 40.70m B
C 40.10m D
第 28 号溝跡（A-B）
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～2mm　1%混入。
第２層　10YR3/1　黒褐色土　白頭山火山灰φ 20 ～ 90mm の
ブロック状に2%混入。
第３層　10YR1.7/1　黒色土
第４層　10YR2/1　黒色土　粘土ブロックφ 80mm　1%混入。
第 28 号溝跡（C-D）
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～2mm　1%以下、
白頭山火山灰φ２～5mm　1%混入。
第２層　10YR2/1　黒色土　ロームブロックφ２～10mm　3%混入。
1（SD-28）
2（SD-28）
3（SD-28）
4（SD-28）
5（SD-28）
6（SD-28）
（S＝1/3）
0
10cm

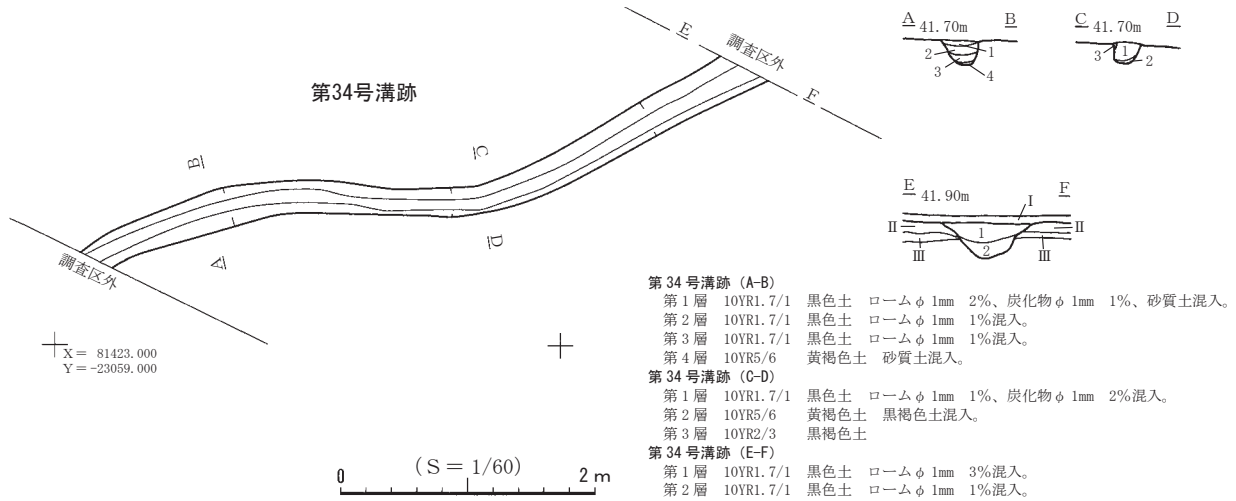
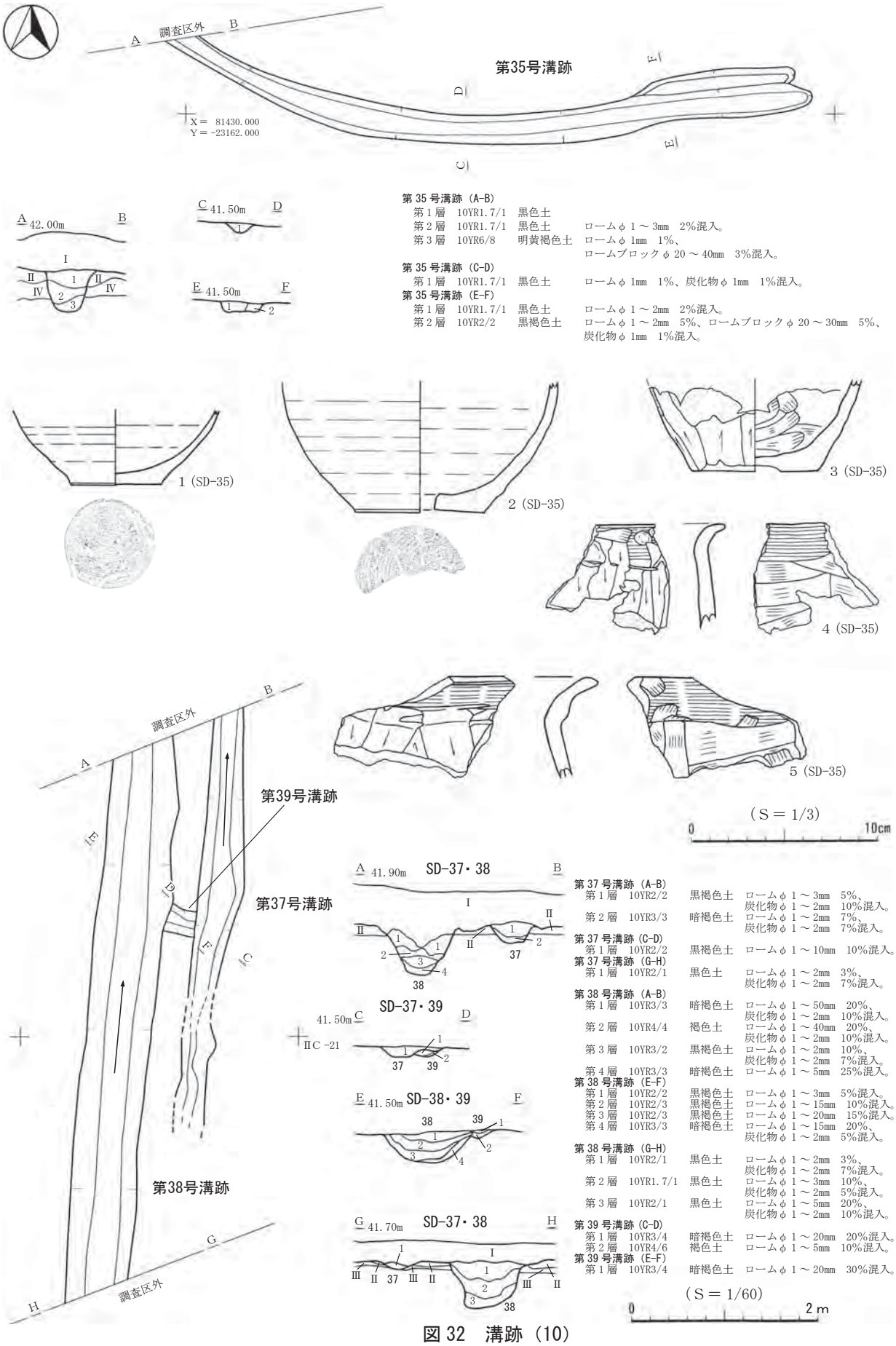

第34号溝跡
調査区外
X＝ 81423.000
Y＝-23059.000
A 41.70m B
C 41.70m D
E 41.90m F
第 34 号溝跡（A-B）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ 1mm　2%、炭化物φ 1mm　1%、砂質土混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ 1mm　1%混入。
第３層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ 1mm　1%混入。
第４層　10YR5/6　黄褐色土　砂質土混入。
第 34 号溝跡（C-D）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ 1mm　1%、炭化物φ 1mm　2%混入。
第２層　10YR5/6　黄褐色土　黒褐色土混入。
第３層　10YR2/3　黒褐色土
第 34 号溝跡（E-F）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ 1mm　3%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ 1mm　1%混入。
（S＝1/60）
0
2 m

図 31　溝跡（９）



第 35 号溝跡 (A-B)

第 1 層	10YR1.7/1	黒色土	
第 2 層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ 1 ～ 3mm 2%混入。
第 3 層	10YR6/8	明黄褐色土	ロームφ 1mm 1%、 ロームブロックφ 20 ～ 40mm 3%混入。

第 35 号溝跡 (C-D)

第 1 層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ 1mm 1%、炭化物φ 1mm 1%混入。

第 35 号溝跡 (E-F)

第 1 層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ 1 ～ 2mm 2%混入。
第 2 層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ 1 ～ 2mm 5%、ロームブロックφ 20 ～ 30mm 5%、 炭化物φ 1mm 1%混入。

第 37 号溝跡 (A-B)

第 1 層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ 1 ～ 3mm 5%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 10%混入。
第 2 層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ 1 ～ 2mm 7%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 7%混入。

第 37 号溝跡 (C-D)

第 1 層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ 1 ～ 10mm 10%混入。

第 37 号溝跡 (G-H)

第 1 層	10YR2/1	黒色土	ロームφ 1 ～ 2mm 3%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 7%混入。

第 38 号溝跡 (A-B)

第 1 層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ 1 ～ 50mm 20%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 10%混入。
第 2 層	10YR4/4	褐色土	ロームφ 1 ～ 40mm 20%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 10%混入。
第 3 層	10YR3/2	黒褐色土	ロームφ 1 ～ 2mm 10%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 7%混入。
第 4 層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ 1 ～ 5mm 25%混入。

第 38 号溝跡 (E-F)

第 1 層	10YR2/2	黒褐色土	ロームφ 1 ～ 3mm 5%混入。
第 2 層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ 1 ～ 15mm 10%混入。
第 3 層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ 1 ～ 20mm 15%混入。
第 4 層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ 1 ～ 15mm 20%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 5%混入。

第 38 号溝跡 (G-H)

第 1 層	10YR2/1	黒色土	ロームφ 1 ～ 2mm 3%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 7%混入。
第 2 層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ 1 ～ 3mm 10%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 5%混入。
第 3 層	10YR2/1	黒色土	ロームφ 1 ～ 5mm 20%、 炭化物φ 1 ～ 2mm 10%混入。

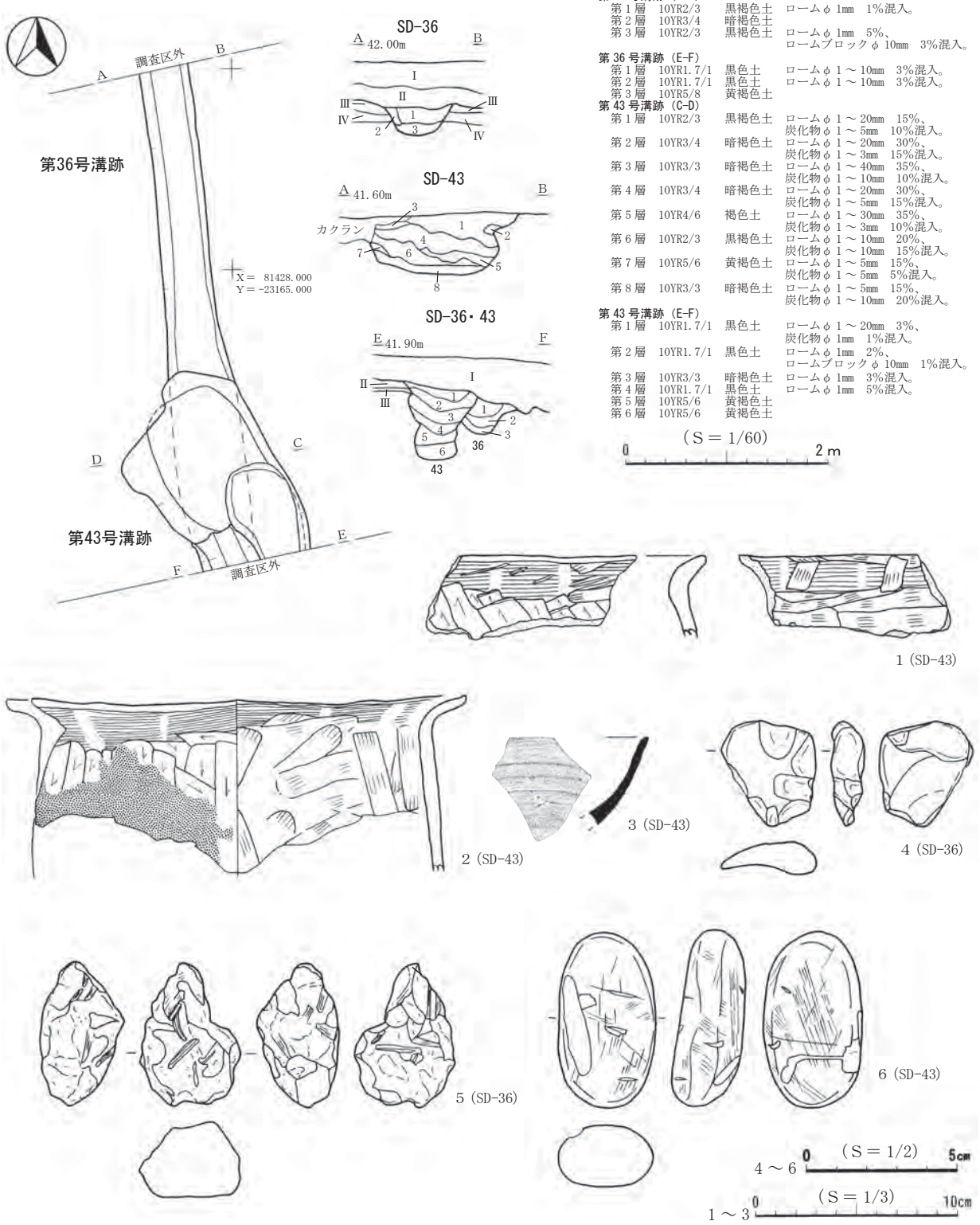
第 39 号溝跡 (C-D)

第 1 層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ 1 ～ 20mm 20%混入。
第 2 層	10YR4/6	褐色土	ロームφ 1 ～ 5mm 10%混入。

第 39 号溝跡 (E-F)

第 1 層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ 1 ～ 20mm 30%混入。

図 32　溝跡 (10)



第 36 号溝跡（A-B）

第１層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ 1mm　1%混入。
第２層	10YR3/4	暗褐色土	
第３層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ 1mm　5%、 ロームブロックφ 10mm　3%混入。

第 36 号溝跡（E-F）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～10mm　3%混入。
第２層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～10mm　3%混入。
第３層	10YR5/8	黄褐色土	

第 43 号溝跡（C-D）

第１層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～20mm　15%、 炭化物φ１～5mm　10%混入。
第２層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ１～20mm　30%、 炭化物φ１～3mm　15%混入。
第３層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～40mm　35%、 炭化物φ１～10mm　10%混入。
第４層	10YR3/4	暗褐色土	ロームφ１～20mm　30%、 炭化物φ１～5mm　15%混入。
第５層	10YR4/6	褐色土	ロームφ１～30mm　35%、 炭化物φ１～3mm　10%混入。
第６層	10YR2/3	黒褐色土	ロームφ１～10mm　20%、 炭化物φ１～10mm　15%混入。
第７層	10YR5/6	黄褐色土	ロームφ１～5mm　15%、 炭化物φ１～5mm　5%混入。
第８層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ１～5mm　15%、 炭化物φ１～10mm　20%混入。

第 43 号溝跡（E-F）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ１～20mm　3%、 炭化物φ 1mm　1%混入。
第２層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ 1mm　2%、 ロームブロックφ 10mm　1%混入。
第３層	10YR3/3	暗褐色土	ロームφ 1mm　3%混入。
第４層	10YR1.7/1	黒色土	ロームφ 1mm　5%混入。
第５層	10YR5/6	黄褐色土	
第６層	10YR5/6	黄褐色土	

図 33　溝跡（11）

第 37 号・第 38 号・第 39 号溝跡（図 32）

第 37 号・第 38 号溝跡は、平行して走る直線状の溝跡で、調査区を縦断する。第 37 号溝跡は調査区南側では、削平によりほぼ消滅しており、調査区壁面で確認できるのみである。断面形は浅い逆台形状あるいは半円状を呈する。第 38 号溝跡は、幅は 66 ～ 78cm で、深さは 19 ～ 53cm である。断面形はＵ字状あるいは半円状で、壁は開きながら立ち上がる。どちらの溝も底面は南から北に向かって傾斜している。第 39 号溝跡はこの２条に斜交する溝跡で、本溝跡が古い。検出できたのは２条の間のみで、検出できた長さは 0.3 ｍである。

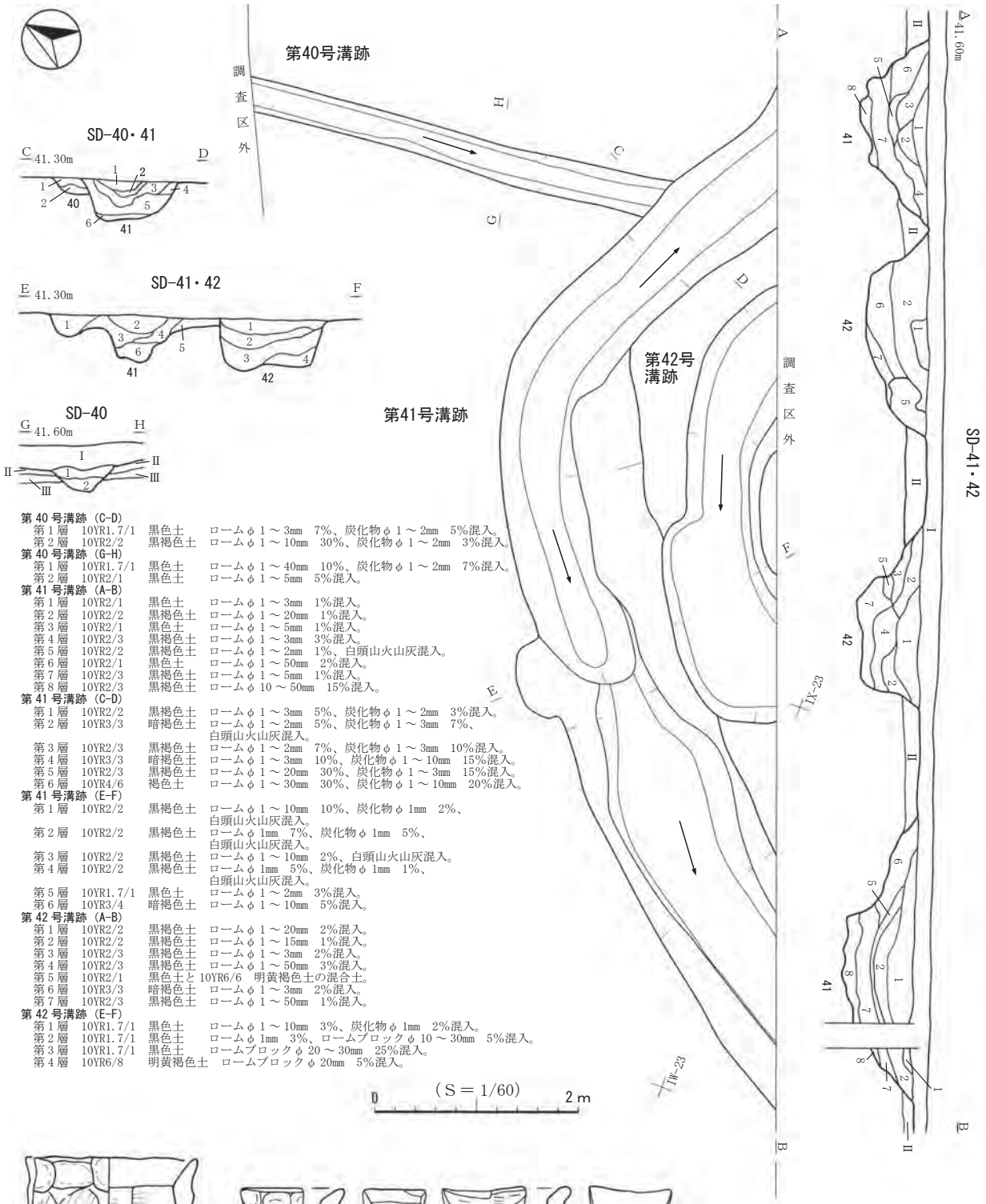
第 41 号・第 42 号溝跡（図 34 ～ 37）

大部分が調査区外にあるため、全体像は不明であるが、調査区内では平面形は二重の弧状で、全体形が円形あるいはコの字状を呈すると考えられ、その場合の径は７ｍ以上と推測される。住居の外周溝となる可能性も考えられる。新旧関係は第 41 号溝跡→第 42 号溝跡である。

第 41 号溝跡は、東側は幅 84 ～ 96cm で、西側は 146 ～ 150cm と幅が広がる。確認面からの深さは 14 ～ 23cm で、断面形は逆台形状で、壁は開きながら立ち上がる。底面には起伏があるが、北側の屈曲部が最も高く、そこからそれぞれ東と西に向かって傾斜している。堆積土はロームや炭化物が混入する黒褐色土を主体とし、底面付近ではロームが中量混入する。堆積土中位には白頭山火山灰が層状に堆積している。自然堆積と考えられる。

堆積土から多量の遺物が出土しており、特に東側からの出土が多く、土師器坏や土師器甕のほかに須恵器の小型壷やミニチュア土器が出土した。遺物は白頭山火山灰層を挟んで出土しており、図 36 －３は火山灰混入層から出土した。火山灰層より上で出土したものは、図 34 －１・２・４・35 －２・36 －８・９・37 －３・４・９、火山灰層より下で出土したものは、図 34 －３・35 －１・３・４・36 －７・10・11・37 －６で、他は火山灰層の上下から出土したものが接合した。土師器坏４点、土師器甕 19 点、須恵器坏４点、須恵器鉢１点、須恵器甕１点、須恵器小型壷１点を図示した。土師器坏は内面黒色処理のものが１点で、他はロクロ調整のみである。土師器甕はロクロ使用のものもあるが数は少ない。頸部がやや長く、口縁が外反し、胴部のふくらみが弱い器形が多く、頸部を指で押さえているものも複数見られる。図 36 － 11は 須恵器の小型壷で、底径 3.0cm、残存高 7.8cm である。ミニチュア土器は４点図示した。図 34 －１は口径 6.0cm で、残存高は 4.3cm である。口縁が短く外反し、胴部下半に丸みを帯びる器形である。口縁部を指で成形し、内外面にナデを施している。５は手鎌と考えられる鉄製品である。幅 2.4cm の薄い板状で、表面には目釘らしきものが打たれている。裏面には木質部が残存する。６は粘土を指で押しつぶして焼成したものである。このほか、白頭山火山灰より下層から土玉が１点出土したが、被熱のため脆弱となっており、小破片に分割してしまい図示できなかった。

第 42 号溝跡は検出できた部分の幅は 84 ～ 108cm で、西側は土坑状に幅が広がる。確認面からの深さは 14 ～ 52cm で、断面形は逆台形状または箱形を呈する。底面は東から西に向かって傾斜している。堆積土はロームが混入する黒褐色土を主体とし、部分的に人為堆積の可能性もある。



第 40 号溝跡（C-D）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～3mm　7%、炭化物φ１～2mm　5%混入。
第２層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～10mm　30%、炭化物φ１～2mm　3%混入。

第 40 号溝跡（G-H）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～40mm　10%、炭化物φ１～2mm　7%混入。
第２層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～5mm　5%混入。

第 41 号溝跡（A-B）
第１層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～3mm　1%混入。
第２層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～20mm　1%混入。
第３層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～5mm　1%混入。
第４層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～3mm　3%混入。
第５層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～2mm　1%、白頭山火山灰混入。
第６層　10YR2/1　黒色土　ロームφ１～50mm　2%混入。
第７層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～5mm　1%混入。
第８層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ10～50mm　15%混入。

第 41 号溝跡（C-D）
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～3mm　5%、炭化物φ１～2mm　3%混入。
第２層　10YR3/3　暗褐色土　ロームφ１～2mm　5%、炭化物φ１～3mm　7%、白頭山火山灰混入。
第３層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～2mm　7%、炭化物φ１～3mm　10%混入。
第４層　10YR3/3　暗褐色土　ロームφ１～3mm　10%、炭化物φ１～10mm　15%混入。
第５層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～20mm　30%、炭化物φ１～3mm　15%混入。
第６層　10YR4/6　褐色土　ロームφ１～30mm　30%、炭化物φ１～10mm　20%混入。

第 41 号溝跡（E-F）
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～10mm　10%、炭化物φ1mm　2%、白頭山火山灰混入。
第２層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1mm　7%、炭化物φ1mm　5%、白頭山火山灰混入。
第３層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～10mm　2%、白頭山火山灰混入。
第４層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ1mm　5%、炭化物φ1mm　1%、白頭山火山灰混入。
第５層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～2mm　3%混入。
第６層　10YR3/4　暗褐色土　ロームφ１～10mm　5%混入。

第 42 号溝跡（A-B）
第１層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～20mm　2%混入。
第２層　10YR2/2　黒褐色土　ロームφ１～15mm　1%混入。
第３層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～3mm　2%混入。
第４層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～50mm　3%混入。
第５層　10YR2/1　黒色土と 10YR6/6　明黄褐色土の混合土。
第６層　10YR3/3　暗褐色土　ロームφ１～3mm　2%混入。
第７層　10YR2/3　黒褐色土　ロームφ１～50mm　1%混入。

第 42 号溝跡（E-F）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ１～10mm　3%、炭化物φ1mm　2%混入。
第２層　10YR1.7/1　黒色土　ロームφ1mm　3%、ロームブロックφ10～30mm　5%混入。
第３層　10YR1.7/1　黒色土　ロームブロックφ20～30mm　25%混入。
第４層　10YR6/8　明黄褐色土　ロームブロックφ20mm　5%混入。

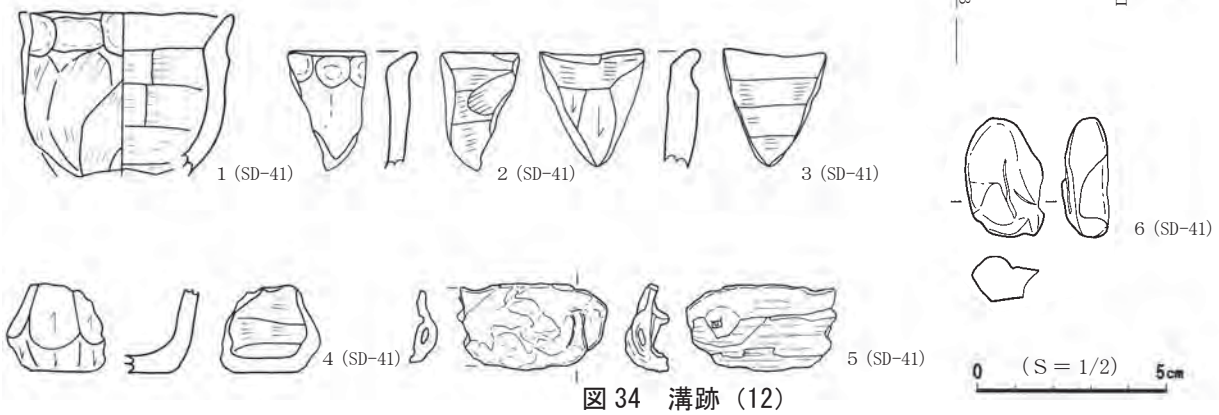


図 34　溝跡（12）

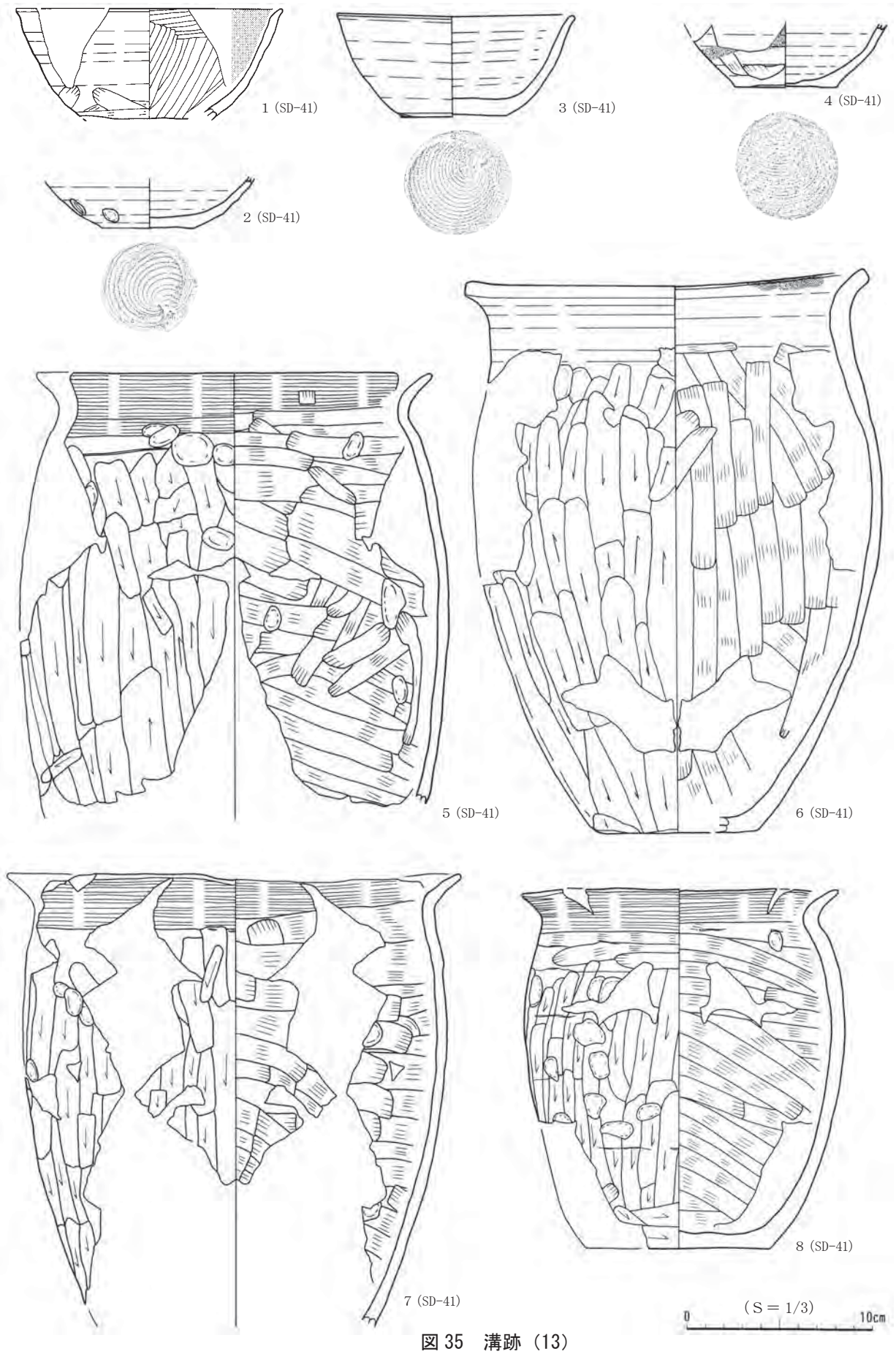


図 35　溝跡（13）

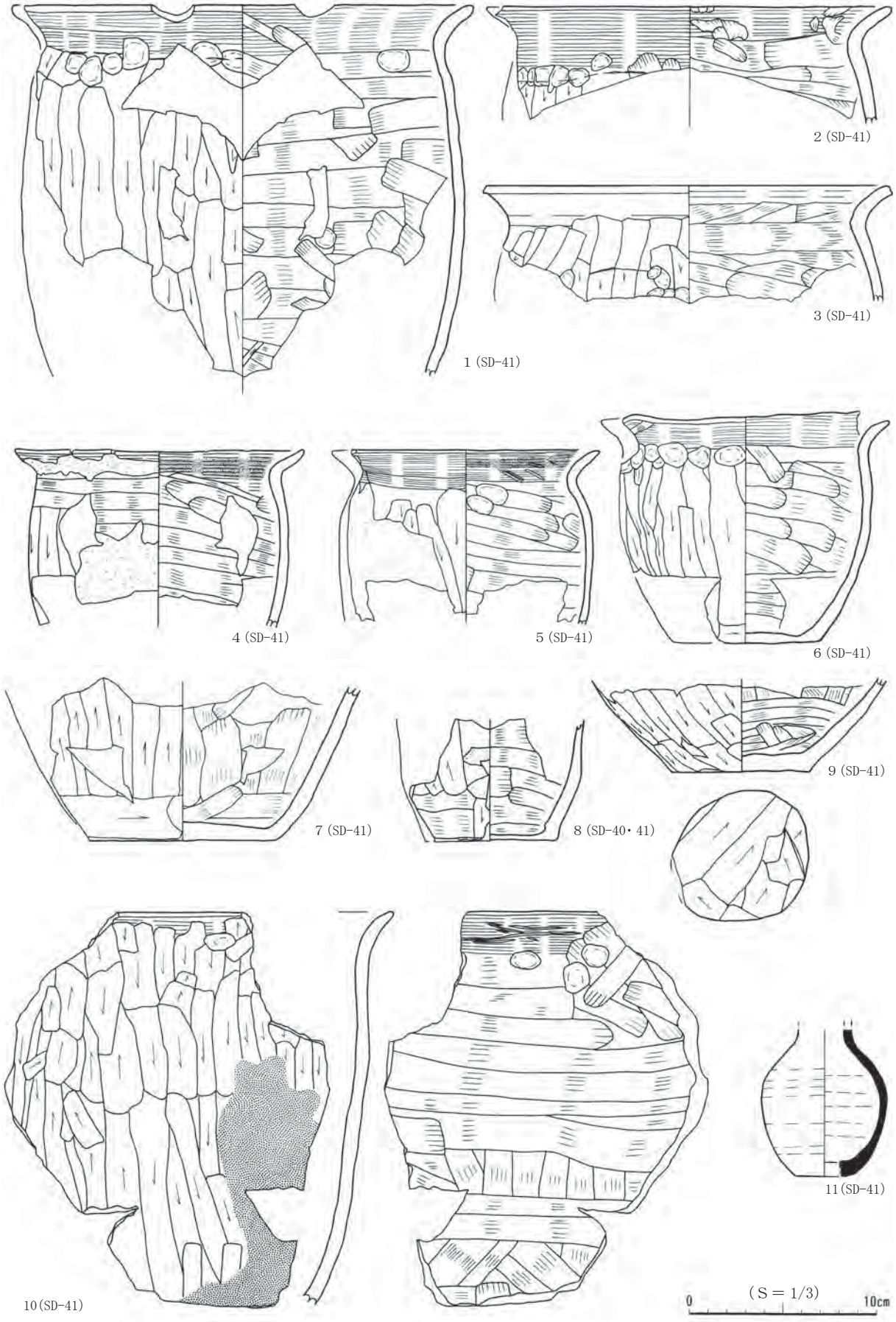

1 (SD-41)
2 (SD-41)
3 (SD-41)
4 (SD-41)
5 (SD-41)
6 (SD-41)
7 (SD-41)
8 (SD-40・41)
9 (SD-41)
10 (SD-41)
11 (SD-41)
(S＝1/3)
0
10cm

図 36　溝跡（14）

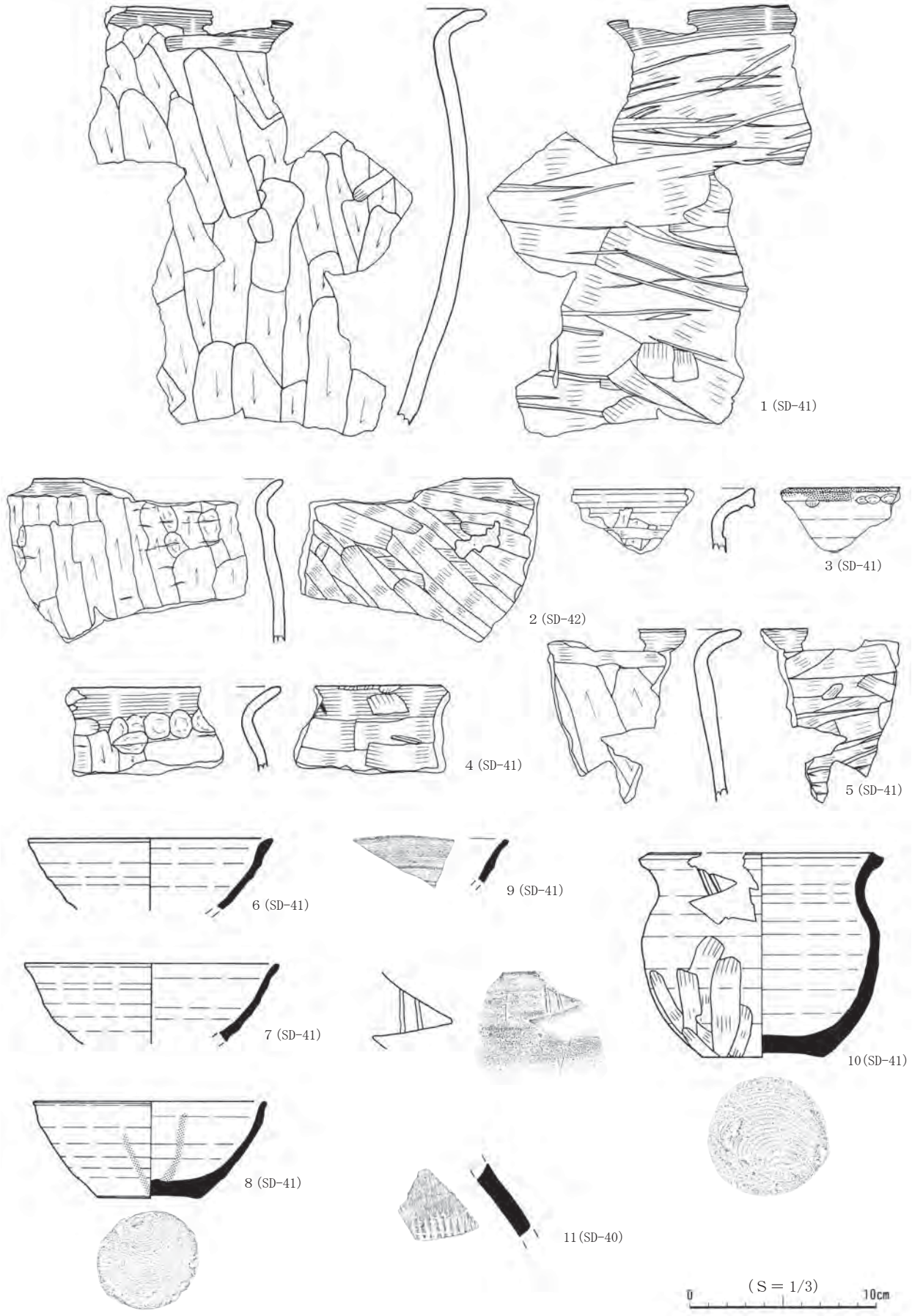

1 (SD-41)
2 (SD-42)
3 (SD-41)
4 (SD-41)
5 (SD-41)
6 (SD-41)
7 (SD-41)
8 (SD-41)
9 (SD-41)
10 (SD-41)
11 (SD-40)
(S＝1/3)
0
10cm

図 37　溝跡（15）

溝跡計測表

SD番号	図	農道番号	位　置	標高（ｍ）	長さ（ｍ）	幅（cm）	深さ（cm）	平面形	重複	備考
1	23	4	ⅢＸ・Ｙ-37・38	42.8	(2.0)	40～44	7～14	直線状	なし	
2	23	4	ⅢＸ・Ｙ-34	42.7	3.7	58～74	3～13	直線状	なし	
3	23	4	ⅣＢ-27～29	41.9～42.1	(6.3)	32～46	24～49	直線状	なし	
4	23	4	ⅣＢ-28・29	41.3	(4.6)	20～40	2～8	直線状	なし	
5	23	4	ⅣＦ-27	42.0	(1.6)	30～46	3～13	Ｌ字状	なし	
6	24	4	ⅢＨ～Ｐ-51～54	39.2～39.9	(31.6)	32～56	11～32	直線状	なし	
7	24	4	ⅢＭ～Ｏ-51・52	39.8	(9.8)	32～40	1～14	直線状	なし	
8	24	4	ⅢＪ・Ｋ-53・54	39.0	(7.2)	54～98	13～23	Ｌ字状	なし	
10	25	4	ⅡＲ-54～56	38.7～38.9	(7.0)	40～46	20～30	直線状	なし	
11	25	4	ⅡＩ-56・57	39.8	(5.1)	38～52	10～30	直線状	なし	
12	25	4	ⅡＧ-56・57	38.6～38.7	(4.7)	50～85	7～22	直線状	なし	
13	25	4	ⅡＡ～Ｆ-57	38.4～38.6	(22.1)	35～60	6～18	直線状	なし	
14	27	4	ＩＰ・Ｑ-61・62	37.8～37.9	(1.9)	50～74	3～19	直線状	SD18→	
15	27	4	ＩＸ・Ｙ-59・60	37.8～37.9	4.1	64～72	30～42	Ｌ字状	なし	
16	28	4	ＩＮ～Ｑ-63～65	37.3～37.4	(11.6)	100～112	7～42	逆コの字状	なし	掘方あり
17	27	4	ＩＸ-60	37.8	(2.2)	140～240	1～8	直線状（断続的）	なし	
18	27	4	ＩＰ～Ｒ-61・62	37.5～37.8	(6.8)	156～174	37～50	直線状	→SD14	B-Tm堆積、掘方あり
19	30	4	ＩＶ～ＩＹ-58・59	38.1～38.5	(6.5)	40～68	14～34	直線状	SD20・21→	
20	30	4	ＩＷ-58・59	38.1～38.2	(3.4)	44～72	9～31	直線状	SK07→、→SD19	
21	30	4	ＩＶ-58・59	37.5	(1.7)	28～40	2～17	直線状	→SD19	
22	27	23	ＩＭ-65	37.1	(0.9)	140～250	1～17	直線状	なし	
26	27	23	ⅢＴ-28	41.9	(0.6)	160～180	8～11	直線状	なし	
27	30	23	ＩＲ・Ｓ-29・30	40.6	(5.2)	50～68	3～21	直線状	なし	
28	31	23	ＩＫ・Ｌ-32	39.9	(2.7)	34～36	10～27	直線状	なし	B-Tm堆積
29	30	23	ＩＯ-32	40.3	(1.6)	18～28	1～8	直線状	なし	
30	30	4	ＩＬ-70	36.8	(2.8)	60～66	37～52	直線状	なし	
34	31	23	ⅢＫ・Ｌ-24・25	41.5～41.6	(5.5)	24～36	14～21	緩やかなＳ字状	なし	
35	32	23	ⅡＪ～Ｌ-23	41.2～41.4	(5.0)	24～40	4～20	直線状	なし	B-Tm堆積
36	33	23	ⅡＩ-23・24	41.4～41.5	(5.0)	50～70	13～27	直線状	→SD43	
37	32	23	ⅡＢ-25・26	41.2～41.3	(4.7)	28～48	3～8	直線状	SD39→	
38	32	23	ⅡＢ-25・26	41.2	(6.1)	66～78	19～53	直線状	SD39→	
39	32	23	ⅡＢ-25	41.2	(0.3)	28～32	6～12	直線状	→SD37・38	
40	34	23	ＩＸ・Ｙ-26・27	41.1	(2.1)	32～40	5～17	直線状	→SD41	
41	34	23	ＩＷ～Ｙ-27・28	41.1～41.3	(4.7)	84～140	14～23	弧状	SD40→、→SD42	B-Tm堆積
42	34	23	ＩＷ～Ｙ-27・28	41.1～41.3	(1.6)	72～152	14～52	弧状	SD41→	
43	33	23	ⅡＩ-24	41.4～41.5	(2.0)	50～144	23～50	直線状	SD36→	B-Tm堆積

長さの（　）は残存値を示す。重複の「→」は「旧→新」を示している。

第５節　井戸跡

井戸跡は１基検出された。調査区北西部の緩やかな斜面地に構築されている。

第１号井戸跡〈SE － 01〉（図 38）

［位置・確認］農道 23 号の西側、ＩＱ－ 24・25 グリッドに位置し、標高は約 40.9 ｍである。第Ⅱ層精査中に火山灰が混入する黒褐色土の円形のプランとして確認した。井戸跡周辺には径 22 ～ 38cm・深さ 13 ～ 32cm の円形あるいは楕円形のピットが検出され、井戸跡に施設が伴っていた可能性も考えられる。

［平面形・規模］径の異なる２基の土坑が重複しているような形態である。開口部は径 220cm の円形を呈し、60cm の深さで一旦平坦面が形成される。平坦面中央部の掘り込みは、開口部は径 110cm の円形で、深さ 170cm まで掘り込まれ、底面は径 95cm の円形である。

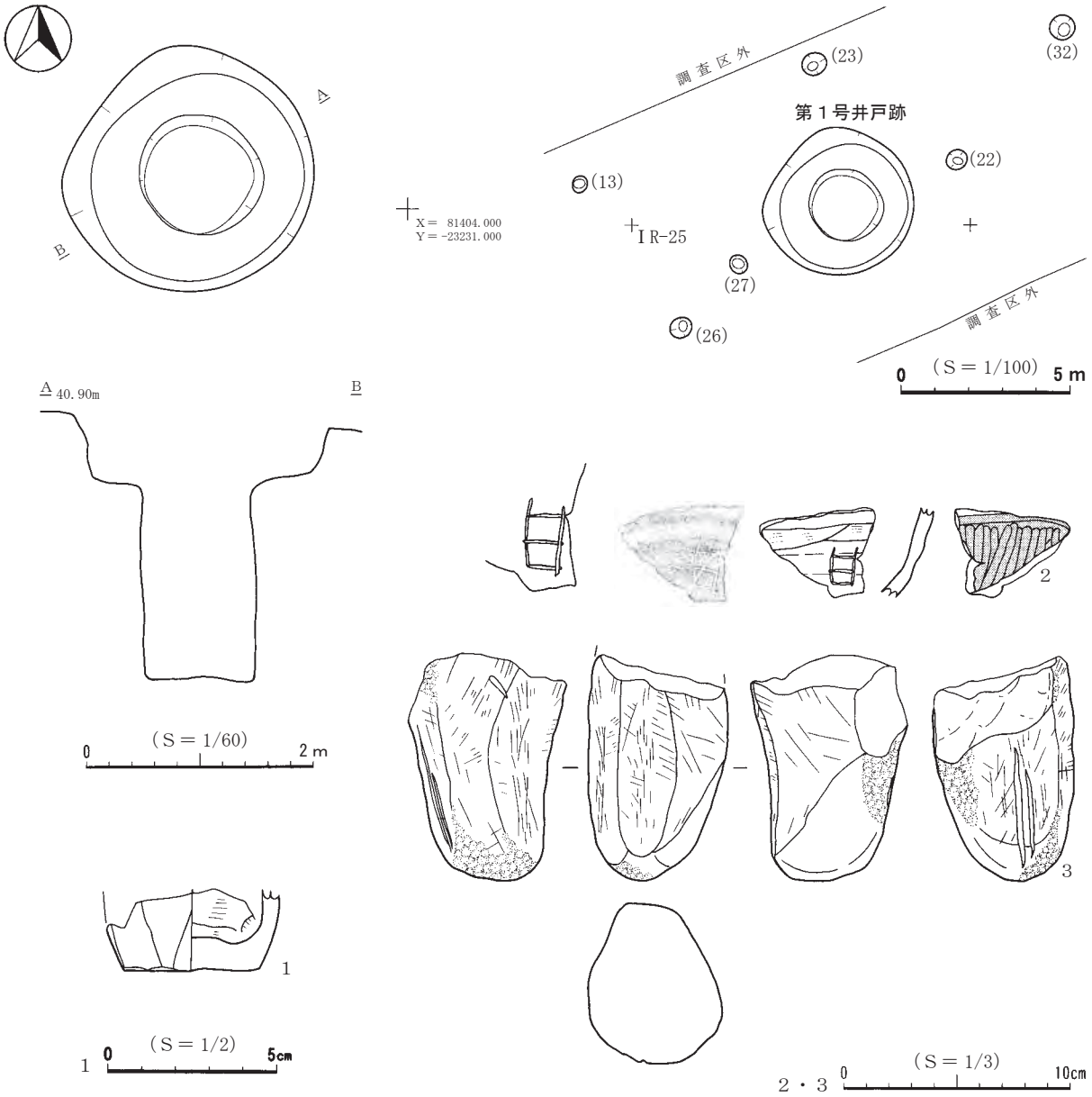


図 38　井戸跡

［堆積土］湧水による崩落のため、土層図は作成できなかった。堆積土上位には白頭山火山灰混入土が堆積していた。中位には壁の崩落土が堆積し、その下は混入物の少ない黒色土が堆積していた。
［壁・底面］上部の壁は開きながら立ち上がるが、下部の壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面中央部がやや盛り上がる。
［出土遺物］土師器坏１点、ミニチュア土器１点、砥石１点を図示した。このほかに、小破片のため図示しなかったが、土師器甕の破片が出土している。図 38 －１はミニチュア土器の底部で、底径 4.0cm、底面は砂底である。２は「日」のヘラ描きがみられる土師器坏である。外面はロクロ調整で内面は丁寧なミガキの後、黒色処理が施されている。これらは井戸跡の確認面から出土した。３の砥石は堆積土上層から出土したもので、４面とも使用されているが、使用が頻繁な面は凹んでいる。側面および端部には敲打痕が認められる。

第６節　焼土跡

検出された焼土跡は１基である。堆積状況や出土遺物から平安時代のものと考えられる。

第１号焼土跡〈SN － 01〉（図 39）

農道４号中央、ⅢＹ－ 32 グリッドに位置し、標高は約 42.9 ｍである。長軸 67cm、短軸 60cm の不整な楕円形を呈し、褐色に赤変している。焼土の上面には黒褐色土が堆積し、白頭山火山灰が小ブロック状に混入している。図示しなかったが、焼土上面から土師器甕の胴部片が出土した。

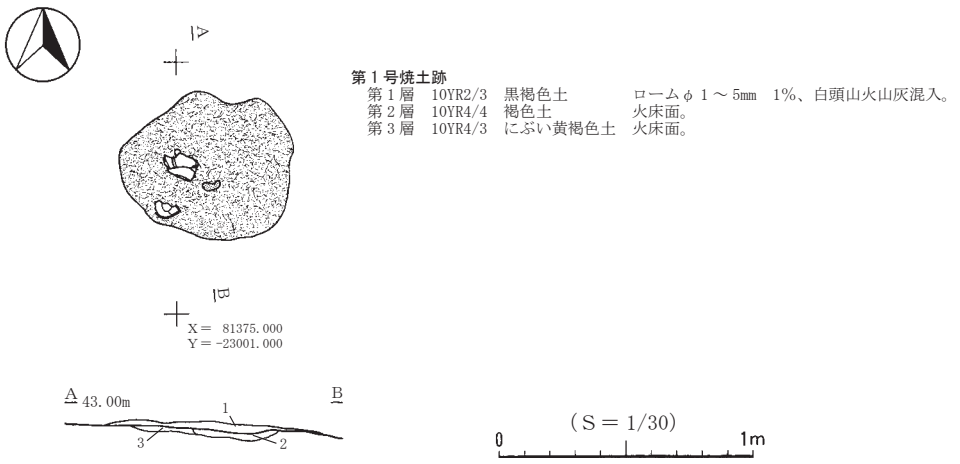


図 39　焼土跡

第７節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物はトロ函で１箱である。

１　縄文土器（図 40 － １～ 11）

縄文時代早期末～前期初頭・後期・晩期の土器が出土している。後期の土器は調査区全域から散発的に出土しているが、早期末～前期初頭の土器はⅣＣ－ 27、晩期の土器はⅡＳ－ 17 からまとまって出土している。

１～６は早期末～前期初頭に位置づけられる土器である。ⅣＣ－ 27 から 60 片余り出土しており、２・３個体分の破片と考えられるが、破片数の割には接合率が低い。いずれも胎土に砂粒と繊維が混入し、全体的に摩滅している。１・２・４は同一個体で、口縁がやや内湾する器形と考えられ、平口縁である。異なる原体を用いて施文されており、摩滅で判然としないが、RR の横回転と斜め回転による施文・Ｒの単軸絡条体の斜め回転による施文がされている。４は粘土の下にも施文があり、粘土帯に縄文施文後、さらに上部に粘土帯を積み上げて製作していたことがわかる。３と６は同一個体で、胴部外面に直前段多条ＬとＲの撚り合わせによる綾杉状の縄文が施文される。３は胴部片で、屈曲をもつ。６は底部片で、やや張り出し、底面は上げ底となっている。器壁は厚く、胎土には砂粒と多量の繊維が混入し、脆弱である。５は摩滅により文様は不明であるが、原体を様々な方向に回転して施文しているようである。底部は張り出し、上げ底となっている。３と６が早稲田５類に比定される以外は、時期決定は困難であるが早期末～前期初頭と考えられる。同時期の土器は、青森市浪岡の杉の沢遺跡でも出土している。

７～９は後期の十腰内Ｉ式に比定される。いずれも沈線による文様が施文されるが、小破片のため文様構成などは不明である。

10・11 は晩期の大洞Ｂ式に比定される同一個体である。頸部に緩やかな屈曲を有する大型の鉢形土器である。小波状口縁で、口縁直下の２条の平行線による区画内には入組三叉文が描かれ、下部に２条の平行線が巡る。文様は幅広く浅い沈線で施文されている。

２　剥片・石核（図 40 － 12 ～ 16）

剥片は４点出土した。ⅢＹ－ 32・34 から出土している。いずれも珪質頁岩製で、二次加工が施されるものもあるが、使用の痕跡は認められない。

石核は１点出土した。珪質頁岩の原石を打ち割った後、打面を作り出すための調整を数回加えたのみである。

３　礫石器（図 40 － 17）

遺構外から出土した礫石器は磨石１点である。扁平な楕円形礫の中央部に磨面をもつ。

４　土師器（図 41 － １～４）

甕４点を図示した。１・２はロクロ使用の甕で、２点とも口径 12 ～ 13cm と小型で、頸部のくびれ

図 40　遺構外出土遺物（１）

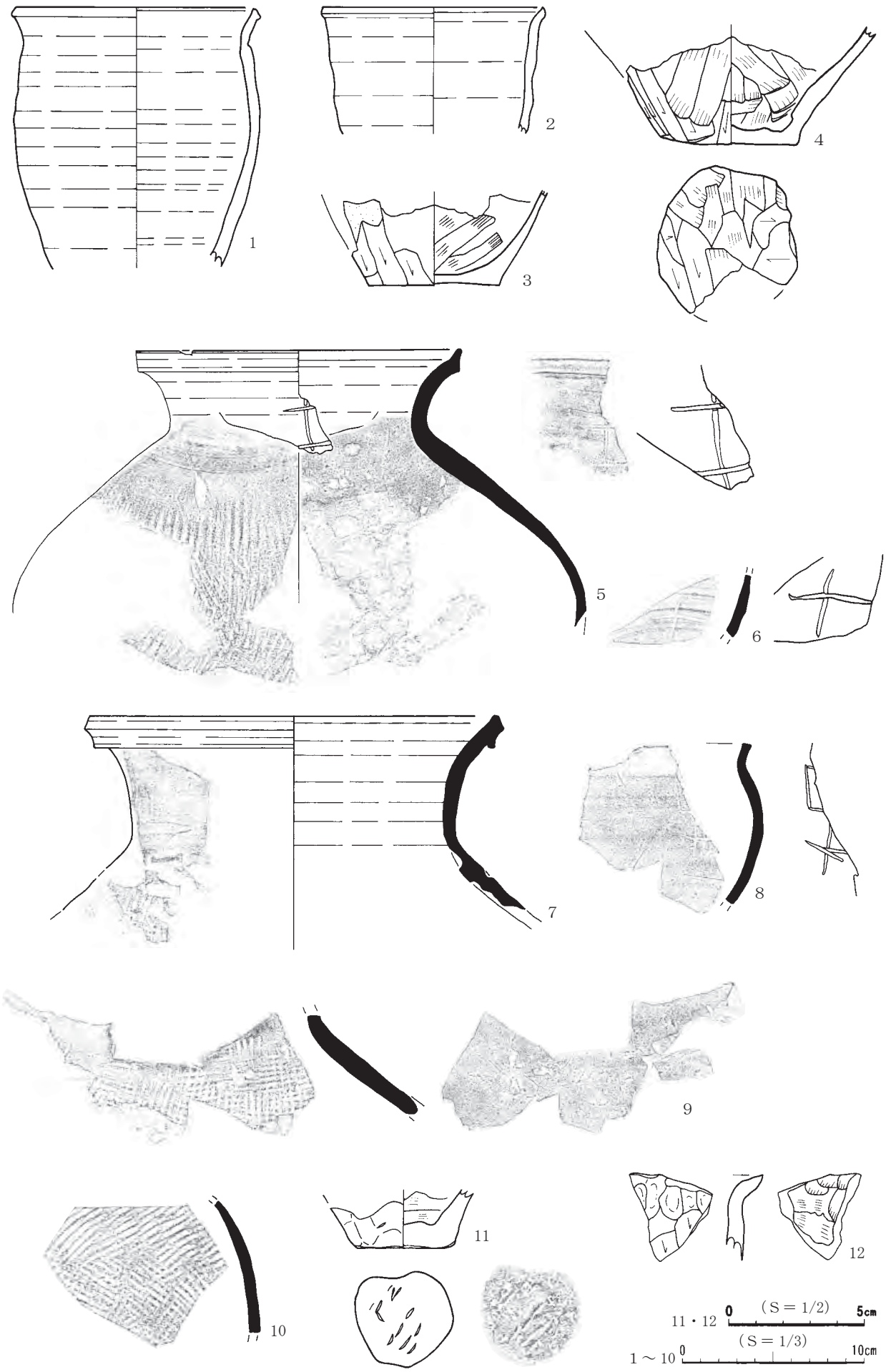


図 41　遺構外出土遺物（2）

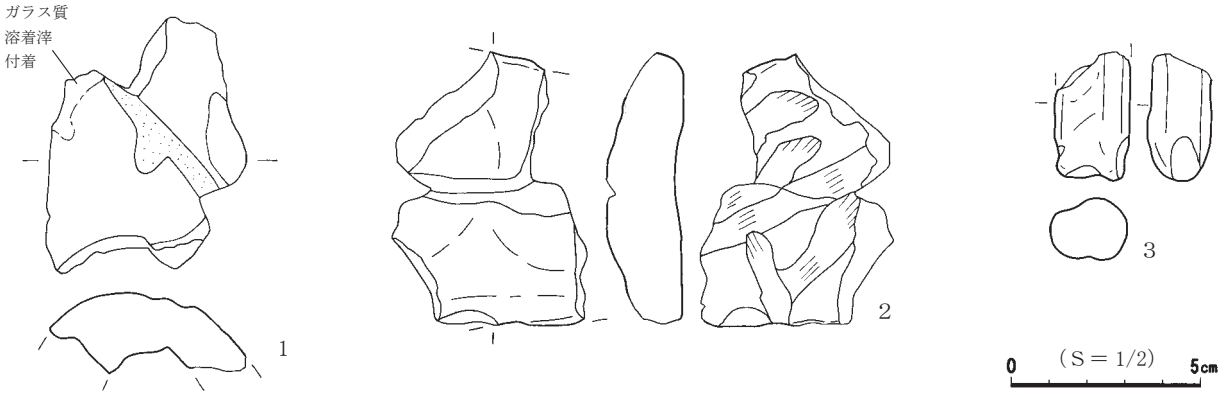


図 42　遺構外出土遺物（３）

が弱い。３・４はロクロ不使用の甕の底部で、外面にケズリが施される。４は底部から胴部にかけて大きく開く器形である。底面にはケズリとナデによる調整が見られる。

５　須恵器（図 41 － 5 ～ 10）

坏１点、甕３点、鉢１点を図示した。坏（６）の胴部には「十」の刻書が見られる。５・７・９は同一地点から出土しており、７と９は同一個体である。いずれも全体的に被熱しており、器面には火ハジケが見られる。５は口径 18.0cm で、頸部が外傾し、肩が張る器形である。頸部に縦１条と横２条の平行線を組み合わせた刻書がある。７は口径 22.6cm で、頸部は途中まで直立し途中から外傾する。外面のタタキ目は頸部まで施されている。内面には煤状の炭化物が付着している。８は口縁が外反し、口縁端部は面取りされ、平坦である。器壁が薄く、内外面ともロクロ調整のみである。胴部上半に「口」と「十」を組み合わせたような刻書が見られる。

６　土製品（図 41 － 11・12、図 42）

ミニチュア土器２点、羽口１点、板状土製品１点、棒状土製品１点を図示した。

ミニチュア土器（図 41 － 11･12）は手捏ねで成形されているものである。図 41 － 11 は底径 3.5cm で、底部は不整な円形である。底面に爪痕のような刻みが連続して見られる。

図 42 － 1 の羽口は、ガラス質の溶着滓が付着し、外面は還元により黒色に変色している。胎土には繊維のほか、焼土粒と砂粒が少量混入する。２は残存幅 7.3cm、厚さ２cm の板状の土製品である。断面形は中央部が反る形状である。表面は指による成形の跡が見られ、裏面は工具によるナデの痕跡が見られる。胎土には径１～２mm の粗い砂粒が含まれ、繊維も少量混入している。３は棒状の土製品で、断面形は 2.0 × 1.6cm の楕円形である。下端は中央部が凹む。

第４章　理化学的分析

第１節　寺屋敷平遺跡の放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

寺屋敷平遺跡は、青森県青森市浪岡大字吉野田字荷越沢41-668外 (北緯40° 43′ 58″、東経140° 33′ 32″) に所在する。

(2) 遺跡の立地

大釈迦川の西の低位段丘上 (標高約42m) に立地する。

(3) 測定の意義

住居跡の年代と集落の時期を明らかにしたい。

(4) 測定対象試料

測定対象試料は、第1号竪穴住居跡床面の堆積土第4層から出土した炭化材3点 (C-1：IAAA-61946、C-5：IAAA-61947、C-9：IAAA-61948) である。

(5) 化学処理工程

1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。木材の表皮に最も近い部分をピックアップした。

2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。

3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO_2) を精製する。

5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (還元) し、グラファイトを作製する。

6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(6) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxⅡ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

(7) 算出方法

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

2）ＢＰ年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}Ｃの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、ＡＭＳ測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Ｃの値を用いることもある。

δ^{13}Ｃ補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [\,(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [\,(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}Ｃ濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}Ｃ濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Ｃは、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}Ｃ濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、ＰＤＢ（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Ｃを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、Δ^{14}Ｃは、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}Ｃ濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}Ｃ濃度を、δ^{13}Ｃの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2 \quad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000)) \quad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [\,(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしないδ^{14}Ｃに相当するＢＰ年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}Ｃ濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており、Δ^{14}Ｃとの関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$ (‰)

$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$ (%)

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age;yrBP)が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

5) ^{14}C年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv3.10較正プログラム(Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001)を使用した。

(8) 測定結果

第1号竪穴住居跡床面の堆積土第4層から出土した炭化材3点(C-1:IAAA-61946、C-5:IAAA-61947、C-9:IAAA-61948)はそれぞれ1230±30yrBP、1240±30yrBP、1270±30yrBPの^{14}C年代である(表1)。誤差範囲で同時期である。暦年較正年代(2σ)では、660AD～890ADに全てが含まれ、飛鳥時代から平安時代前期前半に相当する。化学処理および測定内容、炭素含有量などに問題は無く、同一遺構から出土した試料3点の年代値が近似することから、妥当な年代であると考えられる。

参考文献

Stuiver,M.and Polash,H.A.(1977)Discussion:Reporting of 14C data.*Radiocarbon*,19:355-363

Bronk Ramsey C.(1995) Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37(2) 425-430

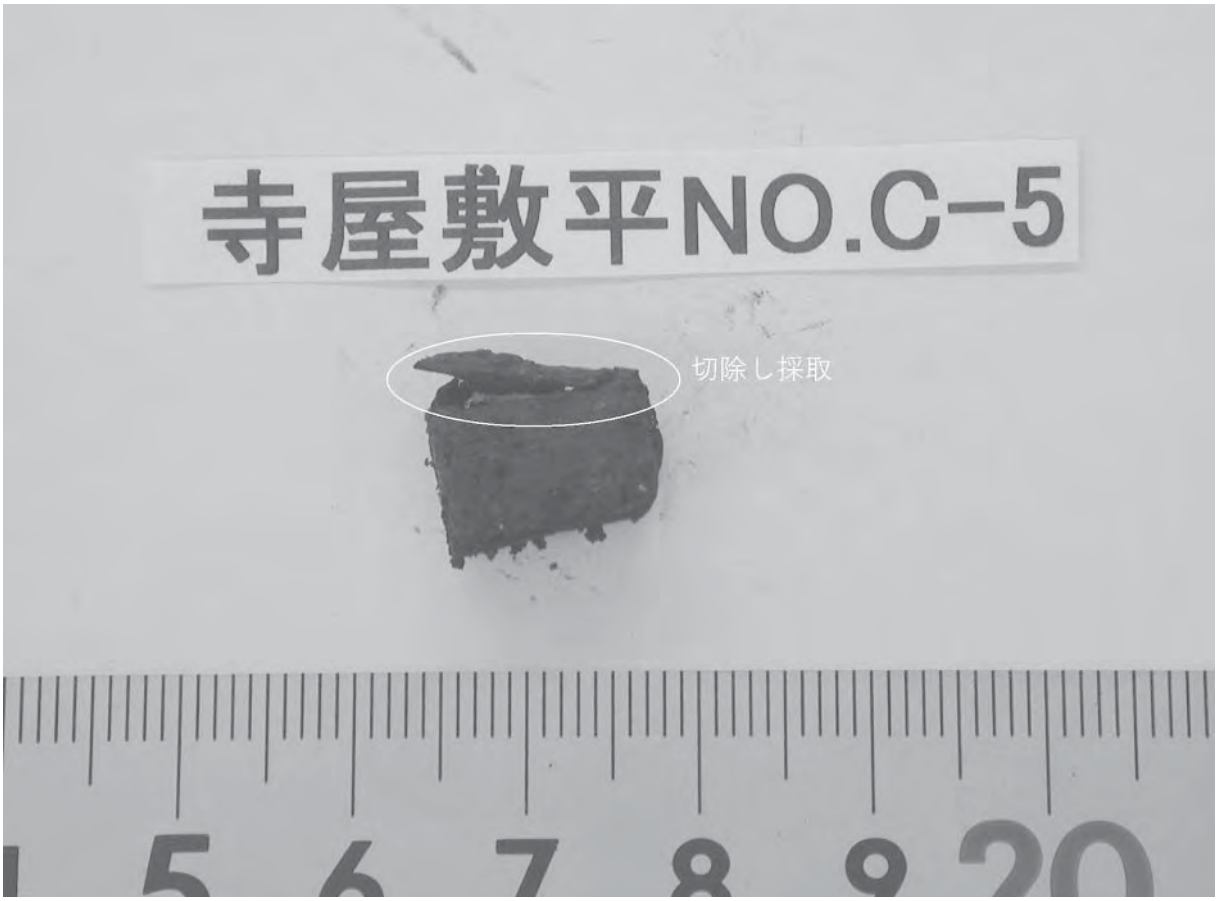
Bronk Ramsey C.(2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*,43(2A) 355-363

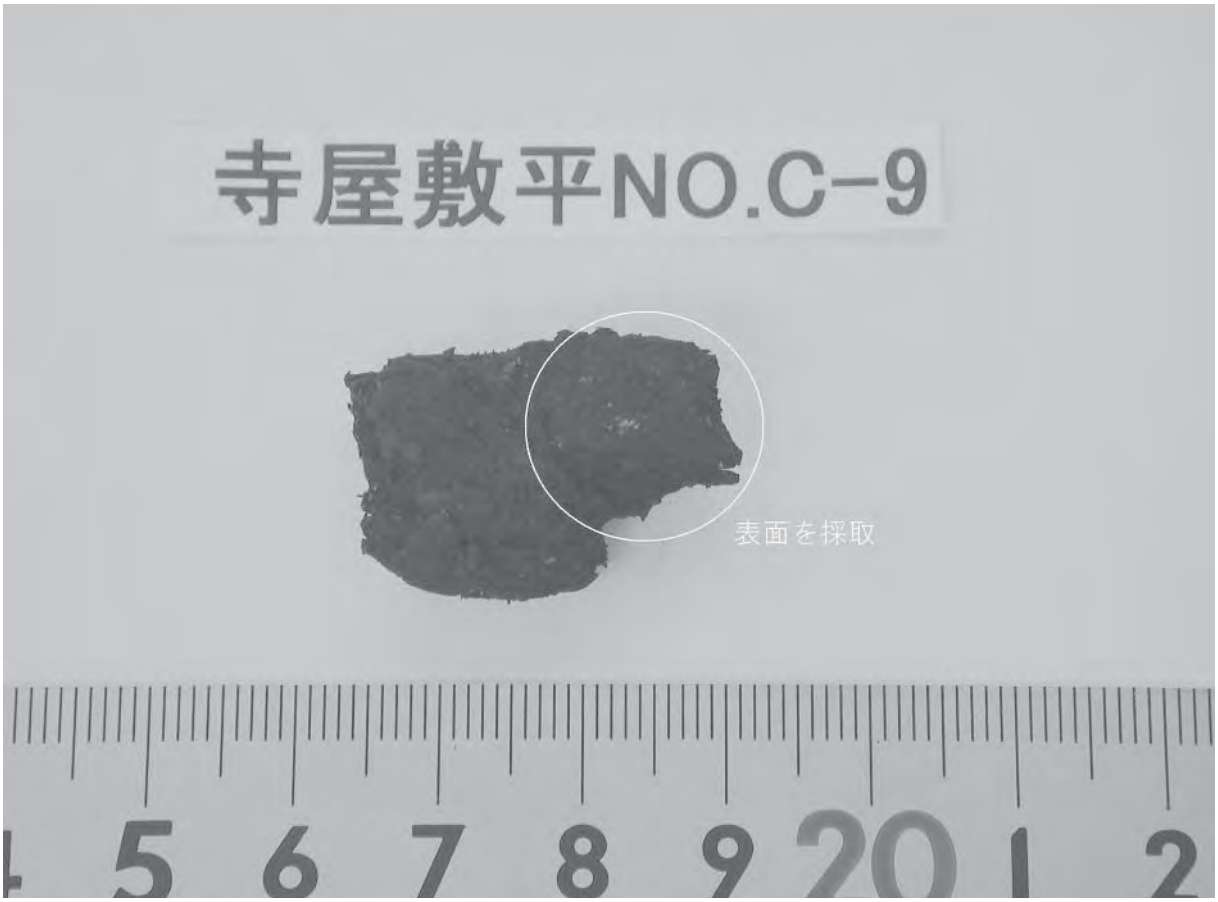
Bronk Ramsey C.,J.van der Plicht and B.Weninger(2001)'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389

Reimer et al.(2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

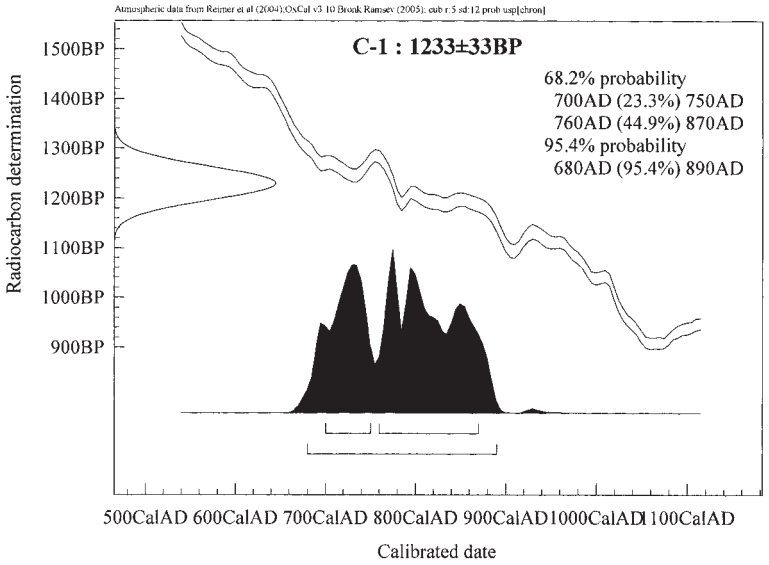
表1

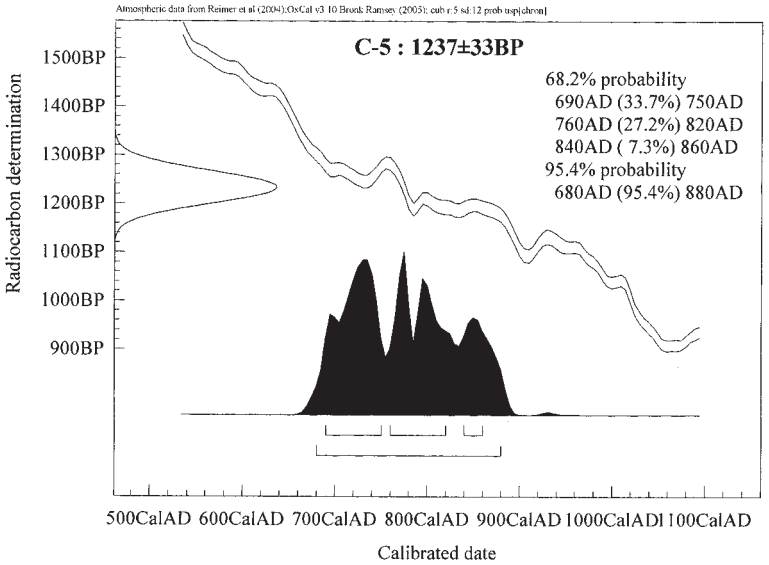
試料番号	IAA Code No.	前処理方法	試料状態	処理前試料量	回収炭素量	燃焼量	精製炭素量	δ 13C(‰)〔加速器〕	Libby Age(yrBP)	(yrBP・丸め込みなし)	暦年較正1σ (yrcalBP)	暦年較正2σ (yrcalBP)
C-1	IAAA-61946	AAA 処理	乾燥	23.60mg	13.91mg	4.65mg	3.11mg	-24.61 ± 0.57	1230 ± 30	1233 ± 33	700AD-750AD(23.3%) 760AD-870AD(44.9%)	680AD-890AD(95.4%)
C-5	IAAA-61947	AAA 処理	乾燥	37.65mg	15.52mg	4.71mg	3.29mg	-23.60 ± 0.62	1240 ± 30	1237 ± 33	690AD-750AD(33.7%) 760AD-820AD(27.2%) 840AD-860AD(7.3%)	680AD-880AD(95.4%)
C-9	IAAA-61948	AAA 処理	乾燥	24.50mg	12.76mg	4.70mg	3.22mg	-24.46 ± 0.64	1270 ± 30	1274 ± 33	680AD-730AD(37.9%) 735AD-775AD(30.3%)	660AD-820AD(93.8%) 840AD-860AD(1.6%)

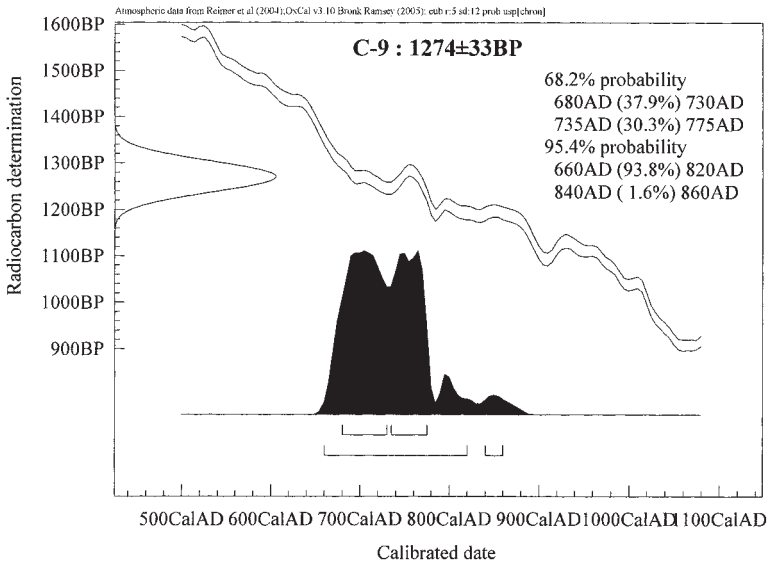

寺屋敷平NO.C−5
切除し採取


寺屋敷平NO.C−9
表面を採取

【暦年較正】







使用プログラム：OxCal v3.10

第２節　寺屋敷平遺跡の火山灰分析

弘前大学・理工学部・地球環境学科
柴　　正敏

青森市寺屋敷平遺跡より採集された、火山灰サンプル 12 試料について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表１に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003；青木・町田、2006)。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザー（以下ＥＰＭＡ）が用いられるようになってきた。本報告では、１試料の火山ガラスについてＥＰＭＡ分析を行った。使用したＥＰＭＡは弘前大学･機器分析センター所属の日本電子製ＪＸＡ－８８００ＲＬ、使用条件は加速電圧１５ｋＶ，試料電流５×１０$^{-9}$アンペアである。

ガラスの形態及び共存鉱物（表１）、ＥＰＭＡによる分析値（表２）により、試料１～１２は、白頭山苫小牧テフラ起源のガラスよりなる。これら試料にはアルカリ長石、エジリンオージャイト、ヘデン輝石が認められた。表２から明らかなように、９成分の含有量について、既存の白頭山苫小牧テフラ起源のガラス組成（Machida、1999；柴ほか、2000）と良く一致する。本遺跡に産する白頭山苫小牧テフラ起源のガラス組成は既存のデータと同様、二つの組成クラスターを持っている。すなわち、比較的肉厚で気泡径が中程度のガラスは、よりSiO_2に乏しくCaOやK_2Oに富む(B-Tm(a))。一方、気泡径が大きく良く発泡したガラスあるいは気泡径が小さく発泡度の低いガラスは、よりSiO_2に富みCaOやK_2Oに乏しい組成を持っている(B-Tm(b))。

(引用文献)

青木かおり・町田　洋(2006)、日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成　― K_2O-TiO_2図によるテフラの識別．地質調査研究報告、第57巻、第７/8号、239－258.

Machida,H.(1999),Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan:Recent progress. 第四紀研究、第 38 巻、194-201.

町田　洋・新井房夫 (2003)、新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－．東京大学出版会、pp.336.

柴　正敏・重松直樹・佐々木　実 (2000)、青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成（１）．弘前大学理工学部研究報告、第１巻、第１号、11-19.

表１　寺屋敷平遺跡の火山灰

試料No.	採取場所	層　位	ガラス及び鉱物	火山灰の帰属	特記事項
1	SI-3	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
2	SI-4	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	プラントオパール
3	SI-6	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
4	SI-9	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
5	SK-12	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
6＊	SD-18	上層	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	プラントオパール
7	SD-18	下層	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
8	SD-28	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	プラントオパール
9	SD-31	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
10	SD-35	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	
11	SD-43	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、ホルンブレンド、鉄鉱	B-Tm	プラントオパール
12	SD-41	フク土	ガラス（pm、bw）、アルカリ長石、ヘデン輝石、エジリンオージャイト、斜長石、単斜輝石、斜方輝石、鉄鉱	B-Tm	

pm：軽石型、bw：バブルウォール型、B-Tm: 白頭山苫小牧テフラ

表２　寺屋敷平遺跡、火山ガラス EPMA データ

白頭山苫小牧テフラ

		SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	n	Total	EPMA
試料番号６	最大	68.73	0.38	15.55	5.10	0.22	0.12	0.94	4.40	5.95			
SD-18	最小	68.64	0.29	14.74	4.56	0.06	0.07	0.82	4.00	5.39			
上層	平均	68.68	0.34	15.08	4.81	0.13	0.09	0.89	4.18	5.79	4	101.14	WDS
B-Tm (a)	標準偏差	0.040	0.043	0.368	0.230	0.071	0.021	0.056	0.176	0.269			
Machida(1999)	B-Tm (a)	68.4	0.4	14.8	4.5	0.1	0.1	1.0	5.4	5.3	15		WDS

		SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	FeO	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	n	Total	EPMA
試料番号６	最大	76.99	0.15	10.54	4.34	0.15	0.23	0.25	4.02	4.75			
SD-18	最小	76.08	0.03	10.09	4.09	0.00	0.00	0.20	3.71	4.41			
上層	平均	76.47	0.08	10.34	4.19	0.04	0.13	0.22	3.89	4.64	4	99.80	WDS
B-Tm (b)	標準偏差	0.445	0.060	0.239	0.105	0.074	0.131	0.025	0.144	0.154			
Machida(1999)	B-Tm (b)	75.30	0.20	10.70	4.10	0.00	0.10	0.30	4.70	4.50	19		WDS

測定値は無水で 100%になるように再計算した。FeO*：全鉄を FeO として計算した。’n は分析の点数を表す。
WDS は波長分散型 EPMA を表す。

第３節　寺屋敷平遺跡の炭化材の樹種同定および炭化植物遺体同定

藤根　久・鈴木　茂（パレオ・ラボ）

1. はじめに

寺屋敷平遺跡の調査では、平安時代に比定される竪穴住居跡が検出された。この竪穴住居跡は、床面のほぼ全面から炭化物が堆積していることから、焼失家屋と考えられている。

ここでは、この竪穴住居跡から出土した炭化材について樹種の検討を行った。なお、分析した試料中には、床面直上から炭化した草本遺体が検出されているが、植物珪酸体による植物同定を行った。炭化材の樹種同定は藤根、植物珪酸体による植物同定は鈴木がそれぞれ担当した。

2. 試料と方法

炭化材試料は、3 断面（横断面・接線断面・放射断面）を直径１cm の真鍮製試料台に両面テープで固定し、銀ペーストを塗布した後乾燥させた。その後、金蒸着して走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-5900LV 型）を用いて同定した。また、炭化した草本遺体（試料 No.8）については藤原（1976）に示されている行程にほぼしたがい電気炉を用いて灰化した。この灰化した試料についてその一部を取り出し、グリセリンを浸液としてプレパラートを作製し、検鏡した。

3. 結果

炭化材の樹種を検討した結果、常緑針葉樹のスギと落葉広葉樹のケヤキであった。多くはスギであり、建築材としてスギ材が利用されている様子が窺える。なお、県内の当該期の建築材としてスギ材が用いられた例は、黒石市浅瀬石地内に所在する浅瀬石南遺跡の住居跡内から検出された炭化材樹種の調査において報告されている（山田，1993）。その他、当該期の建築材としては、クリやコナラなどの落葉広葉樹などの利用もあることから、木材利用の地域的な事情も検討する価値がある。

草本遺体についてはプレパラートを作成して検鏡したが、同定の対象となる機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体が認められず、植物珪酸体分析から検討することはできなかった。なお観察中にイネとクマザサ属型の機動細胞珪酸体が複数個認められた。またイネ型の単細胞珪酸体も観察された。こうしたことからイネやクマザサ属型のササ類が住居材料の一部に用いられていた可能性が推察される。

(1) スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　図版１　1a-1c（No.9,C-19）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多く晩材の仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型で 1 分野に 2 個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。日本海側では縄文時代に低地にスギ林が成立していたことが知られている。材はやや軽軟で加工は容易である。

(2) ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　ニレ科　図版１　2a-2c（No.6,C-10）

年輪の始めに中型の管孔が１～２層配列し、その後小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する

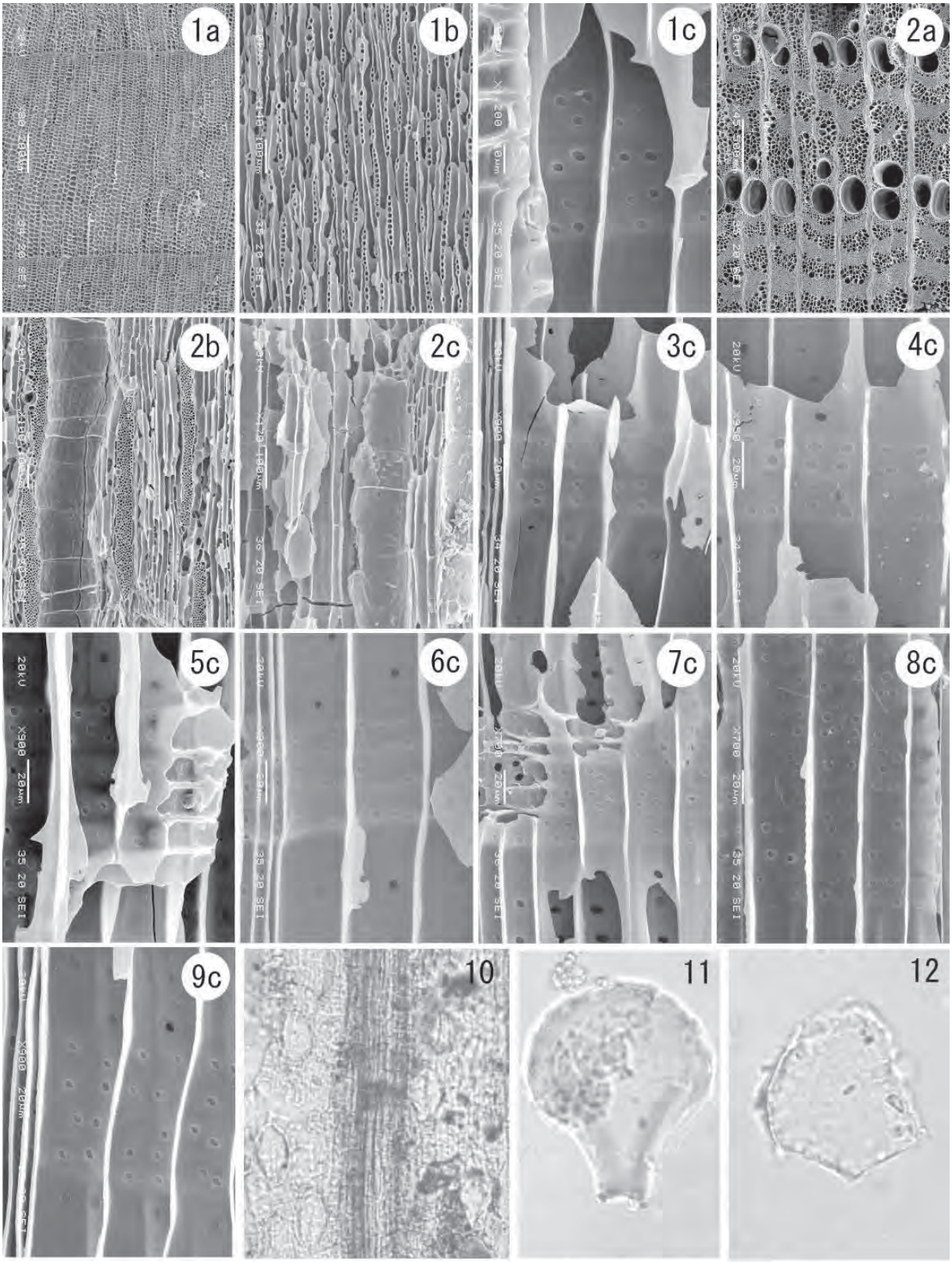
環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1 ～ 5 細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く、木目が美しい。狂い安いので充分な乾燥が必要な材である。用途は建築材や容器が多い。

引用文献

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成―用材から見た人間・植物関係史―. 植生史研究，特別第 1 号，242p.

試料№.	取上げ№.	出土位置	層　位	樹　　種
1	C － 3	第 1 号竪穴住居跡（SI-01）	床面直上	スギ
2	C － 4			スギ
3	C － 6			スギ
4	C － 8			スギ
5	C － 9			スギ
6	C － 10		床面	ケヤキ
7	C － 13			スギ
8	C － 17		床面直上	不明（イネ、クマザサ属型混じる）
9	C － 19		床面	スギ
10	C － 21			スギ



図版１　炭化材の走査電子顕微鏡写真（a: 横断面 , b: 接線断面 , c: 放射断面）と植物珪酸体の顕微鏡写真

1a-1c. スギ（No.9）　2a-2c. ケヤキ（No.6）　3c. スギ（No.1）　4c. スギ（No.2）

5c. スギ（No.3）　6c. スギ（No.4）　7c. スギ（No.5）　8c. スギ（No.7）　9c. スギ（No.9）

10. 草本遺体灰像　11. イネ　12. クマザサ属型

第５章　まとめ

１　遺構

今回の調査で検出されたのは、竪穴住居跡 10 軒、掘立柱建物跡３棟、土坑 11 基、溝跡 40 条、井戸跡１基、焼土跡１基である。検出された遺構の多くは、平安時代に属すると考えられるが、道路幅での調査のため、詳細については明らかでないものが多い。竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑は調査区中央部に点在するのに対して、溝跡は調査区西側の緩傾斜地に構築されるものが多いが、全体的に遺構の分布は疎らで、重複も少ない。火山灰が堆積している遺構もあり、遺構から検出された火山灰の分析を行った結果、いずれも白頭山火山灰と判明した。火山灰の堆積状況の違いから、若干の時間差があると考えられるが、大きな時間差は考えられない。

竪穴住居跡は 10 軒検出されたが、調査区外に延びるものがほとんどで、全体像が明らかになった住居は少ない。住居は調査区中央部の広い範囲に散在しており、重複するものはなく、隣接する住居も第６号住居跡と第７号住居跡の２軒のみで、他は一定の間隔をもって構築されている。

平面形が明らかになった５軒のうち４軒が長方形で、北東－南西方向に長い形態である。規模が全く不明の住居が２軒あるが、第２号住居跡が 2.8 × 2.2 ｍと特に小規模で、他は短辺 3.3 ～ 4.4 ｍ、長辺でも 3.9 ～ 4.6 ｍで、規模はあまり大きくない。第５号住居跡と第７号住居跡は長辺が５ｍ以上と推定され、やや規模が大きい。

周溝をもたない住居は第２号住居跡・第４号住居跡のみで、他はすべて周溝をもつ。柱穴配置は、住居全体を調査できたものが少ないため断言はできないが、住居中央部に明確な主柱穴をもつものはなく、ほとんどが住居隅や周溝内に小規模な壁柱穴をもつ構造である。これは、規模があまり大きくない住居は主柱穴がなくても壁柱穴のみで十分建築が可能だったためとも考えられる。

カマドが検出された３軒の住居では、カマドは南東壁に構築されており、カマドが調査区外にある住居でも、第２号住居跡を除いて南東壁に構築されている可能性が高い。カマドの袖は芯材を用いず、粘土のみで構築されている。支脚に土師器甕の底部を用いる例が２例あった。

第４号住居跡と第 10 号住居跡は外周溝をもつと考えられる。第４号住居跡の外周溝は幅が狭く、平面形がコの字状であるのに対し、第 10 号住居跡の外周溝は幅が広く、Ｃ字状に近い。調査区中央部は削平され、当時とは地形が異なっているが、平坦地（あるいは丘陵頂部）に立地する住居の外周溝と斜面地に立地する住居の外周溝では、規模や構築方法などが異なる可能性も考えられる。第 41 号溝跡も径７ｍの弧状を呈すると推定され、住居の外周溝となる可能性がある。なお、野尻 (1) 遺跡等に特徴的な「竪穴住居跡＋掘立柱建物跡＋外周溝」の３点セットは検出されなかった。

住居の配置を見るために、住居の軸方向を計測してみると、北から 25°前後東に傾くもの、30 ～ 35°前後傾くもの、40°前後傾くもの、50°以上傾くのものがある。傾きが大きい（50°以上）住居には白頭山火山灰が堆積しているものが多く、傾きの小さい住居（35°前後以下）には火山灰が混入するものが多い。40°前後のものには火山灰は見られない。このことから、寺屋敷平遺跡では住居の傾きと時期がほぼ一致する可能性があり、火山灰の堆積状況によって３時期の変遷を考えることができる。①白頭山火山灰降下以前に埋没した住居（１・５・７・８）、②火山灰降下以前に廃棄されたが埋没しきらずに、火山灰が堆積した住居（９・10）、③火山灰降下前後の住居で、火山灰が二次堆積す

る住居（４・６）。これに住居の傾きから、②に第２号住居跡、③に第３号住居跡が加えられる。第４号住居跡は住居と外周溝では火山灰の堆積状況が異なり、時間差がある可能性も考えられるが、住居の傾きから③に加えた。また、第３号住居跡のように床面で検出された住居については断定することは難しいが、以上のような変遷を考えた。②の年代については白頭山火山灰の降下時期から、10 世紀初頭、③の年代は火山灰が混入する二次堆積土が床面直上に堆積するものが多いことから、火山灰降下直後の 10 世紀前半、①の年代については第１号住居跡の遺物の年代から、９世紀末と考えられる。この年代は、第１号住居跡出土の炭化材の放射性炭素年代測定結果とも矛盾しない。他の土坑や溝跡などもほぼ同時期と考えられ、寺屋敷平遺跡は白頭山火山灰降下前後の９世紀末～ 10 世紀前半を中心とする、短期間に営まれた集落跡と考えられる。

※北西壁が北方向からどれだけ傾いて構築されているかを計測した。

２　遺物

前項で述べた集落の変遷について、出土遺物から見てみる。一定量の遺物が出土している住居は第１号住居跡・第６号住居跡・第９号住居跡の３軒のみであるが、それほど大きな差異は認められない。以下に、各住居出土遺物の特徴を簡単に述べる。第１号住居跡では土師器坏２点、須恵器坏２点が出土しており、他の住居に比べ坏の比率が高い。ロクロ甕の口縁（図７－３）は内側につまみ出すような形状を呈し、他のロクロ甕よりもやや古手に位置づけられると考えられる。第６号住居跡では土師器坏１点・須恵器坏１点が出土しているが、甕の出土量が多く、坏の比率は低くなっている。甕はロクロ甕が主体的である。第９号住居跡では、坏は須恵器の１点のみで、坏の比率が低い。甕はロクロ甕が主体的である。前項での変遷では第１号住居跡→第９号住居跡→第６号住居跡となるが、第１号住居跡がやや古手の様相を示すが、第６号住居跡と第９号住居跡は土師器坏の有無以外には、甕の口縁形態や器形等に違いはほとんど認められなかった。

第 23 号溝跡や第 41 号溝跡は遺物が多く出土し、堆積土中には白頭山火山灰が堆積している。遺物は火山灰層の上下から出土しているが、火山灰の上下の層から出土した破片が接合するものが多く、火山灰の上下では器種組成や器形等に明確な違いは認められなかった。このことから、これらの遺構から出土した遺物は、溝跡に直接廃棄されたものではなく、周囲の土とともに遺構内に流入した可能性が考えられる。

第６号住居跡から墨書土器が１点出土している。墨書土器は床面に半分埋もれた状態で出土し、坏の下部でピットが検出されたが、ピットの底面に坏が置かれた状態のまま埋没したのか、坏を据え置くためにピットをつくり坏を埋めたのかははっきりしなかった。第６号住居跡からはこのほかに、刻書をもつ土師器甕が２点、カマドとその周辺から出土している。坏に墨書きされた「卌」は悪霊を迷わす迷路で邪を払い祈願成就をもたらす縦４本横５本の格子状の模様を簡略にしたものと考えられている。野尻 (3) 遺跡では、９世紀半ばに比定される建物跡の外周溝から、同様の墨書をもつ土師器坏が３点まとまって出土している。坏は器高が高く、ロクロ成形で底辺部に横方向のケズリが施され、内面黒色処理されている。このほかにも同遺跡では６点出土している。青森市野木遺跡の第 223 号竪穴住居跡の床面からも１点出土している。須恵器に「卌」と刻書されたものは多いが、墨書は意外と少なく、明確に「卌」とわかるものは、県内では本遺跡を含め３遺跡 11 点だった。墨書土器以外にも、

溝跡や井戸跡からミニチュア土器や土玉が出土しており、当時の信仰や祭祀についての手がかりとなるものである。

以上簡単ではあるが、寺屋敷平遺跡の集落の変遷について住居の配置や火山灰の堆積状況、出土遺物などから見てきた。農道の事前調査のため調査幅が狭く、集落の全体像をとらえるには限界があり、推測の部分がかなり多い。浪岡地域では、野尻 (1) 遺跡や野尻 (3) 遺跡・野尻 (4) 遺跡・山本遺跡・山元 (2) 遺跡・山元 (3) 遺跡などで、本遺跡とほぼ同時期の白頭山火山灰降下前後の集落が検出されている。しかし、集落の形態は一様ではなく、本遺跡のように竪穴住居跡のみの集落と「竪穴住居跡＋掘立柱建物跡＋外周溝」の３点セットが主体となる集落がある。また、存続期間にも違いがあり、本遺跡のように短期間だけの集落と長期間存続する集落がある。これらの要因については今後の検討課題であるが、本遺跡と他遺跡との類似点や相違点をより詳細に比較検討し、浪岡地域全体の中での寺屋敷平遺跡の位置づけを考えていきたい。

引用・参考文献

青森県教育委員会　1978 「杉の沢遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第 45 集

青森県教育委員会　1981 「表館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第 61 集

青森県教育委員会　1984 「和野前山遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第 82 集

青森県教育委員会　1985 「売場遺跡発掘調査報告書（第１次調査、第２次調査)」
青森県埋蔵文化財調査報告書第 93 集

青森県教育委員会　1985 「売場遺跡発掘調査報告書（第３次調査、第４次調査)・大タルミ遺跡発掘調査報告書」
青森県埋蔵文化財調査報告書第 93 集

青森県教育委員会　1989 「表館 (1) 遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書第 120 集

青森県教育委員会　1994 「山元 (3) 遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第 159 集

青森県教育委員会　1995 「山元 (2) 遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第 171 集

青森県教育委員会　1996 「野尻 (2) 遺跡Ⅱ・野尻 (3) 遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第 186 集

青森県教育委員会　1998 「隠川 (12) 遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第 244 集

青森県教育委員会　2003 「野尻 (1) 遺跡Ⅴ」青森県埋蔵文化財調査報告書第 351 集

青森県教育委員会　2006 「野尻 (3) 遺跡Ⅱ」青森県埋蔵文化財調査報告書第 414 集

青森市教育委員会　2001 「野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ」青森市埋蔵文化財調査報告書第 54 集

五所川原市教育委員会・犬走須恵器窯跡発掘調査団　1998 「犬走須恵器窯跡発掘調査報告書」
五所川原市埋蔵文化財調査報告書第 21 集

五所川原市教育委員会　2003 「五所川原須恵器窯跡群」五所川原市埋蔵文化財調査報告書第 25 集

浪岡町史編纂委員会　2000 『浪岡町史』第１巻

荒井　秀規　　2005　「神に捧げられた土器」『文字と古代日本』４　神仏と文字

長内　孝幸　　2003　「青森県出土の刻書・墨書土器」『研究紀要』No. ６　青森大学考古学研究所

平川　南　　2000　『墨書土器の研究』

土器観察表

図番号	出土位置	層　位	種類	器種	計測値（cm） 口径	底径	高さ	調　整 外　面	内　面	底　面	備　考
7-1	SI-01	床面	土師器	坏	(13.2)	(5.8)	5.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
7-2	SI-01	床面・床直	土師器	坏	(13.2)	—	(4.7)	ロクロ、ナデ	ミガキ、黒色処理	—	SI-07 焼土と接合
7-3	SI-01	床面・床直	土師器	甕	—	—	—	ロクロ	ロクロ、ナデ	—	外面炭化物付着
7-4	SI-01	床面	土師器	甕	14.0	6.4	14.2	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	砂底	
7-5	SI-01	床面	須恵器	坏	12.4	5.9	5.4	ロクロ、火襷	ロクロ、火襷	回転糸切	
7-6	SI-01	床面	須恵器	坏	—	(6.0)	(2.9)	ロクロ、火襷	ロクロ、火襷	回転糸切	
9-1	SI-03	堆積土	土師器	坏	—	4.3	(3.8)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
10-1	SD-23	B-Tm 下層・堆積土	土師器	甕	(14.6)	—	(4.1)	ヨコナデ、ナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	—	被熱痕
10-2	SI-04	堆積土	土師器	甕	(22.8)	—	(11.3)	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	SI-08 火床面、SD-23B-Tm 下層と接合
10-3	SD-23	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	—	10.8	(13.0)	ケズリ	ナデ、指痕、黒色処理？		
11-1	SD-23	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	—	
11-2	SD-23	堆積土	須恵器	鉢？	—	—	—	ロクロ、ケズリ	ロクロ	—	
11-3	SI-04	堆積土	土師器	甕	—	(5.8)	(2.9)	ケズリ	ナデ	砂底、ケズリ	SI-08 火床面と接合
11-4	SI-04	床面・９層	土師器	塝？	—	—	—	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	—	摩滅、被熱痕
11-5	SD-23	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	—	
11-6	SD-23	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	—	内面褐色物質付着
11-7	SD-23	B-Tm 下層	土師器	甕	—	—	—	ケズリ	ナデ、黒色処理	—	外面粘土付着、11-8 と同一個体
11-8	SD-23	B-Tm 下層	土師器	甕	—	—	—	ケズリ	ナデ、黒色処理	—	11-7 と同一個体
14-1	SI-06	床面	土師器	坏	14.6	6.4	6.5	ロクロ	ミガキ、黒色処理	回転糸切	墨書
14-2	SI-06	堆積土	須恵器	坏	—	—	—	ロクロ、火襷	ロクロ、火襷	—	
14-3	SI-06	カマド底面・カマド堆積土	土師器	甕	(23.0)	—	(17.2)	ロクロ、ケズリ	ロクロ	—	刻書
14-4	SI-06	カマド堆積土・煙道確認面	土師器	甕	14.8	(9.6)	14.1	ロクロ、ナデ	ロクロ	砂底	被熱痕
14-5	SI-06	カマド堆積土・煙道確認面	土師器	甕	—	—	—	ロクロ	ロクロ、ナデ	—	
14-6	SI-06	床面・床直・カマド堆積土	土師器	甕	(22.1)	10.7	29.5	ロクロ、ナデ、ケズリ	ロクロ、ナデ	ナデ	刻書
14-7	SI-06	床直・カマド堆積土	土師器	甕	—	—	—	ロクロ、ナデ	ロクロ、ナデ	—	
14-8	SI-06	堆積土	縄文土器	深鉢	—	—	—	沈線	ミガキ	—	
15-1	SI-07	堆積土	土師器	坏	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	
15-2	SI-07	堆積土	須恵器	坏	—	—	—	ロクロ、火襷	ロクロ、火襷	—	酸化焔焼成
16-1	SI-08	カマド火床面	土師器	甕	—	11.3	(9.5)	ケズリ	ナデ	ナデ	内面火ハジケ
18-1	SI-09	堆積土・土坑底面	土師器	甕	(22.0)	—	(10.7)	ロクロ、ナデ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	
18-2	SI-09	ピット１堆積土	土師器	甕	(21.5)	—	(16.0)	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	
18-3	SI-09	堆積土・床面	土師器	甕	—	(8.4)	(17.5)	ケズリ	ナデ	ナデ、ケズリ	外面・底面に粘土付着
18-4	SI-09	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ロクロ、ナデ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	
18-5	SI-09	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ロクロ、ナデ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	
18-7	SI-09	床面	須恵器	坏	13.7	5.4	6.3	ロクロ、火襷	ロクロ、火襷	回転糸切	酸化焔焼成
19-1	SD-31	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	—	口縁内面に煤状炭化物付着
19-2	SD-31	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	—	摩滅
19-3	SD-31	堆積土	須恵器	坏	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	
19-4	SD-31	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ナデ	—	
19-5	SD-31	堆積土	須恵器	壷	—	—	—	ケズリ	ロクロ	ナデ	自然釉、須恵器片溶着
19-6	SD-31	堆積土	須恵器	甕	—	—	—	タタキ	ナデ	—	外面に変色部
19-7	SD-31	２層	縄文土器	深鉢	—	—	—	沈線	ミガキ	—	
21-1	SK-06	底面・１層	土師器	甕	—	(8.8)	(22.2)	ナデ、ケズリ	ナデ	砂底	外面粘土付着
21-4	SK-06	底面１層	須恵器	甕	—	—	—	タタキ	ナデ	—	
22-1	SK-08	確認面	須恵器	甕	—	—	—	タタキ	当て具痕、ナデ	—	
22-2	SK-08	確認面	須恵器	坏	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	刻書
22-3	SK-12	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ロクロ、ナデ	ロクロ、ナデ	—	
23-1	SD-02	１層	須恵器	鉢	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	
23-2	SD-03	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ロクロ、ナデ	ロクロ、ナデ	—	輪積痕
24-1	SD-06	堆積土	土師器	塝？	—	—	—	ケズリ	ナデ	—	外面タール状炭化物付着、摩滅
24-2	SD-06	堆積土	須恵器	鉢？	—	—	—	ロクロ、ケズリ	ロクロ	—	
25-1	SD-10	堆積土	須恵器	甕	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	酸化焔焼成、火ハジケ
26-2	SD-12	堆積土	須恵器	甕	—	—	—	タタキ	当て具痕、ナデ	—	酸化焔焼成
27-1	SD-18	B-Tm 上層	須恵器	甕	—	—	—	タタキ	ナデ	—	外面に変色部
27-2	SD-18	堆積土	須恵器	甕	—	—	—	タタキ	当て具痕、ナデ	—	
28-1	SD-16	堆積土	土師器	坏	—	4.8	(2.9)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	摩滅
28-2	SD-16	確認面	土師器	坏	—	(6.2)	(2.6)	摩滅	摩滅	回転糸切	被熱痕
28-3	SD-16	堆積土・確認面	土師器	甕	(14.0)	—	(5.1)	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	—	摩滅
28-4	SD-16	堆積土	土師器	甕	(10.6)	—	(7.2)	ヨコナデ、ナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ、指痕	—	
28-5	SD-16	堆積土	土師器	甕	—	7.4	(2.8)	ケズリ	ナデ	砂底、ケズリ	
28-6	SD-16	堆積土	土師器	甕	—	(7.6)	(2.5)	ケズリ、ナデ	ナデ、黒色処理	砂底	
28-7	SD-16	堆積土	土師器	甕	—	(6.0)	(3.0)	ケズリ	ナデ	砂底	被熱痕
29-1	SD-16	堆積土	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	—	Ⅰ L-59 と接合
29-2	SD-16	堆積土	須恵器	坏	(13.2)	(5.6)	5.4	ロクロ、火襷	ロクロ、火襷	回転糸切	
29-3	SD-16	確認面	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	—	輪積痕、摩滅
29-4	SD-16	堆積土	須恵器	坏	(18.4)	—	(4.2)	ロクロ	ロクロ	—	刻書
29-5	SD-16	堆積土	須恵器	坏	—	—	—	ロクロ、火襷	ロクロ、火襷	—	
29-6	SD-16	確認面	土師器	ミニ	—	—	—	ヨコナデ、ケズリ	ナデ	—	
31-1	SD-28	堆積土	土師器	甕	(21.2)	—	(6.1)	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	—	
31-2	SD-28	確認面	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	—	外面炭化物付着

図番号	出土位置	層　位	種類	器種	計測値（cm） 口径	底径	高さ	調　整 外　面	内　面	底　面	備　考
31-3	SD-28	堆積土	土師器	甕	－	－	－	ロクロ	ロクロ、ナデ	－	摩滅
31-4	SD-28	２層	須恵器	鉢？	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
31-5	SD-28	２層	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	当て具痕、ナデ	－	
31-6	SD-28	確認面	土師器	甕	－	－	－	ロクロ、ナデ	ロクロ、ナデ、黒色処理？	－	火ハジケ
32-1	SD-35	確認面	土師器	坏	－	4.8	(5.1)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
32-2	SD-35	確認面	土師器	壷？	－	(7.0)	(7.1)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	摩滅、被熱痕
32-3	SD-35	確認面	土師器	甕	－	(5.0)	6.8	ケズリ	ナデ		摩滅、被熱痕
32-4	SD-35	確認面	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	－	
32-5	SD-35	堆積土	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	－	
33-1	SD-43	６層	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	－	
33-2	SD-43	１層・堆積土	土師器	甕	(22.8)	－	(8.7)	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	－	外面粘土付着
33-3	SD-43	堆積土	須恵器	坏	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
34-1	SD-41	B-Tm 上層	土師器	ミニ	(6.0)	－	(4.3)	指痕、ナデ	ナデ	－	
34-2	SD-41	B-Tm 上層	土師器	ミニ	－	－	－	指痕、ケズリ	ナデ	－	
34-3	SD-41	B-Tm 下層	土師器	ミニ	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ナデ	－	
34-4	SD-41	B-Tm 上層	土師器	ミニ	－	－	－	ケズリ	ナデ	ナデ	
35-1	SD-41	B-Tm 下層	土師器	坏	14.4	(6.0)	－	ロクロ、ナデ	ミガキ、黒色処理	－	Ⅰ X-22 と接合
35-2	SD-41	B-Tm 上層	土師器	坏	－	(2.8)	4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	胎土緻密で硬質
35-3	SD-41	B-Tm 下層	土師器	坏	(12.2)	5.7	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
35-4	SD-41	B-Tm 下層	土師器	坏	－	(3.8)	5.6	ロクロ、ナデ	ロクロ	回転糸切	外面煤状炭化物付着
35-5	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	(21.2)	－	(23.5)	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ、指痕	－	Ⅰ X-22 と接合
35-6	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	(21.6)	(9.0)	30.1	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ナデ	ナデ	口縁内面に煤状炭化物付着
35-7	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	24.6	－	24.6	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	－	Ⅰ X-22 と接合
35-8	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	(16.2)	(9.8)	19.5	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	ナデ	輪積痕
36-1	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	(24.8)	－	(20.0)	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	－	ⅠX-22 と接合、口縁打ち欠き
36-2	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	(21.8)	－	(6.1)	ヨコナデ、ナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	－	輪積痕
36-3	SD-41	B-Tm 層	土師器	甕	(21.4)	－	(6.3)	ロクロ、ケズリ、指痕	ロクロ、ナデ	－	摩滅
36-4	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	(15.6)	－	(9.5)	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	－	口縁内面に煤状炭化物付着
36-5	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	(14.4)	－	(9.3)	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ、指痕	－	Ⅰ X-22 と接合
36-6	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	(15.2)	(9.6)	12.0	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	砂底	Ⅰ X-22 と接合
36-7	SD-41	B-Tm 下層	土師器	甕	－	(10.8)	(7.4)	ケズリ	ナデ	ナデ	Ⅰ X-22 と接合
36-8	SD-40・41	B-Tm 上層	土師器	甕	－	(7.0)	(6.5)	ケズリ、ナデ	ナデ	剥落	
36-9	SD-41	B-Tm 上層	土師器	甕	－	7.4	(5.0)	ケズリ	ナデ	ケズリ	
36-10	SD-41	B-Tm 下層	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	－	外面に粘土付着 SK-12 堆積土、ⅠX-22 と接合
36-11	SD-41	B-Tm 下層	須恵器	小型壷	－	(3.0)	(7.8)	ロクロ	ロクロ	－	自然釉
37-1	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	－	Ⅰ X-22 と接合
37-2	SD-42	堆積土	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	－	輪積痕
37-3	SD-41	B-Tm 上層	土師器	甕	－	－	－	ロクロ、ナデ、ケズリ	ロクロ、指痕	－	粘土付着、胎土緻密で硬質
37-4	SD-41	B-Tm 上層	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ、指痕	ヨコナデ、ナデ	－	輪積痕
37-5	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	土師器	甕	－	－	－	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	－	外面摩滅
37-6	SD-41	B-Tm 下層	須恵器	坏	(13.0)	－	(3.8)	ロクロ	ロクロ、火襷	－	
37-7	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	須恵器	坏	(13.7)	－	(4.2)	ロクロ	ロクロ	－	
37-8	SD-41	堆積土、B-Tm 下層	須恵器	坏	(12.5)	5.3	5.2	ロクロ、火襷	ロクロ、火襷	回転糸切	
37-9	SD-41	B-Tm 上層	須恵器	坏	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	
37-10	SD-41	B-Tm 上層・B-Tm 下層	須恵器	鉢	(12.6)	6.4	10.9	ロクロ、ナデ	ロクロ	回転糸切	刻書
37-11	SD-40	堆積土	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	ナデ	－	
38-1	SE-01	確認面	土師器	ミニ	－	4.0	(2.5)	ケズリ	ナデ	砂底	
38-2	SE-01	確認面	土師器	坏	－	－	－	ロクロ	黒色処理	－	刻書
40-1	Ⅳ C-27	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	RR 横・斜、R 単軸絡条体斜	摩滅	－	平口縁、繊維混入、40-2・4 と同一個体
40-2	Ⅳ C-27	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	RR 横・斜	摩滅	－	繊維混入、40-1・4 と同一個体
40-3	Ⅳ C-27	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	直前段多条ＬとＲの合撚	摩滅	－	繊維混入、40-6 と同一個体
40-4	Ⅳ C-27	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	RR 横・斜	摩滅	－	平口縁、繊維混入、40-1・2 と同一個体
40-5	Ⅳ C-27	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	不明	摩滅	無文	繊維混入、摩滅
40-6	Ⅳ C-27	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	直前段多条ＬとＲの合撚	摩滅	不明	繊維混入、40-3 と同一個体
40-7	Ⅰ P-57	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	沈線	ミガキ	－	
40-8	Ⅱ A-22	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	沈線	ミガキ	－	
40-9	Ⅰ H-29	Ⅱ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	沈線	ミガキ	－	平口縁
40-10	Ⅱ S-17	Ⅱ層	縄文土器	鉢	－	－	－	沈線、LR	ミガキ	－	小波状口縁、40-11 と同一個体
40-11	Ⅱ S-17	Ⅱ層	縄文土器	鉢	－	－	－	沈線、LR	ミガキ	－	40-10 と同一個体
41-1	Ⅰ X-22	Ⅱ層	土師器	甕	13.2	－	(12.5)	ロクロ	ロクロ	－	
41-2	ⅠX-22・ⅡA-22	Ⅱ層	土師器	甕	(12.3)	－	(6.0)	ロクロ	ロクロ	－	
41-3	Ⅰ N-61	Ⅱ層	土師器	甕	－	(7.0)	(4.5)	ケズリ	ナデ、黒色処理？	ナデ	摩滅
41-4	Ⅱ G-19	Ⅱ層	土師器	甕	－	(7.6)	(5.2)	ケズリ、ナデ	ナデ	ケズリ、ナデ	
41-5	Ⅱ W-16	Ⅰ層	須恵器	甕	(18.0)	－	(18.3)	ロクロ、タタキ	ロクロ、ナデ	－	刻書、自然釉、内面火ハジケ
41-6	Ⅰ O-26	Ⅱ層	須恵器	坏	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	刻書
41-7	Ⅱ W-16	Ⅰ層	須恵器	甕	(22.6)	－	(10.8)	ロクロ、タタキ	ロクロ、ナデ	－	自然釉、内面火ハジケ、41-9 と同一個体
41-8	Ⅱ L-18	Ⅱ層	須恵器	鉢	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	刻書
41-9	Ⅱ W-16	Ⅰ層	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	ナデ	－	41-7 と同一個体
41-10	Ⅱ L-18	Ⅱ層	須恵器	甕	－	－	－	タタキ	ナデ	－	
41-11	Ⅳ A-23	攪乱	土師器	ミニ	－	(2.2)	3.5	指痕	ナデ	刻み	
41-12	Ⅰ X-22	Ⅱ層	土師器	ミニ	－	－	－	指痕、ケズリ	ナデ	－	

測定値の口径・底径の（　）は推定値を、高さの（　）は実測値を示す

石器観察表

図番号	出土位置	層　位	器　種	計　測　値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石　質	備　考
7-7	SI-01	堆積土	磨製石斧	4.1	9.0	2.0	110.1	珪質頁岩	
7-8	SI-01	床直	敲石	5.0	8.3	4.7	129.9	安山岩	
11-9	SD-23	２層	磨・敲石	(9.2)	(10.6)	4.7	(329.4)	流紋岩	
11-10	SD-24	堆積土	磨石	(6.1)	5.9	2.2	(79.1)	流紋岩	
12-1	SI-05	堆積土	砥石	(4.9)	(7.9)	(4.6)	(202.7)	凝灰岩	敲打痕
18-6	SI-09 ピット１	堆積土	磨石	(14.4)	(11.1)	(9.7)	(796.3)	流紋岩	
21-2	SK-06	底面	砥石	(7.9)	(9.8)	(6.6)	(204.7)	凝灰岩	敲打痕
21-3	SK-06	底面	磨石	(3.7)	(9.4)	(4.0)	(106.4)	流紋岩	
26-1	SD-11	堆積土	砥石	(10.5)	(15.5)	10.5	(1003.3)	流紋岩	敲打痕
33-6	SD-43	堆積土	石製品	3.3	5.9	2.4	21.6	凝灰岩	黒色物質付着
38-3	SE-01	堆積土上層	砥石	(6.3)	9.9	8.0	(436.6)	流紋岩	敲打痕
40-12	Ⅲ Y-32	風倒木	剥片	4.3	2.9	1.0	6.7	珪質頁岩	
40-13	Ⅲ Y-32	風倒木	剥片	3.0	5.0	1.3	9.9	珪質頁岩	
40-14	Ⅲ Y-34	Ⅲ層	剥片	3.6	3.5	1.1	6.7	珪質頁岩	
40-15	Ⅲ Y-32	風倒木	剥片	3.6	3.5	0.9	6.6	珪質頁岩	
40-16	Ⅰ N-61	Ⅱ層	石核	11.7	9.4	6.0	429.0	珪質頁岩	
40-17	Ⅰ P-57	Ⅱ層	磨石	8.5	11.5	4.3	(485.4)	流紋岩	

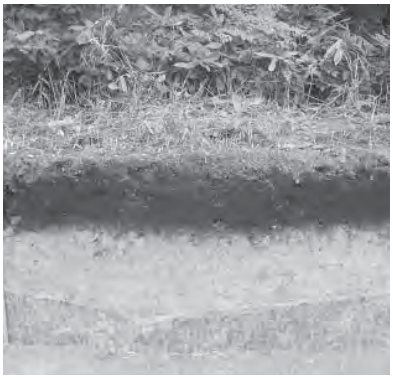
鉄製品観察表

図番号	出土位置	層　位	器　種	計　測　値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備　考
34-5	SD-41	B-Tm 層	手鎌	(4.0)	2.4	1.2	(3.5)	木質部残存

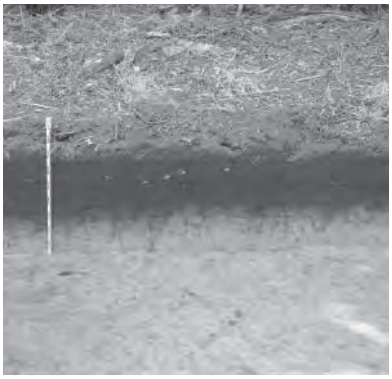
土製品観察表

図番号	出土位置	層　位	種　類	計　測　値（cm） 長　さ	幅	厚　さ	備　考
29-7	SD-16	確認面	円盤状	2.8	2.4	1.2	指痕・刻み
33-4	SD-36	堆積土	板状	3.5	3.2	1.1	指痕
33-5	SD-36	堆積土	塊状	4.8	3.4	2.8	胎土に繊維と焼土粒混入
34-6	SD-41	B-Tm 上層	塊状	3.1	2.1	1.3	指痕
42-1	Ⅱ A-21	Ⅱ層	羽口	(6.8)	(5.3)	(2.0)	外面還元、ガラス質の溶着滓付着
42-2	Ⅱ N-15	Ⅱ層	板状	(5.2)	(7.3)	2.0	外面ナデ、胎土に繊維と小礫混入
42-3	Ⅱ W-10	Ⅱ層	棒状	(3.4)	2.0	1.6	

写　真　図　版



基本層序 (A-B)N →



基本層序 (C-D)E →

基本層序 (E-F)S →

農道４号作業風景

農道４号作業風景

農道４号中央部調査終了 NW →

農道４号西側調査終了 NE →

農道 23 号作業風景

農道 23 号中央部調査終了 E →

写真１　基本層序・作業風景

第１号竪穴住居跡完掘（東半）NE →

第１号竪穴住居跡完掘（西半）SE →

第１号竪穴住居跡遺物・炭化材検出状況　SE →

第１号竪穴住居跡遺物・炭化材検出状況　SE →

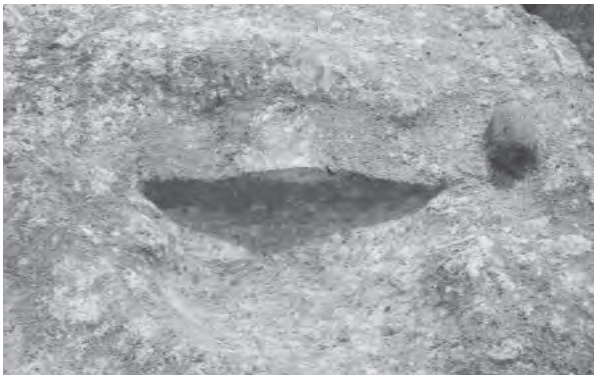
第１号竪穴住居跡遺物・炭化材検出状況　E →

第１号竪穴住居跡土層（A-B）SE →

第１号竪穴住居跡土層（C-D）SW →

第１号竪穴住居跡土層（E-F）NE →

写真２　竪穴住居跡（１）

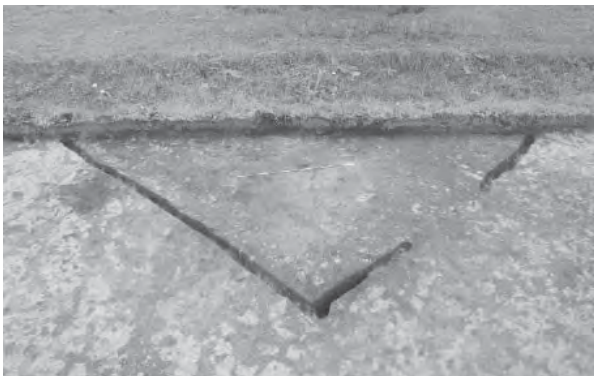


第１号竪穴住居跡 Pit1 土層 NE →

第１号竪穴住居跡 Pit1 完掘 SE →

第２号竪穴住居跡土層 (A-B) E →

第２号竪穴住居跡掘方掘削痕　E →



第３号竪穴住居跡完掘 W →

第４号竪穴住居跡・第 23 号・第 24 号溝跡完掘 NW →

第４号竪穴住居跡土層 (A-B) NW →

第 23 号溝跡土層 (C-D) N →

写真３　竪穴住居跡（２）

第 23 号・第 24 号溝跡土層（E-F）　NE →

第 23 号溝跡土層（I-J）　NW →

第６号竪穴住居跡完掘　W →

第６号竪穴住居跡土層　NW →

第６号竪穴住居跡カマド土層（A-B）NW →

第６号竪穴住居跡カマド土層（E-F）　NW →

第６号竪穴住居跡カマド完掘　NW →

第６号竪穴住居跡カマド遺物出土状況　NW →

写真４　竪穴住居跡（３）

第５号竪穴住居跡完掘 NW →

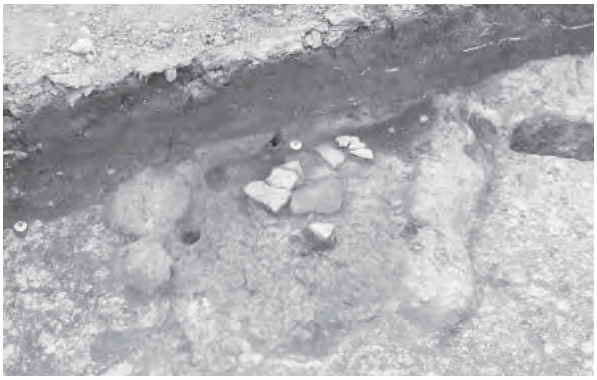
第７号竪穴住居跡・第 10 号土坑完掘 NW →

第７号竪穴住居跡土層（A-B）NE →

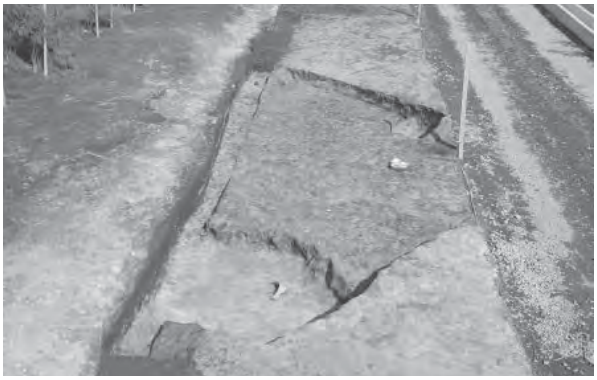
第７号竪穴住居跡焼土土層 N →

第８号竪穴住居跡完掘 NW →

第８号竪穴住居跡土層 E →



第８号竪穴住居跡カマド完掘 NW →



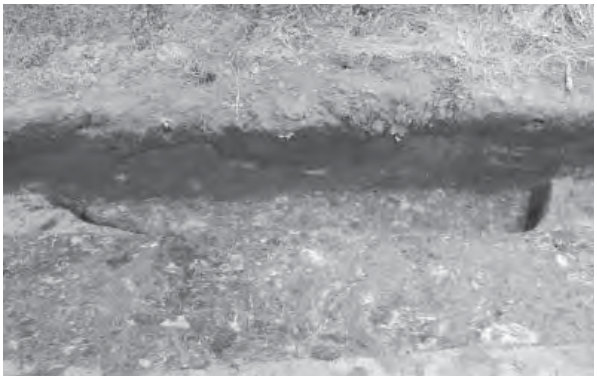
第９号竪穴住居跡完掘 W →

写真５　竪穴住居跡（４）

第９号竪穴住居跡土層（A-B）S →

第９号竪穴住居跡土坑土層 NE →

第 10 号竪穴住居跡・第 31 号・第 32 号溝跡完掘　NE →

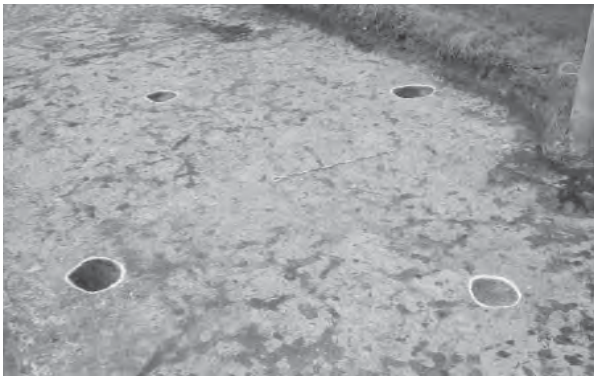


第 10 号竪穴住居跡完掘 NE →

第 31 号・第 32 号溝跡土層（C-D）NE →

第 31 号溝跡土層（G-H）SE →

第１号掘立柱建物跡完掘 NW →



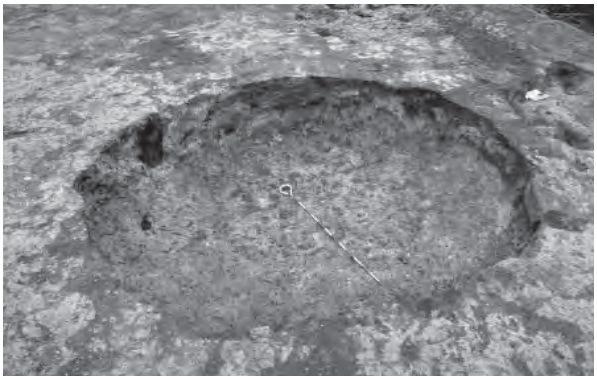
第２号掘立柱建物跡完掘 SE →

写真６　竪穴住居跡（５）・掘立柱建物跡

第２号土坑土層　SW →

第２号土坑完掘　SW →

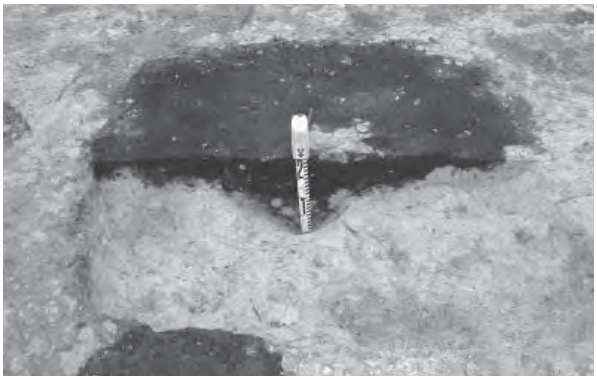
第３号土坑土層　N →



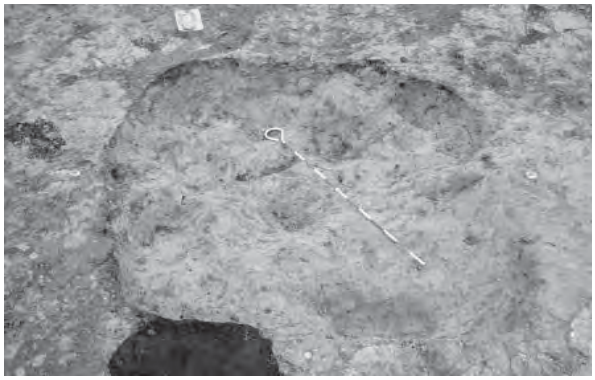
第３号土坑完掘　NE →

第４号土坑土層　NE →

第４号土坑完掘　NE →



第５号土坑土層　NE →

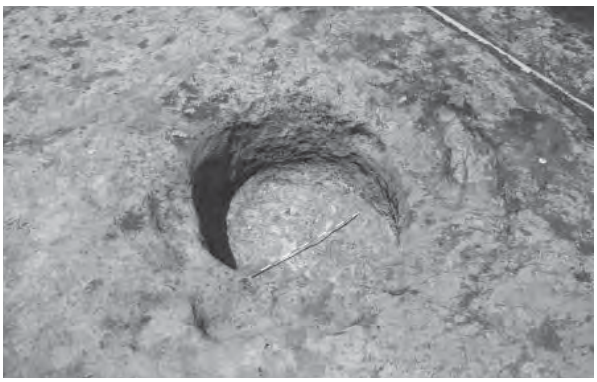


第５号土坑完掘　NE →

写真７　土坑（１）

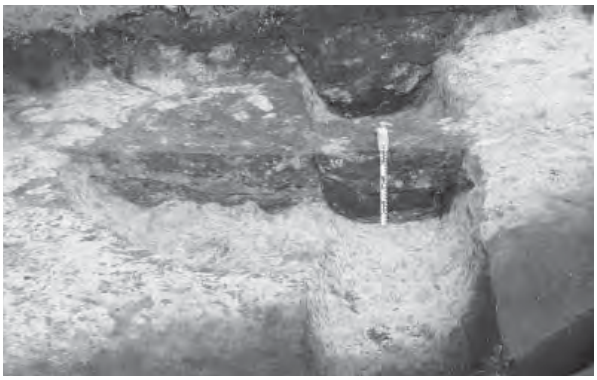
第６号土坑土層　SE →

第６号土坑遺物出土状況　SE →



第６号土坑完掘　SE →

第９号土坑土層　NE →



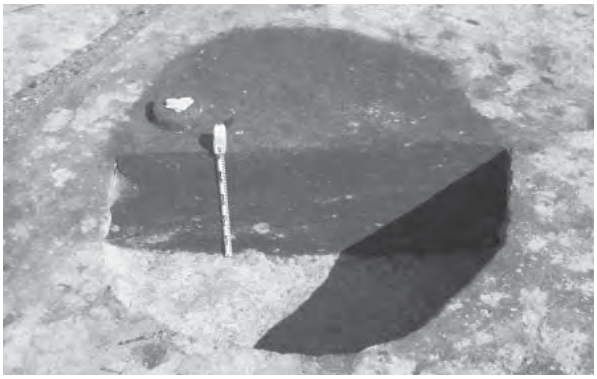
第７号土坑・第 20 号溝跡土層　S →

第７号土坑完掘　S →

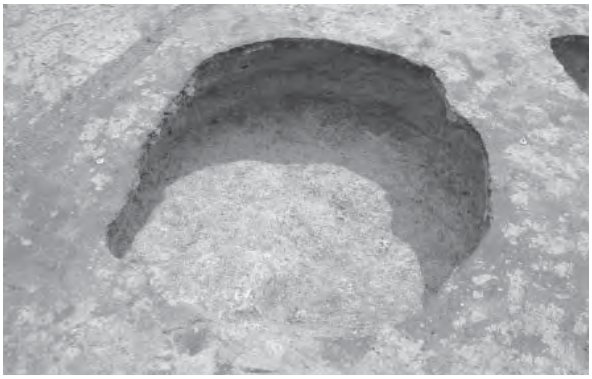
第８号土坑土層　SW →

第８号土坑完掘　S →

写真８　土坑（２）



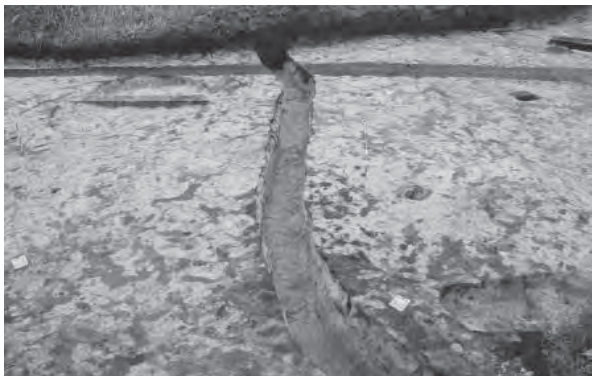
第 11号 土坑土層　NW →



第 11号 土坑完掘　NW →

第 12 号土坑完掘　SE →

第２号溝跡完掘　NW →



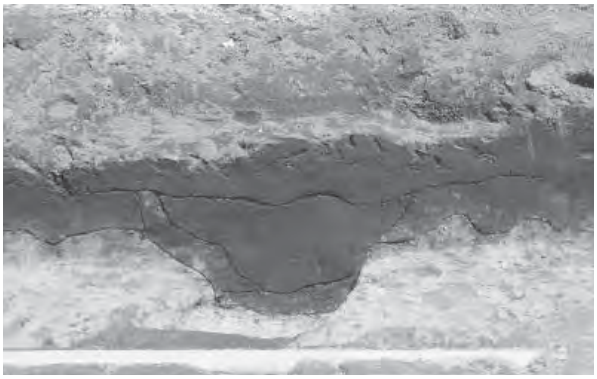
第３号溝跡完掘　N →

第４号溝跡完掘　N →

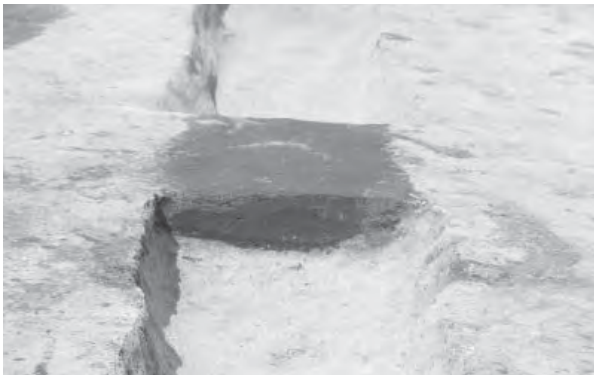
第５号溝跡完掘　S →

第６号・第７号溝跡完掘　NE →

写真９　土坑（３）・溝跡（１）



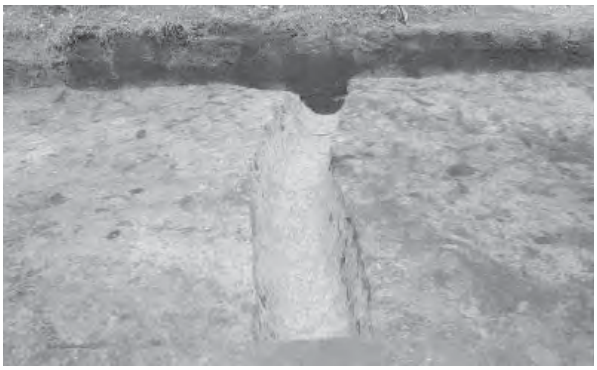
第６号溝跡土層（A-B）　S →



第７号溝跡土層（E-F）　NE →

第８号溝跡完掘　NW →

第８号溝跡土層　N →



第 10 号溝跡完掘（北半）　S →

第 12 号・第 13 号溝跡土層（C-D）　NW →

第 13 号溝跡土層　E →

第 14 号・第 18 号溝跡完掘（北半）　SE →

写真 10　溝跡（２）

第 14 号・第 18 号溝跡土層 (A-B)　SE →

第 18 号溝跡土層 (C-D)　NW →

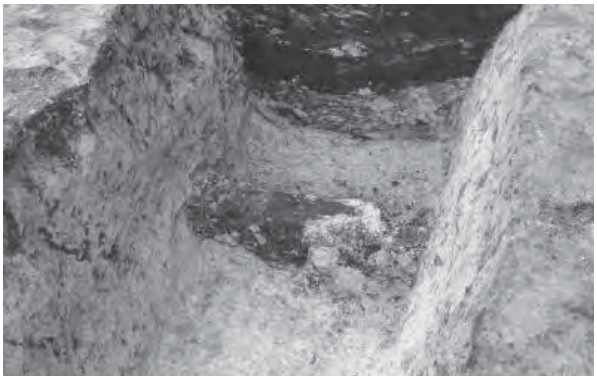
第 18 号溝跡 B-Tm 検出状況　S →

第 15 号・第 17 号溝跡完掘　SE →

第 15 号溝跡土層　S →

第 16 号 溝跡完掘（北半）　NE →

第 16 号溝跡土層 (C-D)　E →

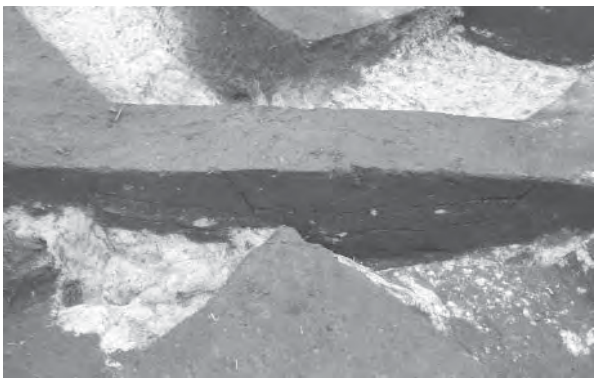


第 16 号溝跡土層 (G-H)　SW →

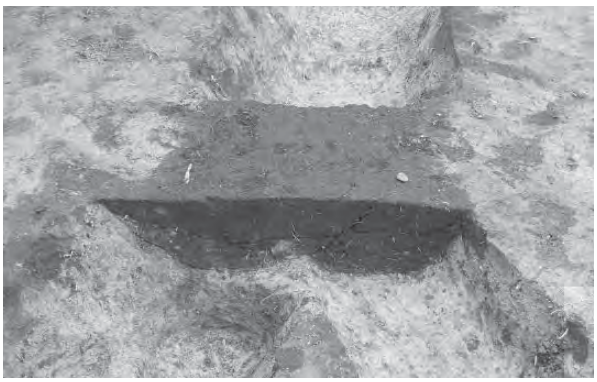
写真 11　溝跡（3）

第 16 号溝跡土層 (E-F)　NE →

第 19 号・第 20 号・第 21 号溝跡完掘　SE →



第 19 号・第 20 号溝跡土層 (C-D)　NW →



第 19 号・第 21 号溝跡土層 (E-F)　NW →

第 28 号溝跡 B-Tm 検出状況　NW →

第 28 号溝跡完掘　NW →

第 27 号溝跡完掘　N →

第 29 号溝跡完掘　N →

写真 12　溝跡（4）

第 35 号溝跡完掘　SE →

第 35 号溝跡遺物・焼土・火山灰検出状況　NE →

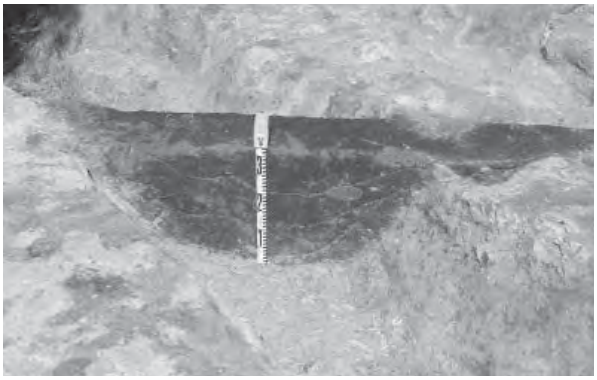
第 35 号溝跡土層 (E-F)　E →

第 36 号・第 43 号溝跡完掘（南半）　N →

第 36 号・第 43 号溝跡土層 (E-F)　N →

第 43 号溝跡土層 (C-D)　NE →

第 37 号・第 38 号・第 39 号溝跡完掘（北半）S →



第 38 号・第 39 号溝跡土層 (E-F)　SW →

写真 13　溝跡（5）

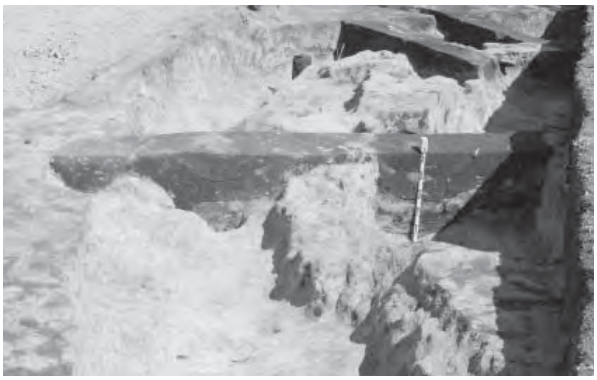
第 34 号溝跡完掘　S →

第 40 号・第 41 号・第 42 号溝跡完掘　SW →

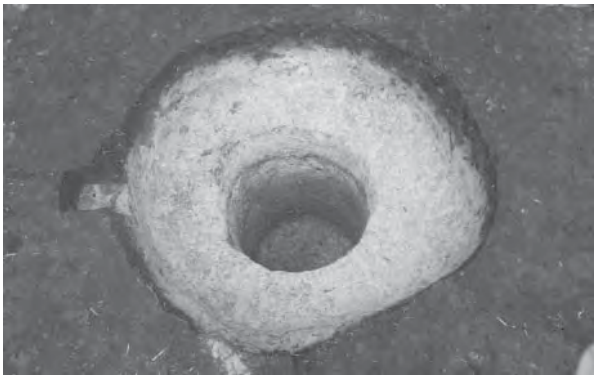
第 41 号溝跡土層（A-B 東側）　W →

第 41 号溝跡土層（A-B 西側）　N →

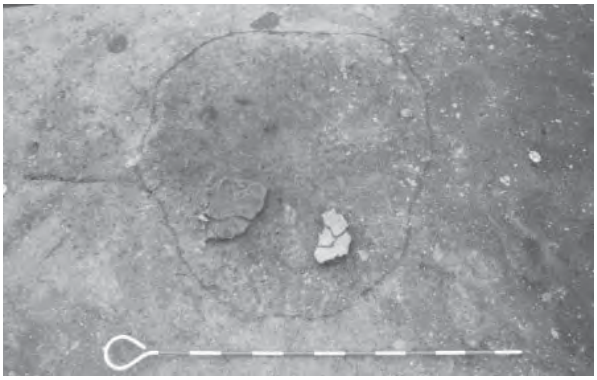
第 42 号溝跡土層（A-B 西側）　NW →



第 41 号・第 42 号溝跡土層（E-F）　S →



第 1 号井戸跡完掘　NW →



第 1 号焼土跡検出　E →

写真 14　溝跡（6）・井戸跡・焼土跡

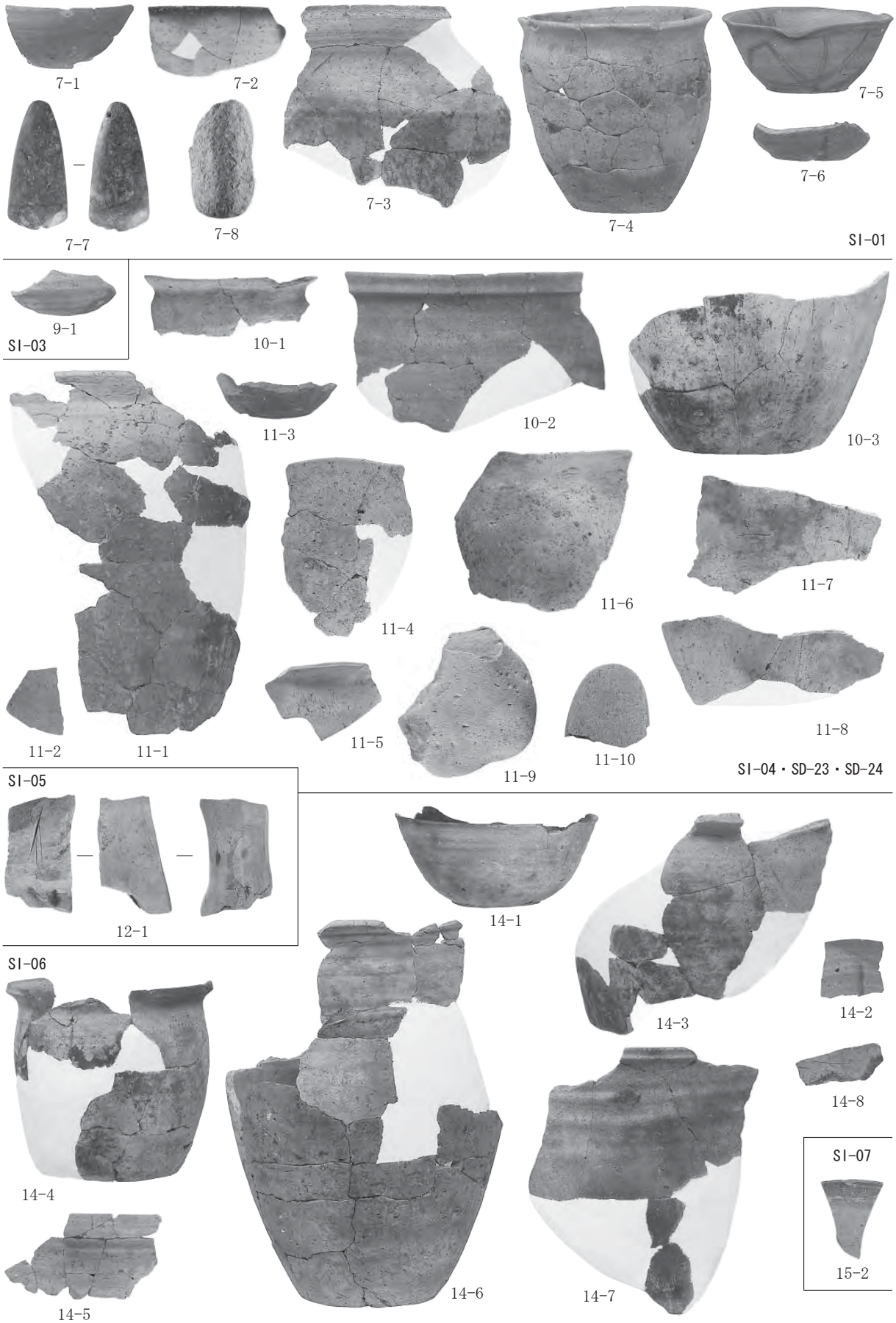

7-1
7-2
7-3
7-4
7-5
7-6
7-7
7-8
SI-01
9-1
SI-03
10-1
10-2
10-3
11-1
11-2
11-3
11-4
11-5
11-6
11-7
11-8
11-9
11-10
SI-04・SD-23・SD-24
SI-05
12-1
SI-06
14-1
14-2
14-3
14-4
14-5
14-6
14-7
14-8
SI-07
15-2

写真 15　出土遺物（1）

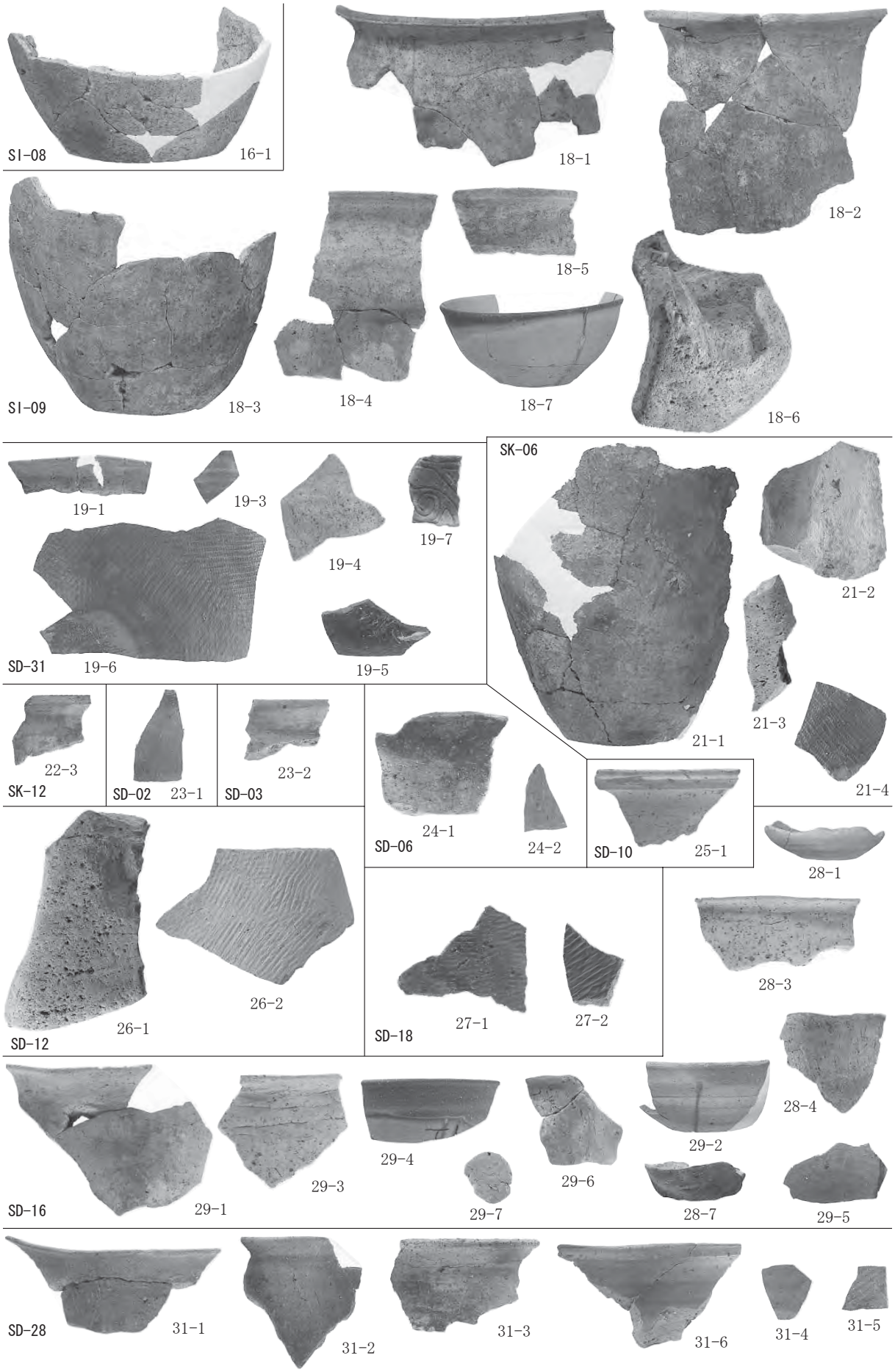

SI-08
16-1
18-1
18-2
SI-09
18-3
18-4
18-5
18-7
18-6
19-1
19-3
19-4
19-7
SD-31
19-6
19-5
SK-06
21-1
21-2
21-3
21-4
22-3
SK-12
SD-02
23-1
23-2
SD-03
24-1
SD-06
24-2
SD-10
25-1
28-1
26-1
26-2
SD-12
27-1
27-2
SD-18
28-3
28-4
29-1
29-3
29-4
29-6
29-2
29-7
28-7
29-5
SD-16
SD-28
31-1
31-2
31-3
31-6
31-4
31-5

写真 16　出土遺物（２）

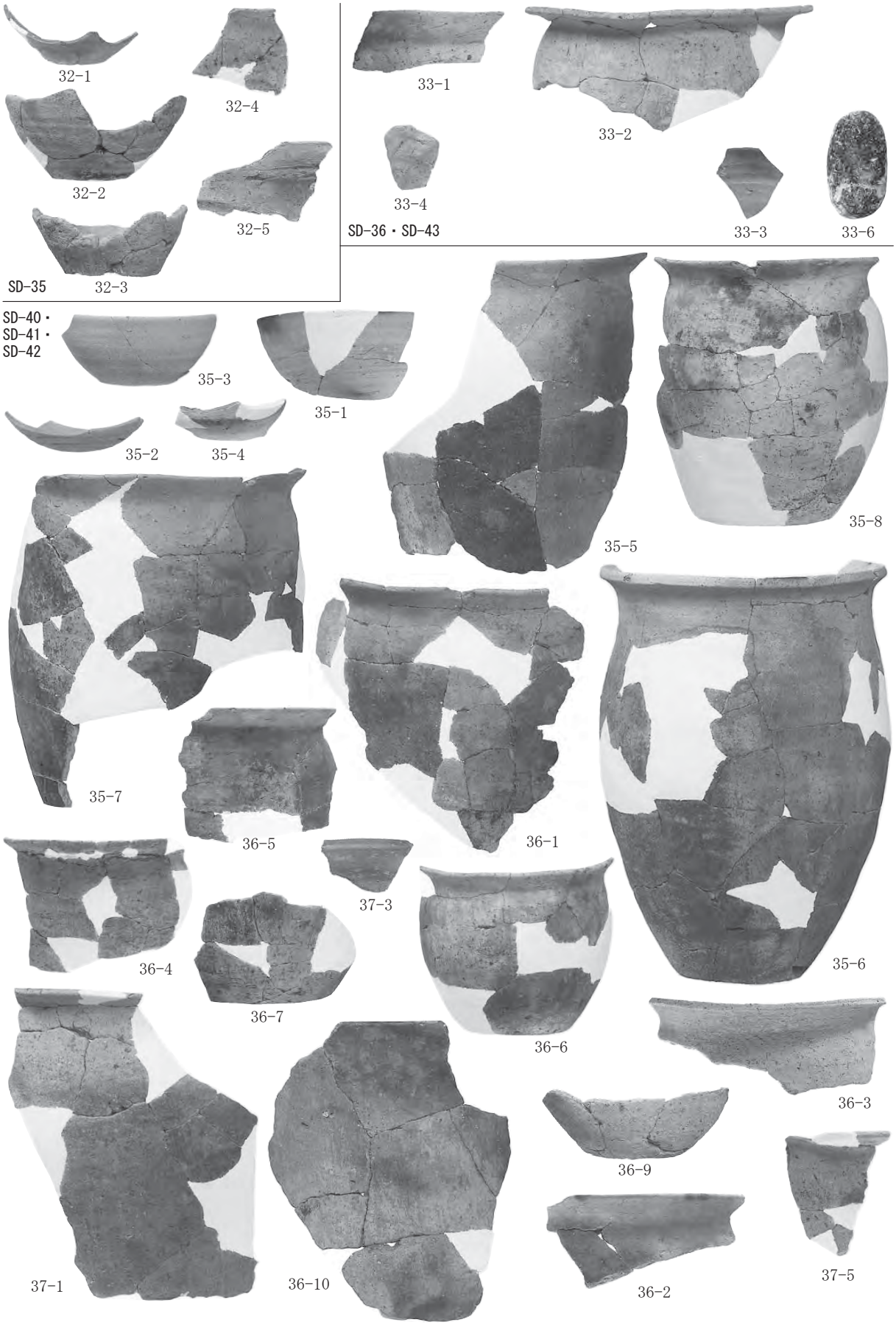

32-1
32-4
32-2
32-5
32-3
SD-35
33-1
33-2
33-4
33-3
33-6
SD-36・SD-43
SD-40・
SD-41・
SD-42
35-3
35-1
35-2
35-4
35-5
35-8
35-7
36-5
36-1
35-6
37-3
36-4
36-7
36-6
36-3
36-9
37-1
36-10
36-2
37-5

写真 17　出土遺物（3）

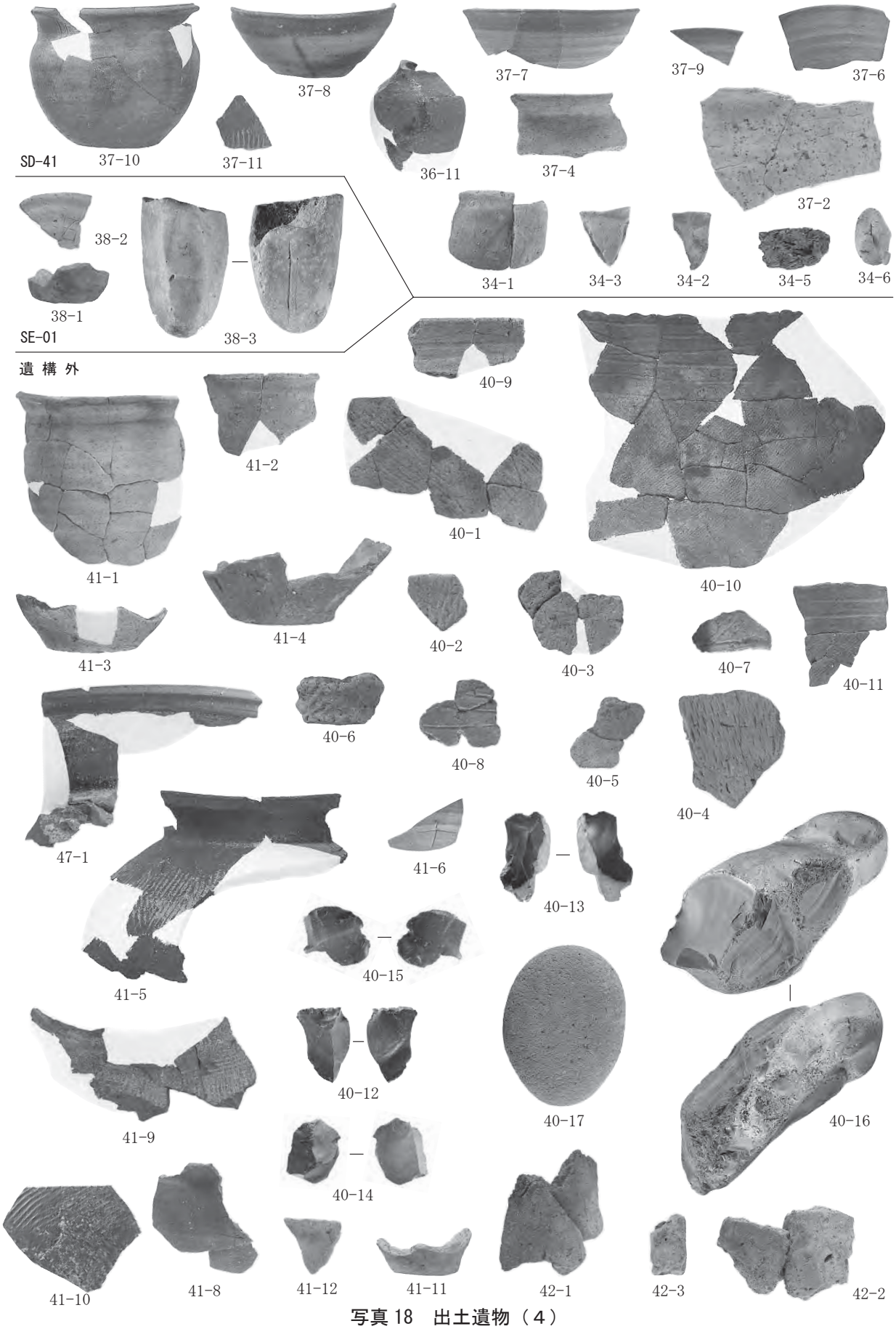
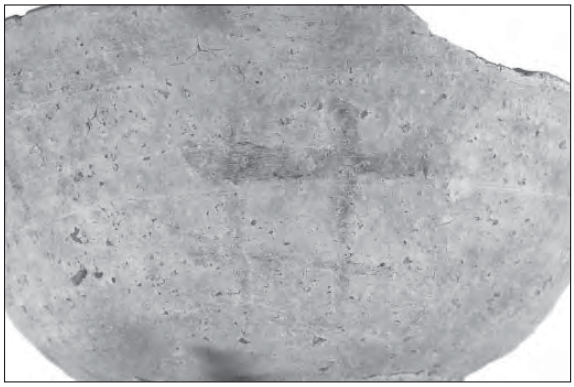
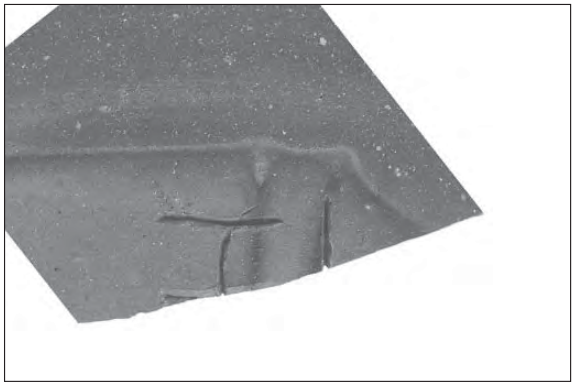
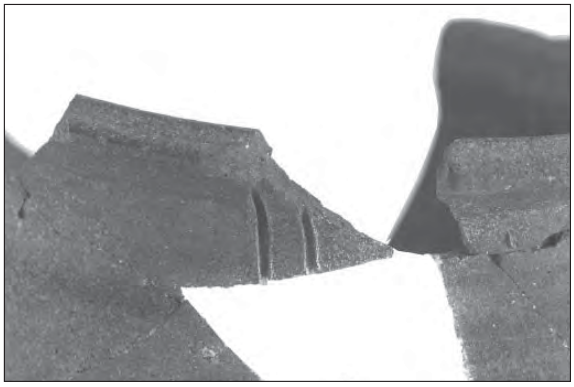

SD-41
37-10
37-8
37-11
36-11
37-7
37-4
37-9
37-6
37-2
38-2
38-1
38-3
SE-01
34-1
34-3
34-2
34-5
34-6
遺 構 外
40-9
41-2
41-1
40-1
40-10
41-3
41-4
40-2
40-3
40-7
40-11
40-6
40-8
40-5
40-4
47-1
41-6
40-13
41-5
40-15
40-12
40-17
40-16
41-9
40-14
41-10
41-8
41-12
41-11
42-1
42-3
42-2

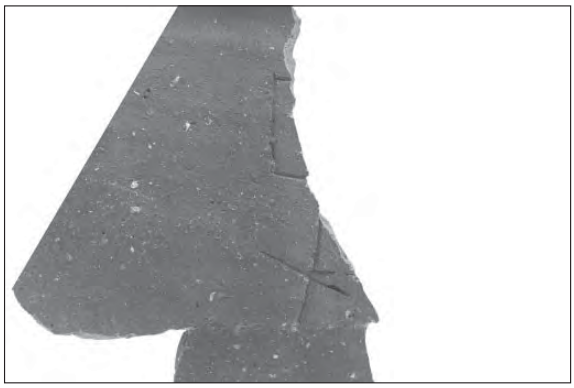
写真 18　出土遺物（4）

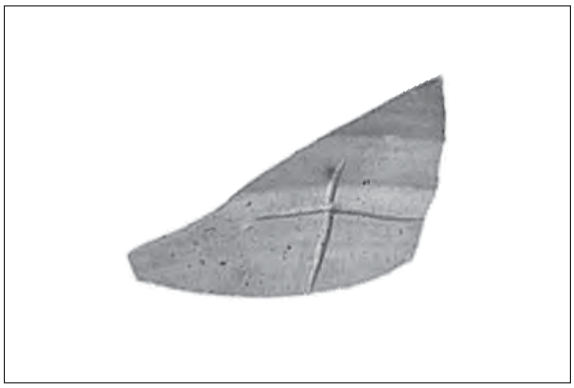

14-1

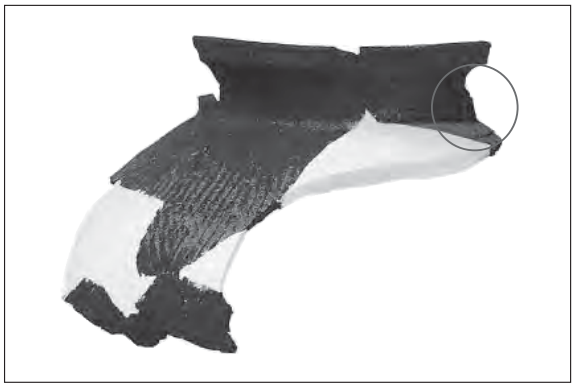
38-2


29-4


37-10


41-8


41-6


41-5

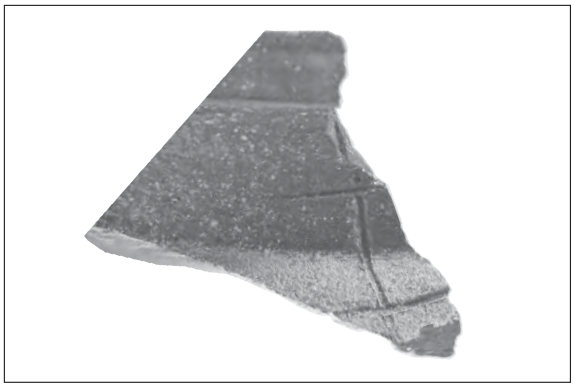

41-5

写真 19　墨書・刻書

報　告　書　抄　録

ふりがな	てらやしきたいいせき
書名	寺屋敷平遺跡
副書名	浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第４５０集
編著者名	佐々木　雅裕　・　田中　珠美
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内 152 － 15　　TEL　017 － 788 － 5701
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	西暦２００８年３月７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系（Tokyo Datum）		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
寺屋敷平遺跡（てらやしきたい）	青森県（あもりけん） 青森市浪岡（あおもりしなみおか） 大字吉野田（おおあざよしのだ） 字荷越沢（あざにこしざわ）	0229	29059	40°44′15″	140°33′50″	20060420 ～ 20060929	6,000	浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う事前調査
				世界測地系（ＪＧＤ 2000）				
				北緯	東経			
				40°43′56″	140°33′41″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺屋敷平遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器 （早～前・後・晩期） 石器 （剥片・磨石・敲石・磨製石斧）	
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　10軒 掘立柱建物跡　３棟 土坑　11基 井戸跡　１基 溝跡　40条 焼土跡　１基	土師器 須恵器 石器 （砥石） 土製品 （羽口、ミニチュア土器） 鉄製品 （手鎌）	白頭山火山灰降下前後の集落跡。 外周溝が巡る住居跡を２軒検出。 墨書土器・刻書土器（土師器・須恵器）が出土。

要約	寺屋敷平遺跡は、縄文時代の散布地および平安時代の集落跡であることがわかった。 縄文時代の遺物量は少なく、比較的狭い範囲からまとまって出土する傾向が見られる。 検出された遺構の多くは、平安時代に属すると考えられるが、道路幅での調査のため、詳細については明らかでないものが多い。竪穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑は調査区中央部に点在するのに対して、溝跡は調査区西側の緩傾斜地に構築されるものが多いが、全体的には遺構の分布は疎らで、重複も少ない。竪穴住居跡や溝跡には、白頭山火山灰が堆積しているものもあり、遺構の状況や出土遺物から、白頭山火山灰降下前後の９世紀末～ 10 世紀前半を中心とする、比較的短期間に営まれた集落跡と考えられる。出土遺物では、墨書土器が住居床面から出土している。このほかに、刻書のみられる土師器・須恵器も出土している。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第450集

寺屋敷平遺跡

― 浪岡野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 ―

発行年月日　2008年３月７日
発　　行　青森県教育委員会
〒030-8540　青森市新町２丁目３－１
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042　青森市新城字天田内152－15
TEL　017-788-5701　　FAX　017-788-5702
印　　刷　不二印刷工業株式会社
〒030-0902　青森市合浦１丁目10－16
TEL　017-741-5439　　FAX　017-741-2541